

さつき会 60 周年記念企画

東大女性の実態調査
～キャリア・生活・意識～



令和5年（2023年）4月30日
さつき会

本アンケート報告はさつき会創立 60 周年記念事業「第 2 回東大卒女性の生活と意識に関する実態調査」の結果について、さつき会がとりまとめたものです。本報告の著作権は、さつき会に帰属しており、本報告書の全部または一部の無断複製等の行為は、法律で認められる場合を除き、著作権の侵害に当たります。引用を行う際には、必ず出所を明示（例：さつき会 60 周年記念企画「東大女性の実態調査～キャリア・生活・意識～」、p##、等）するようにお願いします。

本報告についてのお問い合わせはさつき会ホームページ <https://www.satsuki-kai.net> のお問い合わせ先にご連絡ください。

概要

本アンケート調査はさつき会創立 60 周年記念事業「第 2 回東大卒女性の生活と意識に関する実態調査」として実施し、さつき会員の他、東京大学女子卒業生・女子学生の皆様にもご協力いただきました。アンケートの項目は 50 周年記念事業「第 1 回東大卒女性の生活と意識に関する実態調査」を踏襲しつつ、その後の時代変化等も考慮し、いくつか新たな項目も設けました。東京大学への女子入学生の比率は総数で 20%前後の状況が 15 年以上続いております。その背景には、長年の社会情勢から、女子が東京大学に入ることにについてのメリットがみえないこともあったのではと推察されます。本調査では現に東京大学に入学して学んだ女性たちの、「東京大学の受験を決めたモチベーション、また大学に入った後どのように考え、どのような人生を歩んだか」等を浮き彫りにすることを目的に企画いたしました。是非、数字から読み取っていただければと思います。

調査内容

- ・実施者 : さつき会
- ・実施期間 : 2021 年 4月1日～7月31日
- ・対象者 : 東京大学女性卒業生の会さつき会会員を含む任意の東京大学在学中・卒業女性
- ・実施方法 : インターネットからの回答、・全 42 問
- ・有効回答数 : 361

	人数
第Iコホート(1955-1964卒)	20
第IIコホート(1965-1974卒)	36
第IIIコホート(1975-1985卒)	80
第IVコホート(1986-1992卒)	71
第Vコホート(1993-1998卒)	62
第VIコホート(1999-2006卒)	30
第VIIコホート(2007-2021卒)	62
全体	361

アンケート報告の構成

- ・Part. 1 『回答者のプロフィール』『東大入学について』『家庭環境など』
- ・Part. 2 仕事
- ・Part. 3 パートナー・結婚・生活
- ・Part. 4 社会活動全般
- ・Part. 5 収入
- ・Part. 6 大学時代
- ・自由記述
- ・分析報告__東大卒女性と結婚—その神話と実態—

本アンケート調査・報告書の作成は以下のメンバーが担当しました。

60 周年記念委員会委員長：金澤亮子（1992 文）

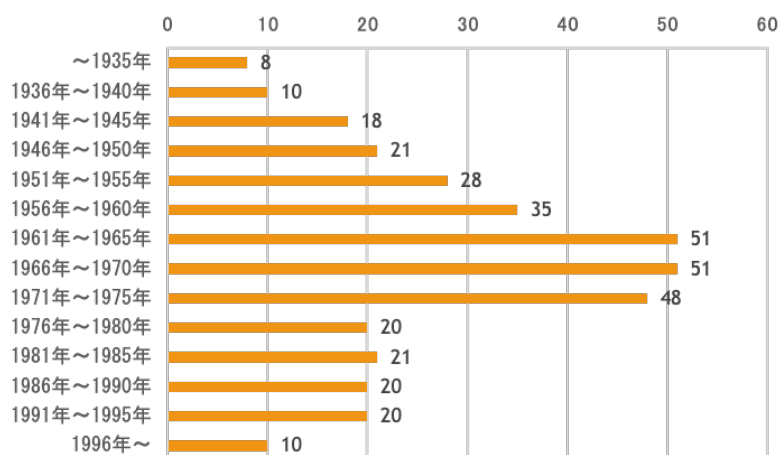
アンケート企画・集計・分析：筑本知子（1988 工）・竹内美晴（2018 文）・細田満和子（1992 文）

協力：鶴瀬恵子（1977 経）・三塚典子（1980 養）・井原圭子さん（1988 公法）

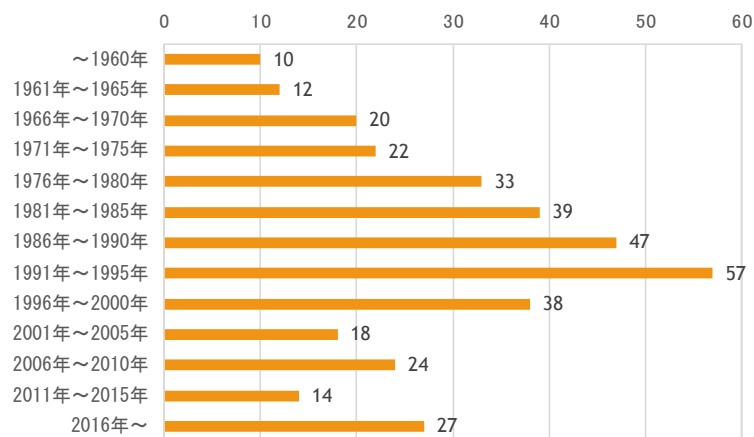
Part 1

『回答者のプロフィール』

Q1 あなたは（西暦）何年に生まれましたか？



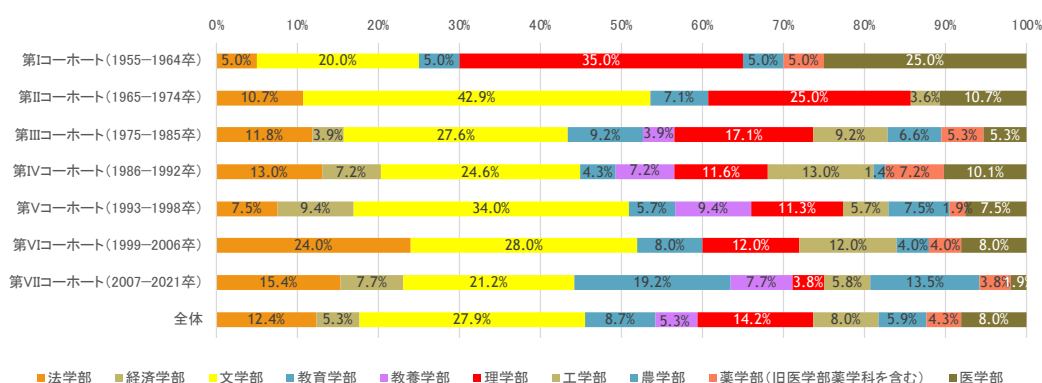
Q2-a あなたは（西暦）何年に学部を卒業しましたか（東大／東大以外を問いません）。



各コーホートに属する人数

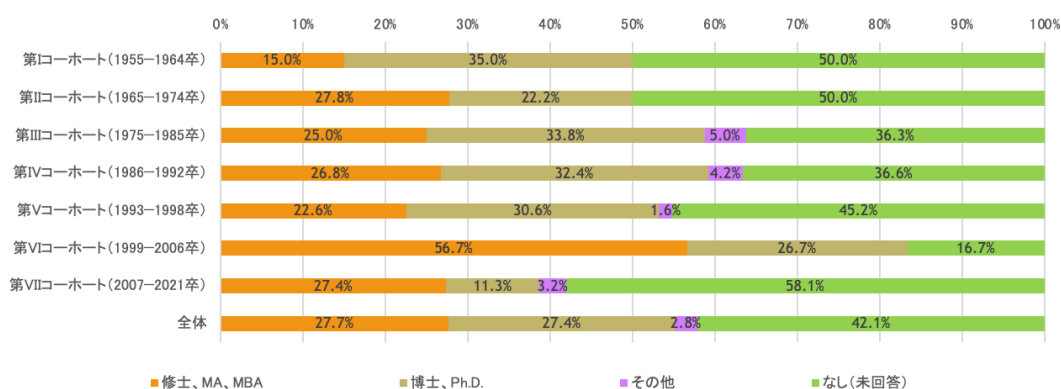
	人数
第Ⅰコーホート(1955-1964卒)	20
第Ⅱコーホート(1965-1974卒)	36
第Ⅲコーホート(1975-1985卒)	80
第Ⅳコーホート(1986-1992卒)	71
第Ⅴコーホート(1993-1998卒)	62
第Ⅵコーホート(1999-2006卒)	30
第Ⅶコーホート(2007-2021卒)	62
全体	361

Q2-b 東大学部卒の方にお伺いします。何学部を卒業しましたか。



全体的には文系がやや多い。最も多いのは文系の27.9%である。

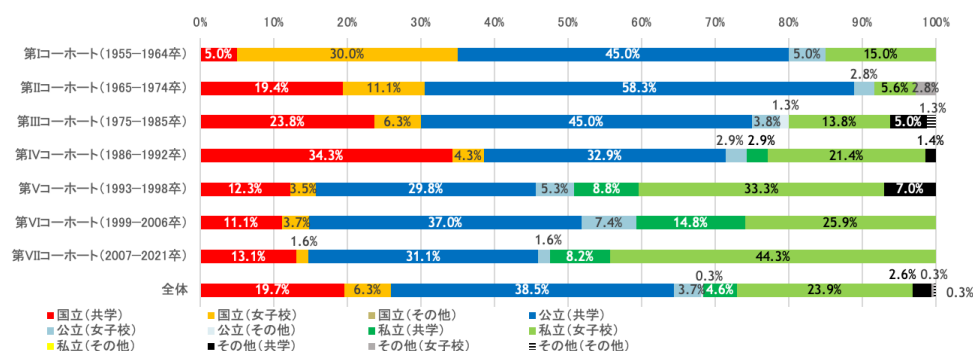
Q3 その他に取得した学位があれば、その最終学歴を教えてください。(留学を含む)



修士以上の学位を持つ人が半数を超えている。

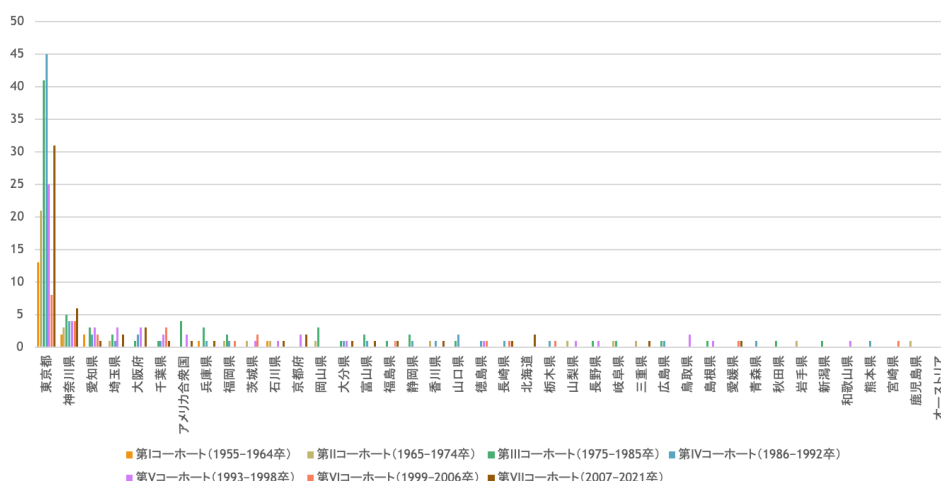
『出身校の状況』

Q4-a あなたが東大入学直前に卒業した学校は、次のどれに当てはまりますか。(東大学部卒の方)
(中学・高校を卒業されたのち就労やその他期間を開けて入学された方は「その他」の行を選択ください。)



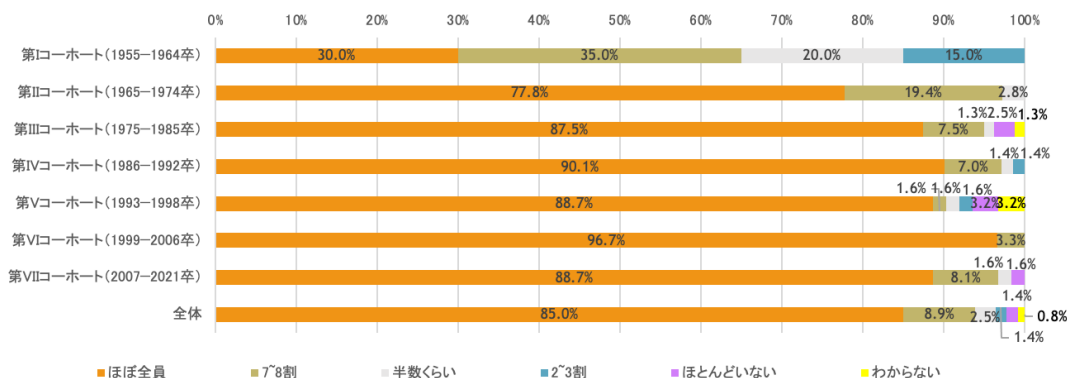
全体では共学出身が65.4%と多数派。また、国公立出身も68.5%と多数派であった。一方、世代が下になるにつれて私立女子校出身者の比率も高まっている。

Q4-b その学校の所在地について（東大学部卒の方）



どの年代も圧倒的に東京都からの進学がほとんどであった。2位に神奈川県、3位に愛知県が続くが、東大女子学部生は首都圏一極集中と言っても過言ではない状況だ。あるいは東京の学校が東大に特化した「受験校」化している可能性もある。

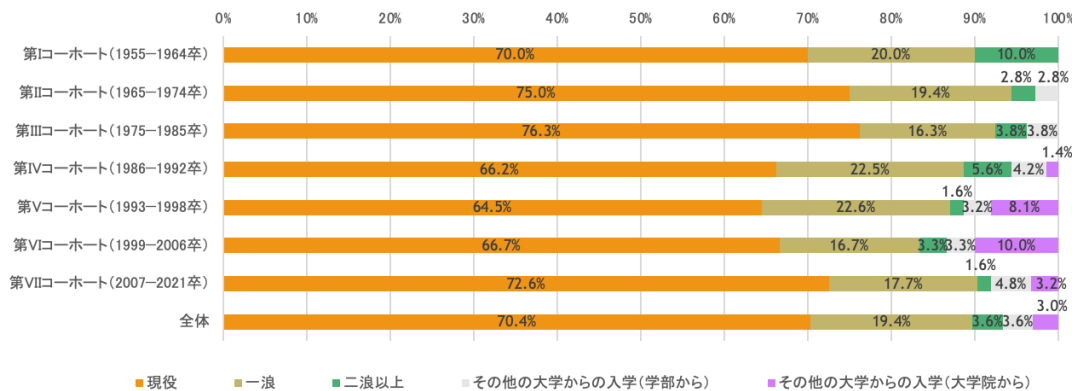
Q4-c あなたの同級生の中で、大学や短大に進学した人はどのくらいいましたか。



第一世代以外はほとんどが進学している。女性の大学進学率も上昇していることもあるが、周囲は進学が当たり前の環境で学んでいた人が多い。

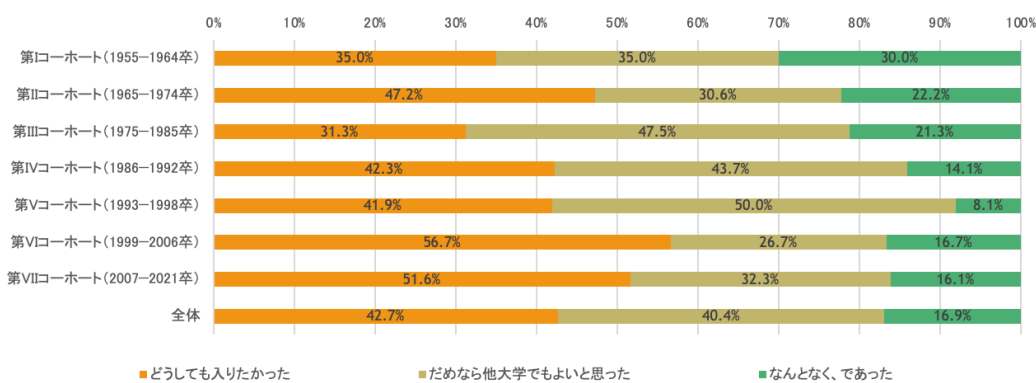
『東大入学について』

Q5-a 東大入学前のことについて伺います。東大に入るのに「現役」でしたか。



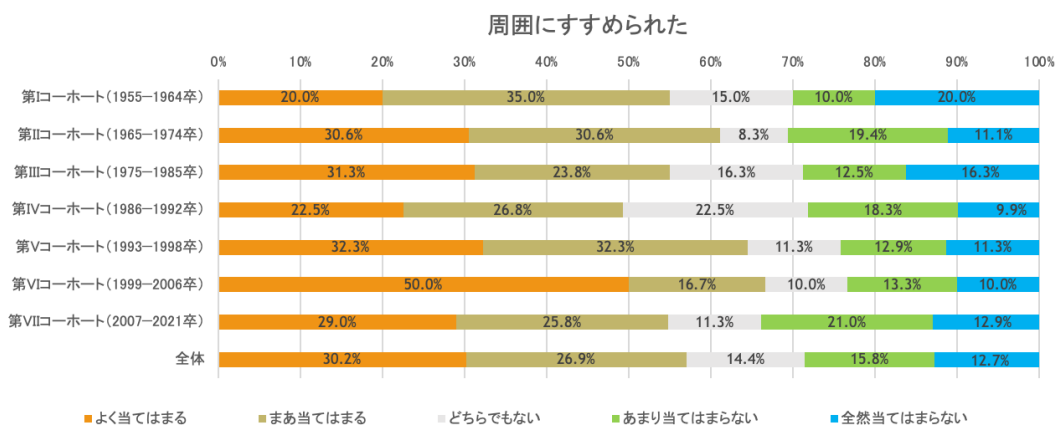
あまり世代で変わらないが、若い世代は編入も多い。現役が 70.4%と非常に多く、二浪以上は 5%以下。女性が浪人を避ける傾向は東大でもありそうだ。

Q5-b 東大入学をどの程度希望していましたか？

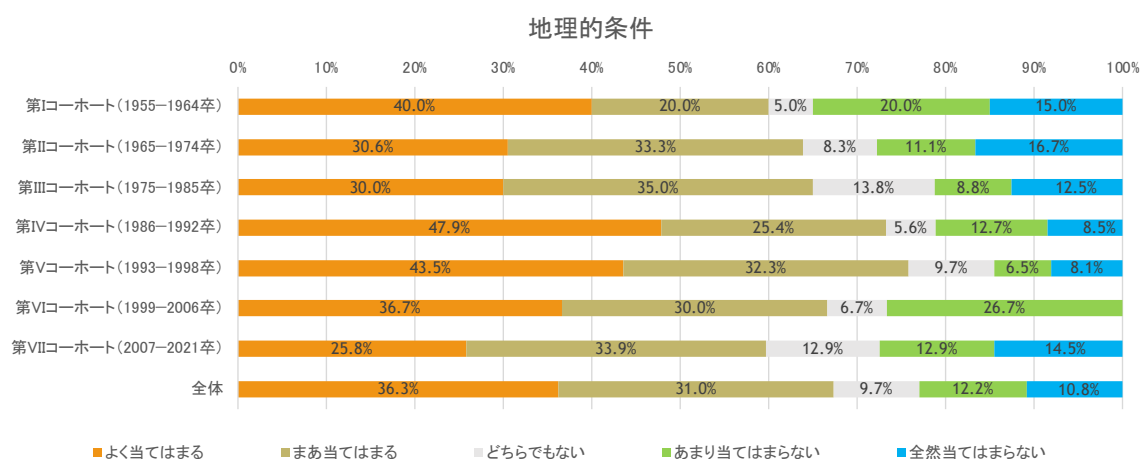


傾向としては若い世代の方が東大への志望度は高くなる傾向がありそうだ。ブランドとしての「東大」の魅力度は低くなく、むしろ受験生にとって強い動機となっている可能性がある。

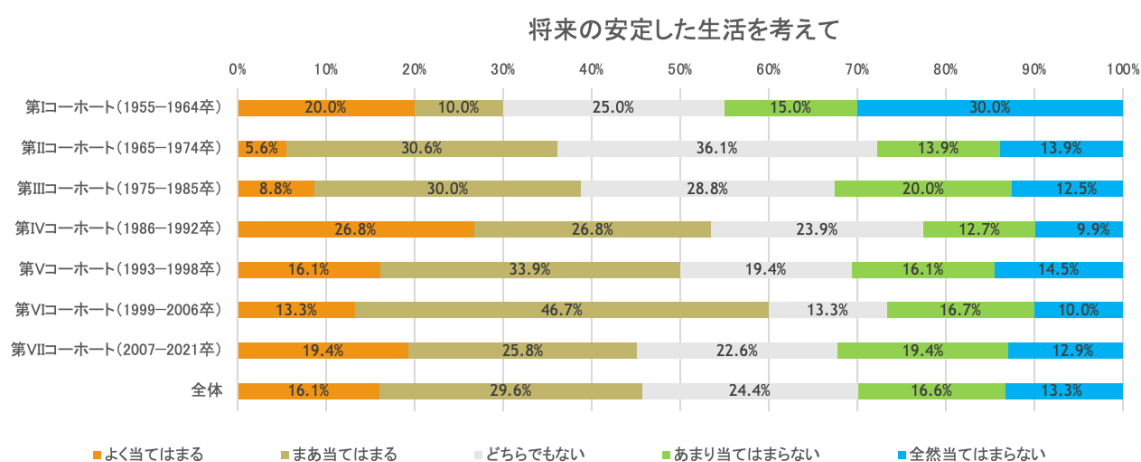
Q5-c 東大入学の動機はなんですか。



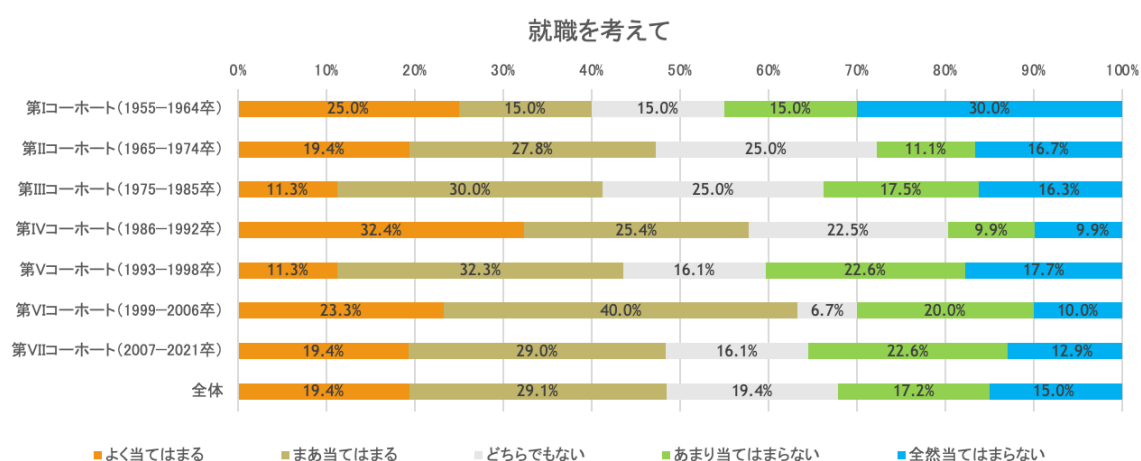
東大受験を周囲に勧められたのは全体の過半数を超えている。



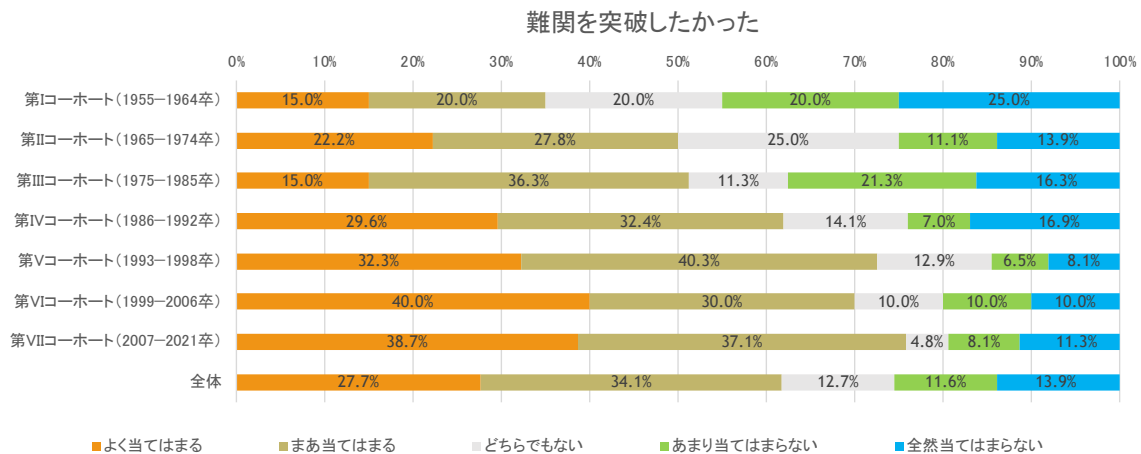
地理的条件については7割近くが当てはまると回答した。近場や都会といった条件が魅力の1つとして機能していることがうかがえる。



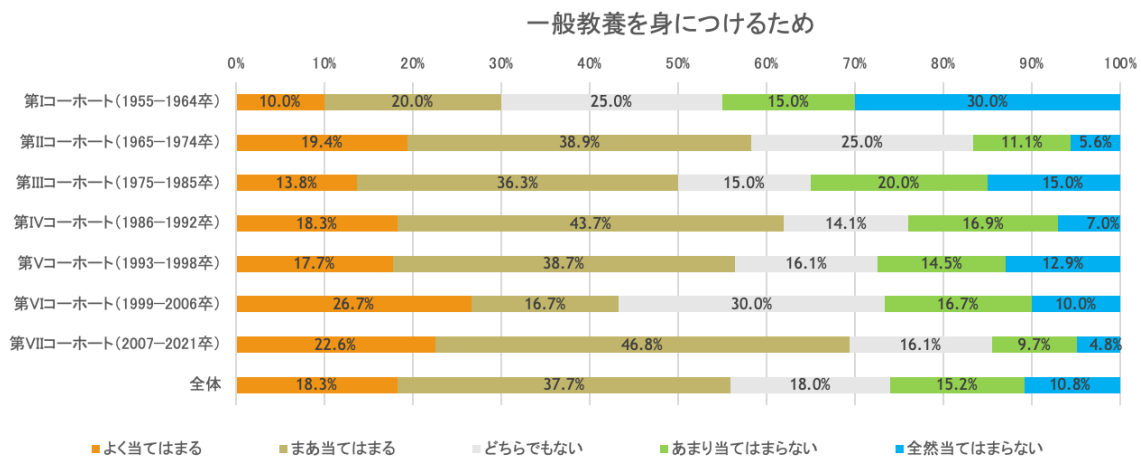
将来の安定を考えて受験したと言う人は半数に満たなかった。



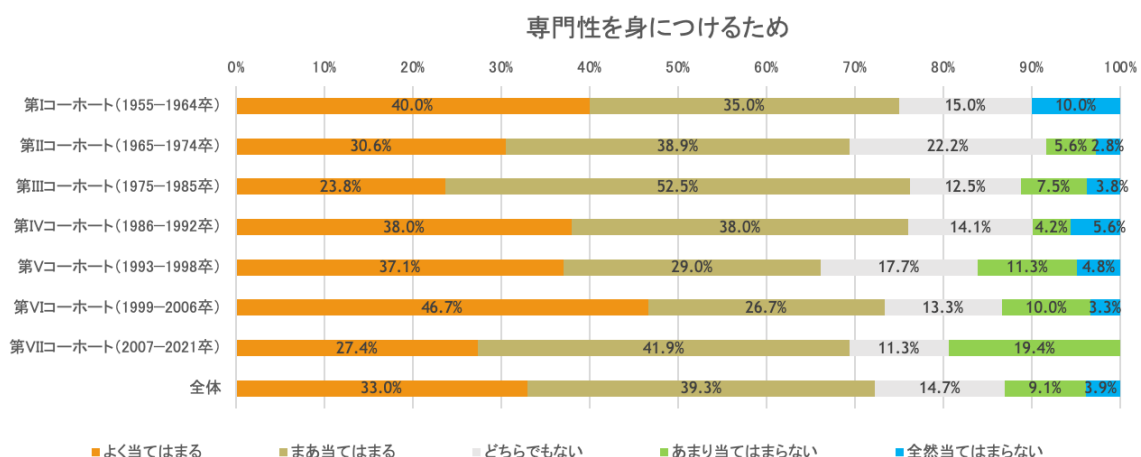
就職を考えての受験も動機としては半数以下であった。



難関突破を動機にしている学生は世代が下になるほど増加し、全体でも 6 割以上、第VIIコーホートでは 75.8%もの学生が難関突破を魅力に感じていた。

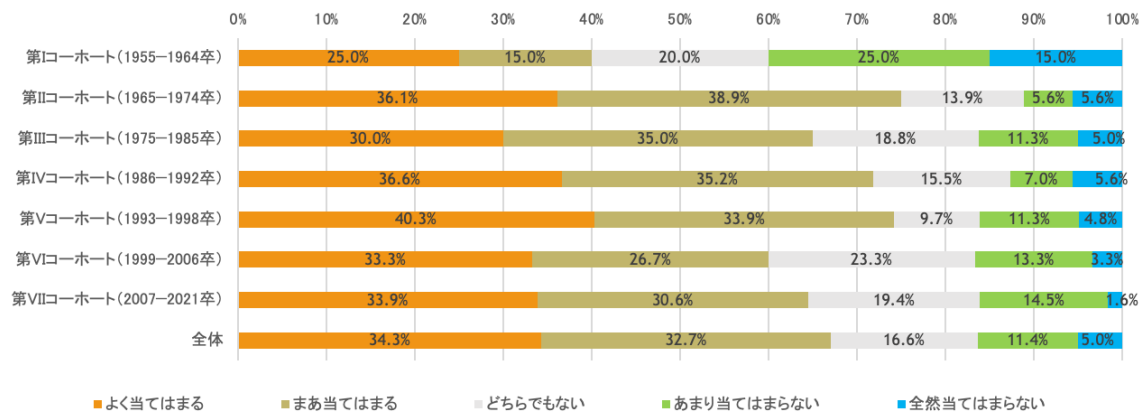


一般教養への意欲も比較的高く、半数以上が指向していた。



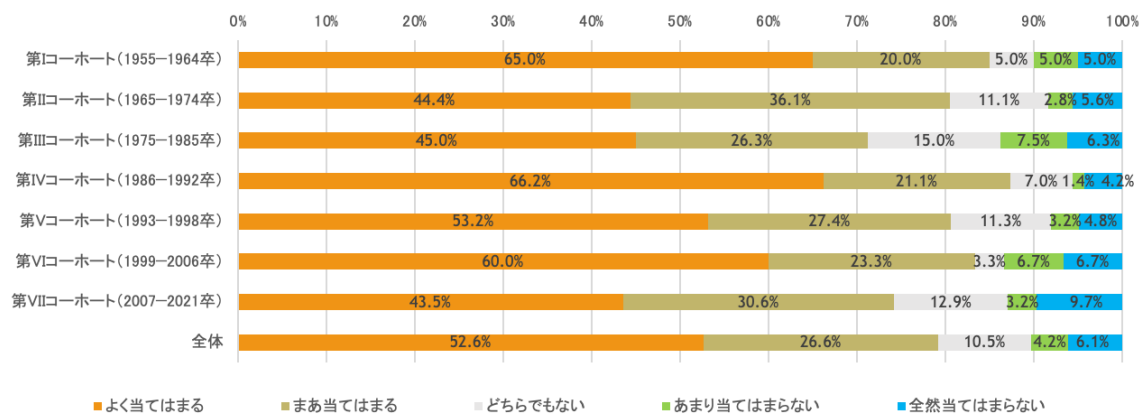
どの世代も共通して高かったのが専門性を身につけたいという動機であった。東大が高い専門性を身につけることができる場所だと認識されていることがうかがえる。

スタッフや設備が充実している



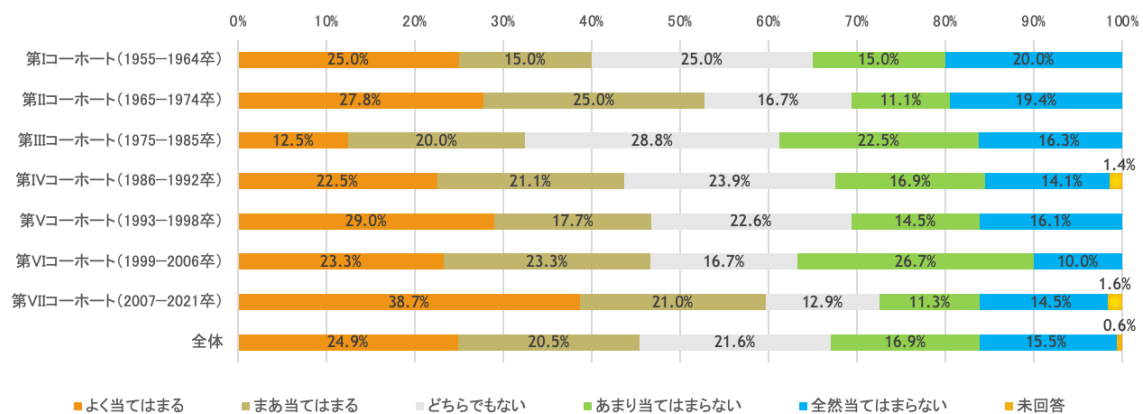
スタッフ、設備の充実も7割近くが動機として挙げている。

私学と比べて学費が安いから



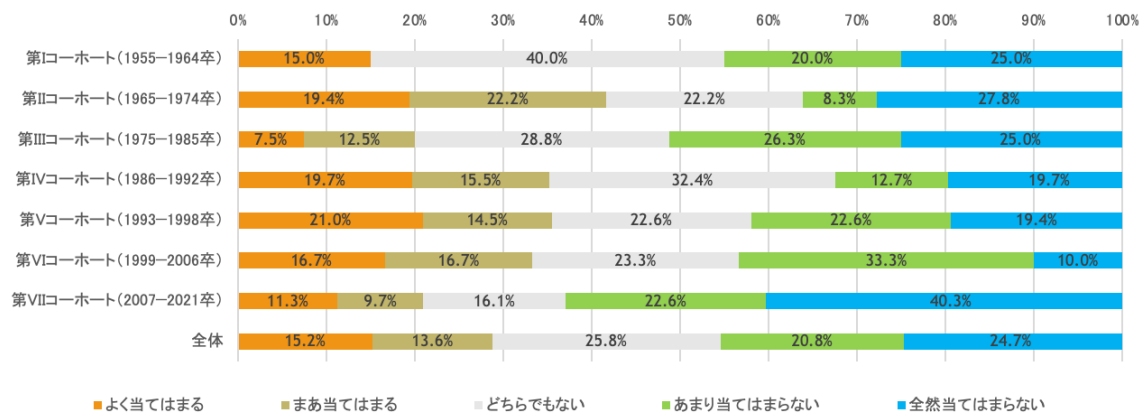
学費の安さについて、最も「(よく) 当てはまる」と答えた人が多かった。

どうしても東大に入りたかった



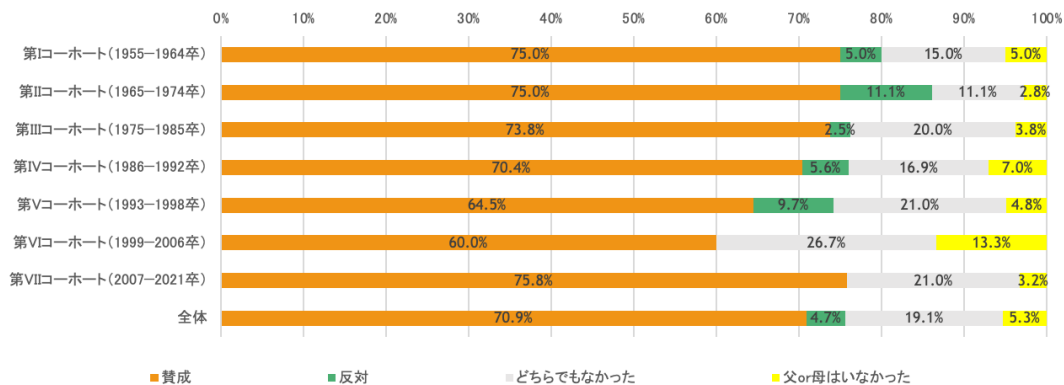
どうしても入りたかったという回答は先ほどと同様、世代が下になるほど増えている。

研究者になりたかったため

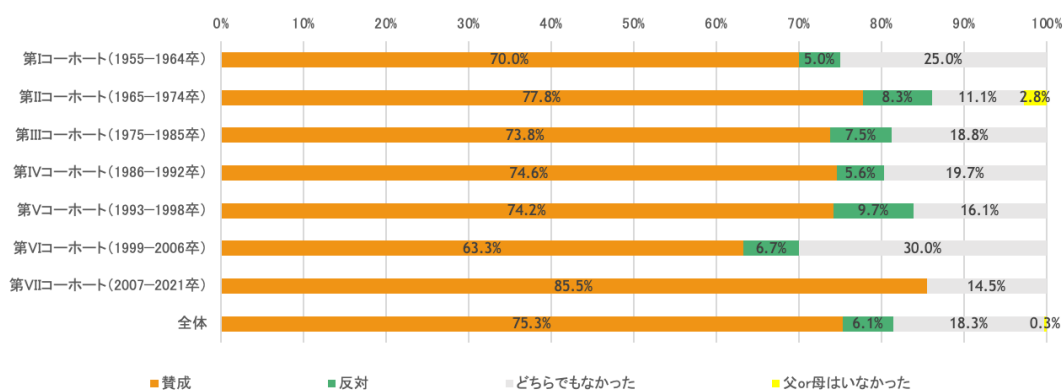


Q6 あなたのご両親は、あなたが東大へ進学することについて、当時どのような意見でしたか。

父親



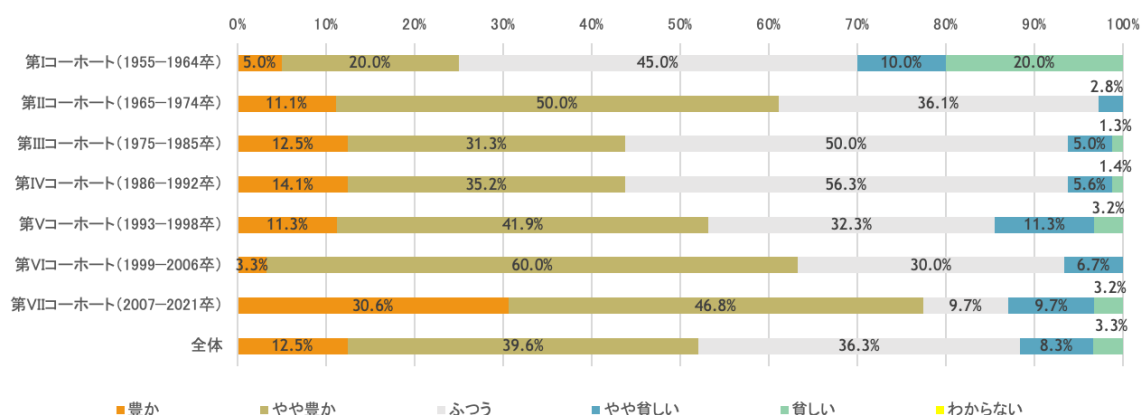
母



いずれの場合も、東大受験に賛成する親を持っていた人が東大に入学している。母子家庭の場合も見られる（父子家庭が少ないが、世間一般的にも珍しいためこの差は東大受験に有意に影響はないのではないと思われる）。親からの反対を押し切って受験し、合格した女子学生はわずか 5%前後で、より父親の反対を押し切った合格は少ない。東大受験にあたり、両親の賛成は重要な要素になると考えられる。

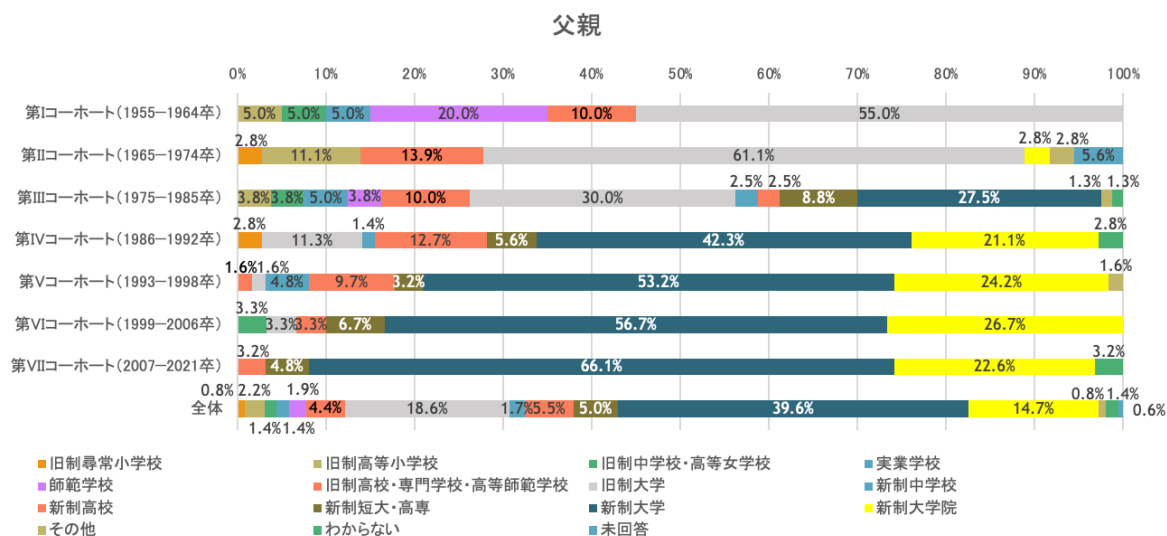
『家庭環境など』

Q7 あなたが15歳（中学3年生）の時、あなたの家庭の暮らし向きは次の5つに分けるとすればどれに当たるでしょうか。当時のふつうの暮らし向きと比べてお答えください。

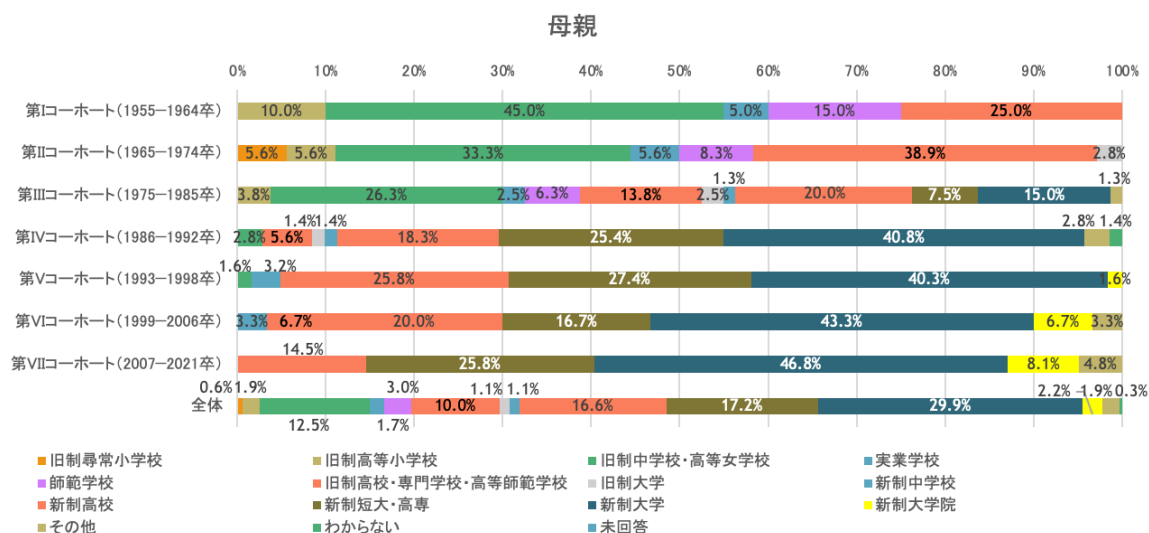


あくまで主観であるが、比較的豊かだと回答した割合は世代が下になるほど増える傾向にあり、全体では半数を超えた。初期の世代は貧しいという割合が唯一多く、戦後女性が大学入学を解禁された直後、家庭が裕福だと自覚する東大卒女性は決して多くなかったようだ。

Q8 あなたのご両親が最後に行かれた学校は、次のどれに当たりますか。

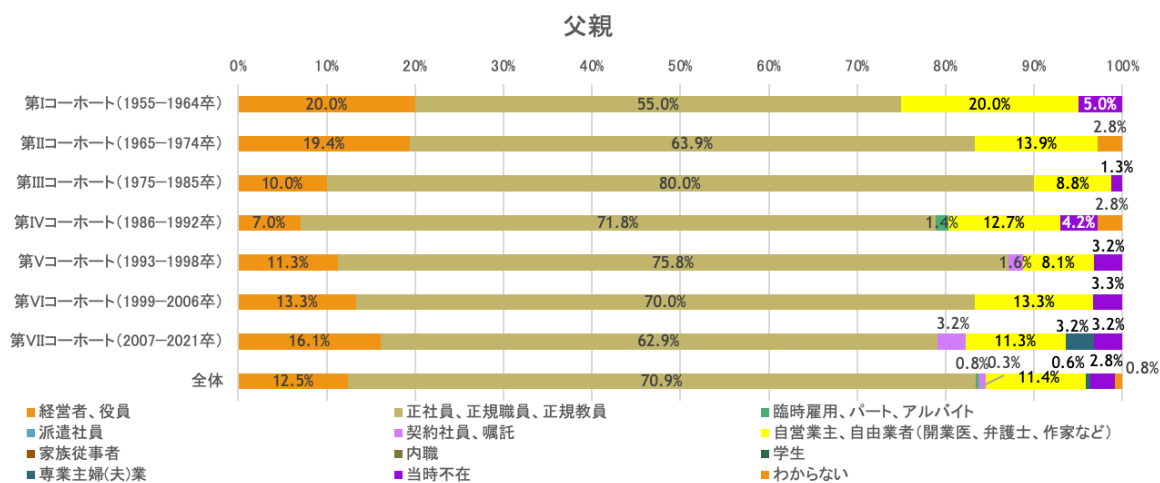


いわゆる「大卒」の父親を持つ人の割合はどの世代も半数を超え、世代が下になるほど比率が90%に近づく。大学院卒の割合も20%ほどの世代が多い。

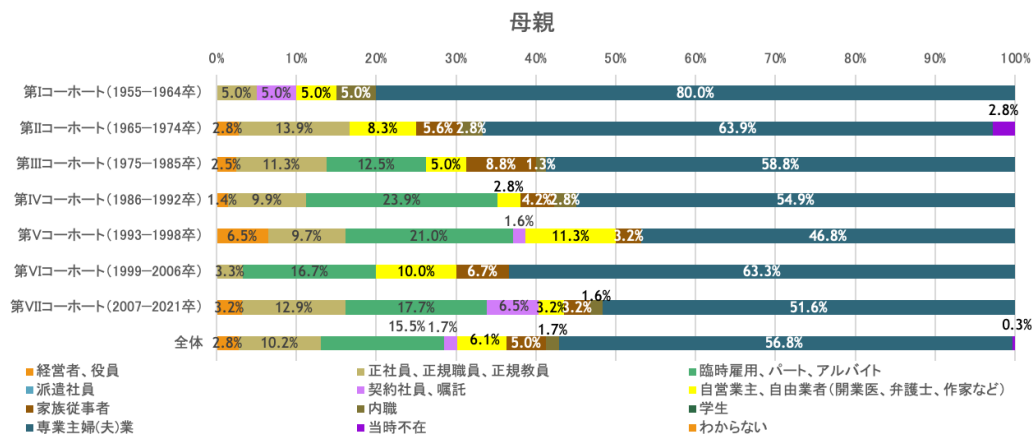


母親の学歴は大卒の割合は全体で半数以上であるが、父親よりも学歴は低い傾向がある。第Ⅰ、第Ⅱコーホートはそもそも親世代が大学進学を選択肢がなかったため、高卒が最高学歴である。その後は70%以上が大卒の母親を持っており、両親ともに高学歴の東大卒女性は多い。

Q9-a あなたが15歳頃の両親の仕事について、従業上の地位は次のどれに当たりますか。

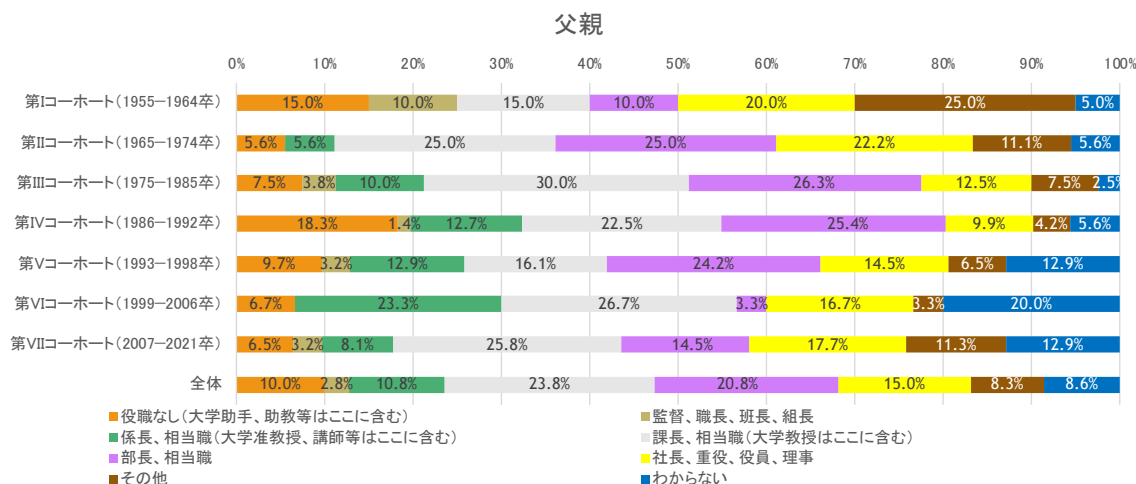


父親は正社員70.9%、経営者12.5%、自営業11.4%であり、ビジネスをトップとして主導する立場である割合が2割を超えている。

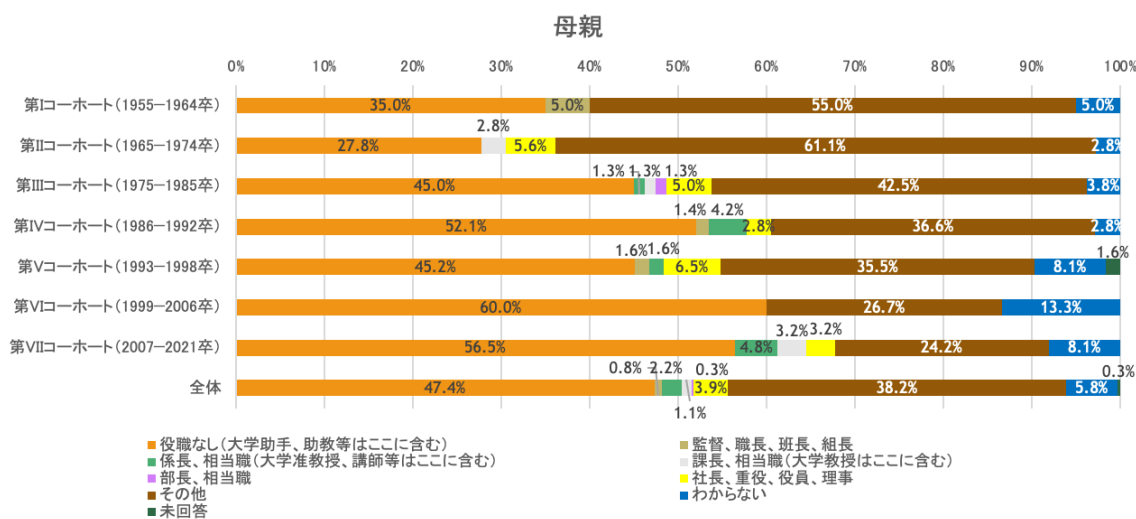


専業主婦の割合は全体で 6 割近くだが、世代が下になるほど下がっていく傾向にある。一方で正社員 10.2%、経営者 2.8%、自営業 6.1%と父親の割合と比較するとかなり少ない。

Q9-b 当時のご両親の役職について

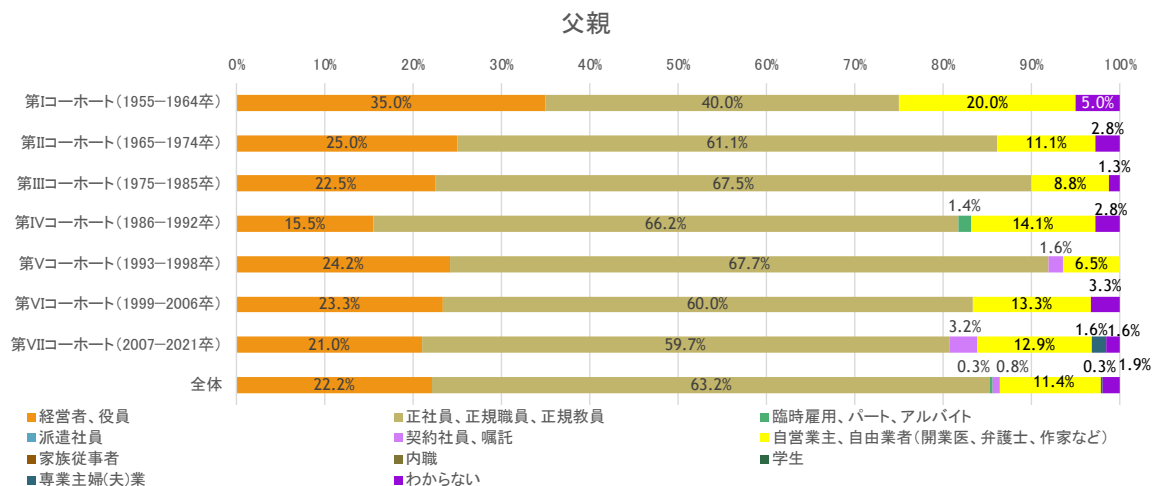


父親の役職は、課長職以上の管理職である割合が全体で 59.6%と多数派である。

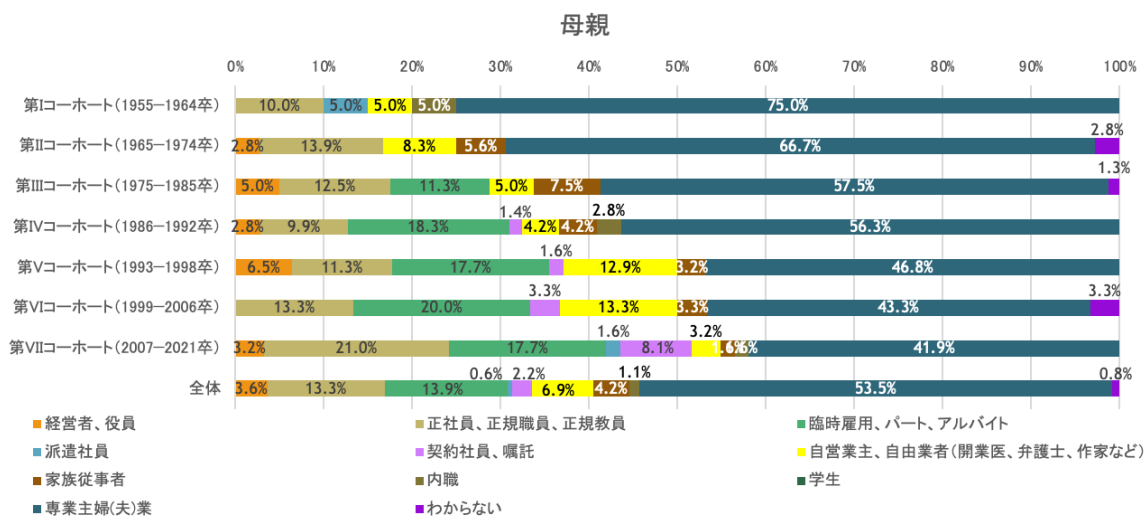


母親の役職は専業主婦層も含むため、ほとんどが役職なしまたはその他となった。管理職の割合は 5.3% とかなり少数派である。

Q9-c あなたのご両親のこれまでの主なお仕事について、従業上の地位はどれに当たりますか。

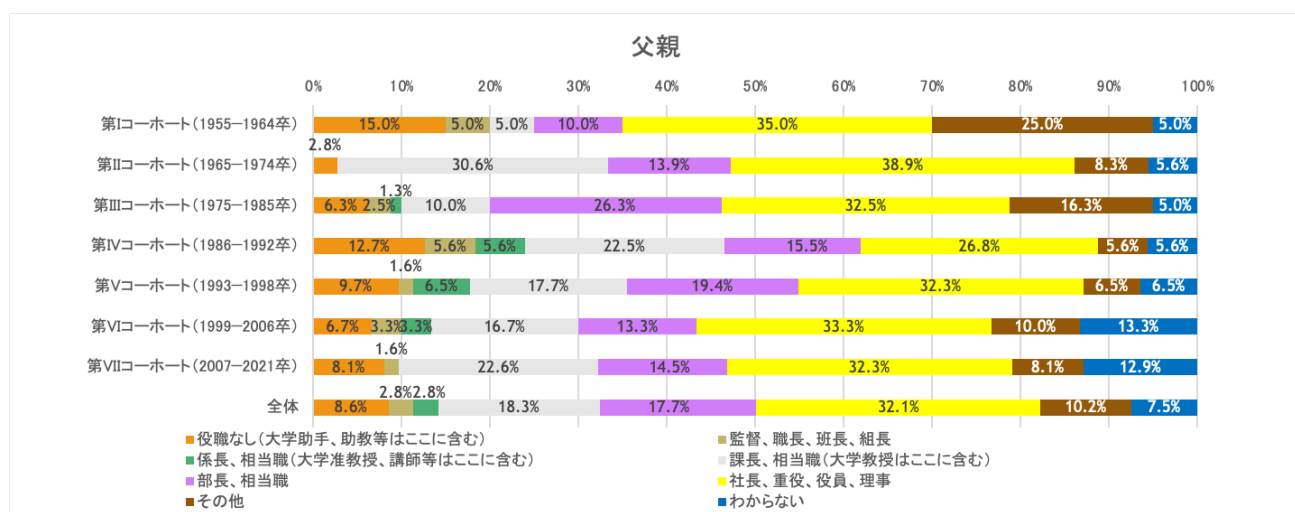


受験後も含めての親の役職は、安定して 2 割程度の父親が経営者、役員と「トップ」が比較的に見られる。少数だが、最も下の世代で専業主夫業が 1.6%現れているのは興味深い。

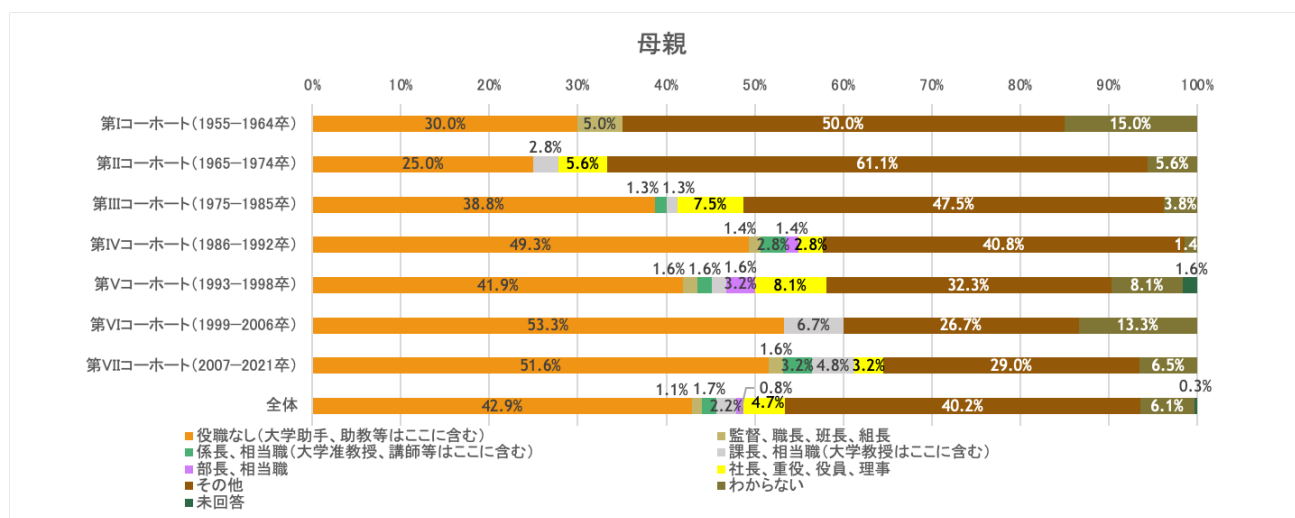


母親の役職は変わらず半数以上が専業主婦業だが、経営者も 3.6%いた。

Q9-d ご両親の役職について



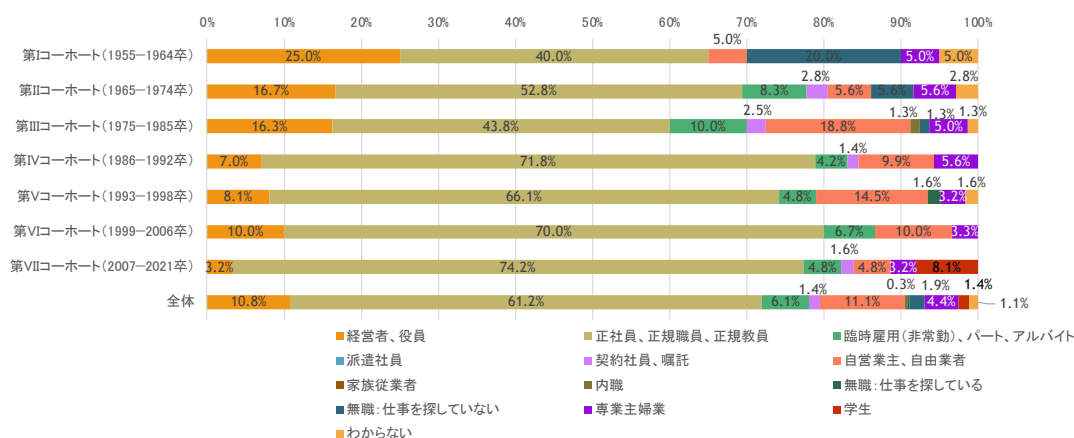
現在の役職は父親が社長、重役、役員、理事など経営トップである割合が全体の最も多くの割合を占めている。



母親の役職については、変わらずほとんどが役職なし、その他であるが、現在社長など経営トップである割合が4.7%である。

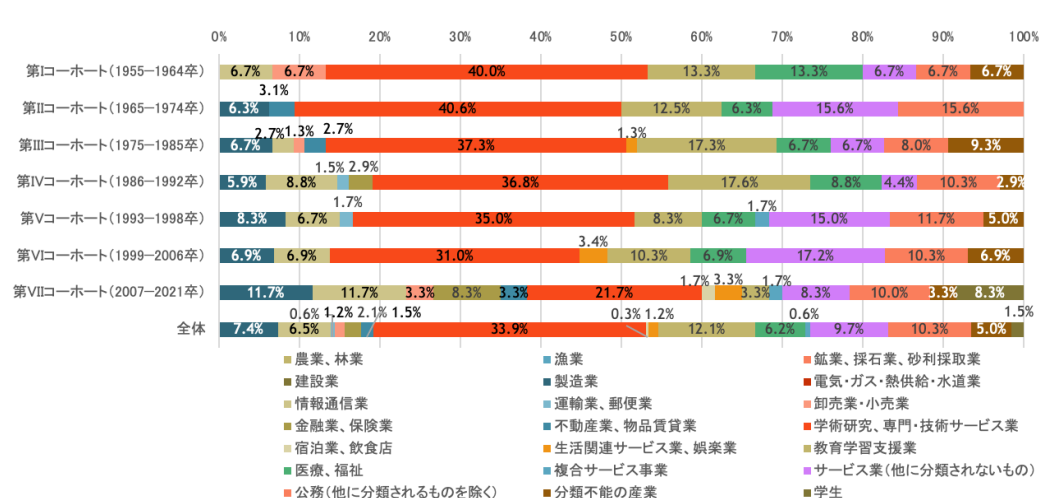
Part 2 仕事について

Q10-a あなたの現在のお仕事について伺います。現在の職業上の地位をお答えください。



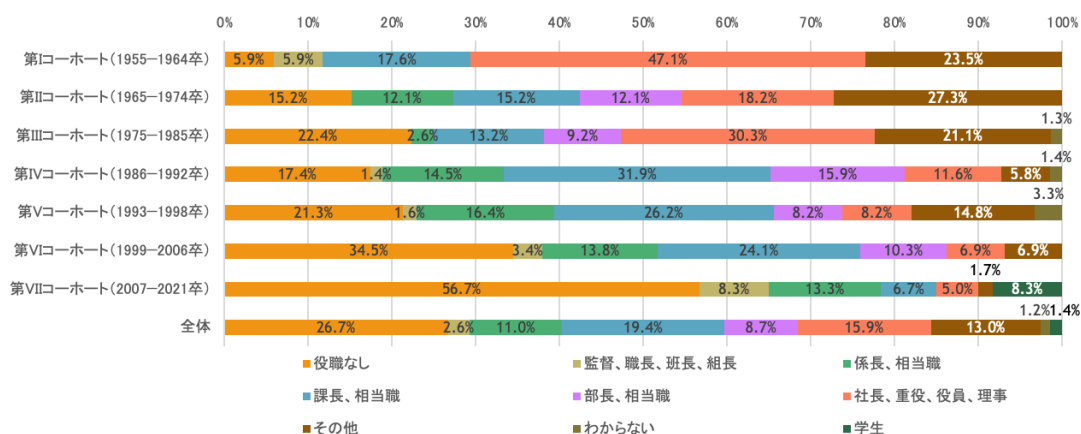
現在の本人の役職については経営者が 10.8%、正社員が 61.2%、自営業が 11.1%であり、母親の役職を大きく上回った。専業主婦の割合は 5%未満と非常に少ない。

Q10-b あなたの勤め先はどのような事業を営んでいますか。



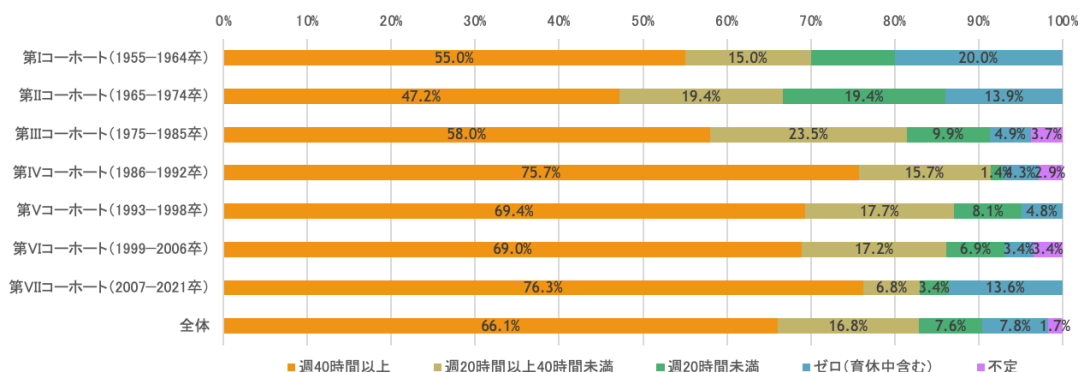
勤め先は電気・ガス・熱供給・水道業がどの世代でも最も多く 3 割以上であった。次に金融業、保険業が多く、公務員、サービス業、製造業、情報通信業、医療・福祉が続く。

Q10-c あなたの現在の役職について



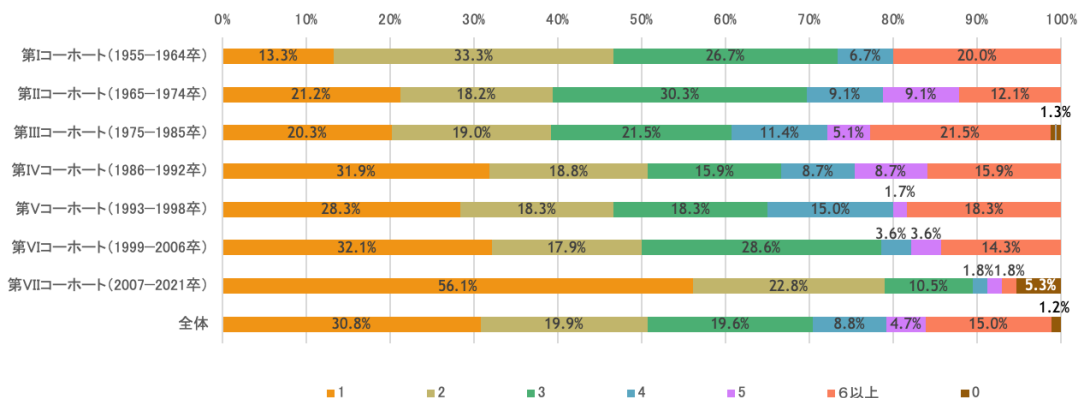
現在の役職は世代が上がるほど上役が多くなるが、全体では役職なしが最も多く 26.7%である。一方、社長や役員の 15.9%を含む管理職以上は 44.0%と、非常に多い。参考までに帝国データバンクが発表した日本における 2022 年時点の企業の女性管理職比率はわずか 9.4%、役員比率は 12.7%である。

Q10-d そのお仕事をふだん一日何時間、週何日していますか。(週当たり時間数で集計)



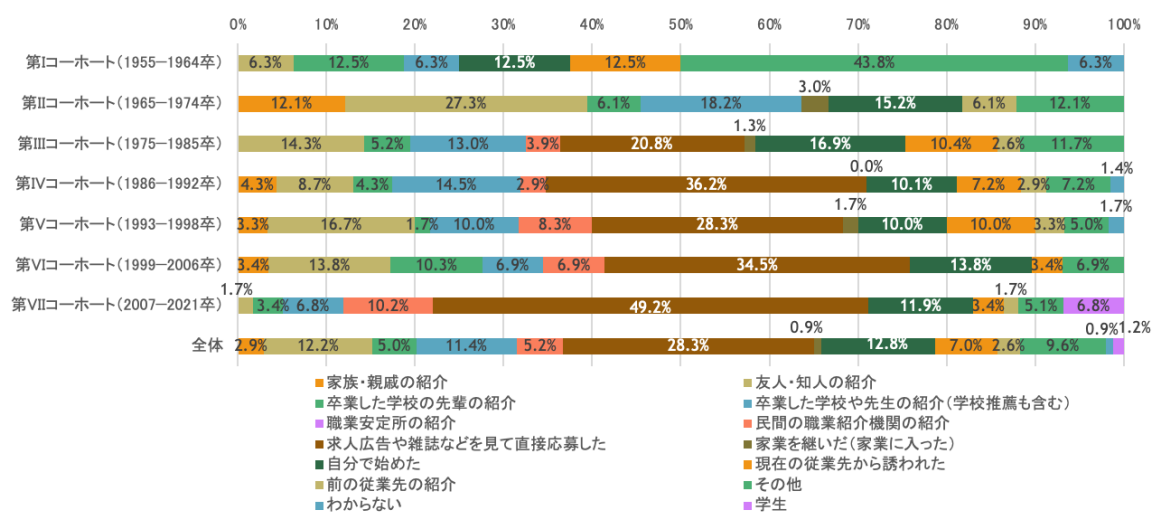
週 40 時間以上（平日 8 時間以上）の割合が 66.1%と最大。

Q10-e 現在の職は何個めですか。



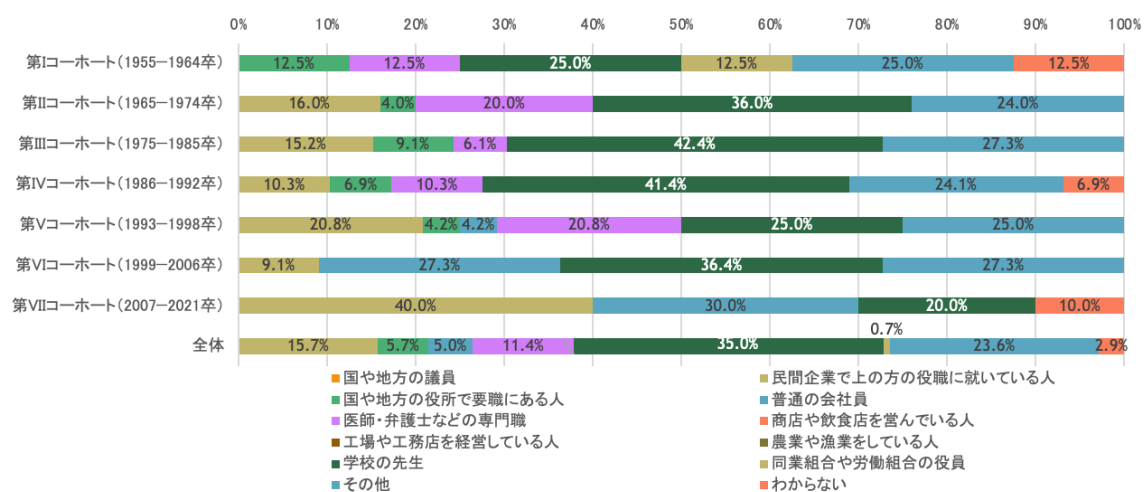
1 社目が最も多く 3 割だが、3 回以上転職している人は半数近くいる。

Q11 現在のお勤め先にはどのようにして就職しましたか。(複数回答)



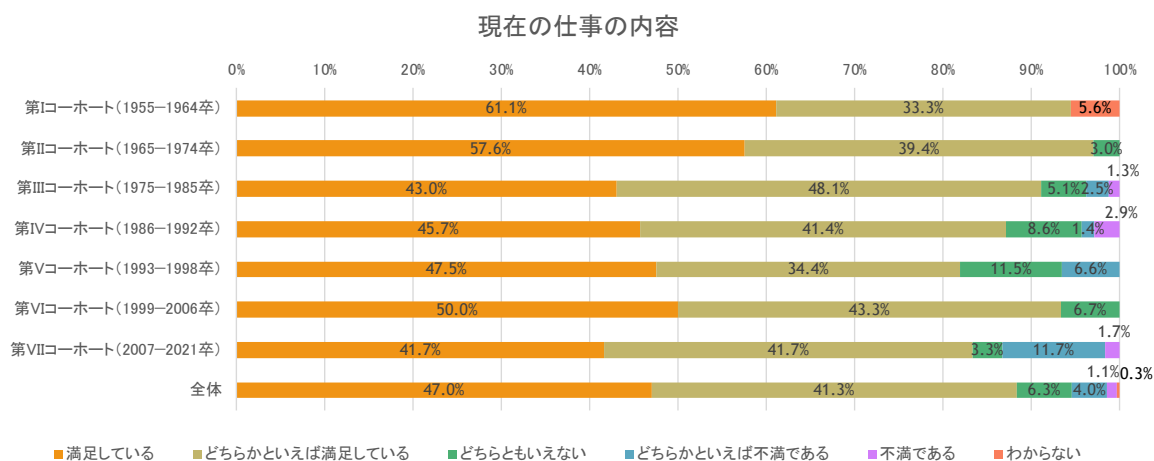
就業のきっかけとしては求人広告が最も多く 28.3%だが、人の紹介である割合も合わせると 31.4%となり、知人の縁での就職が多い結果となった。

Q12 紹介してくれた方のお仕事(複数回答)

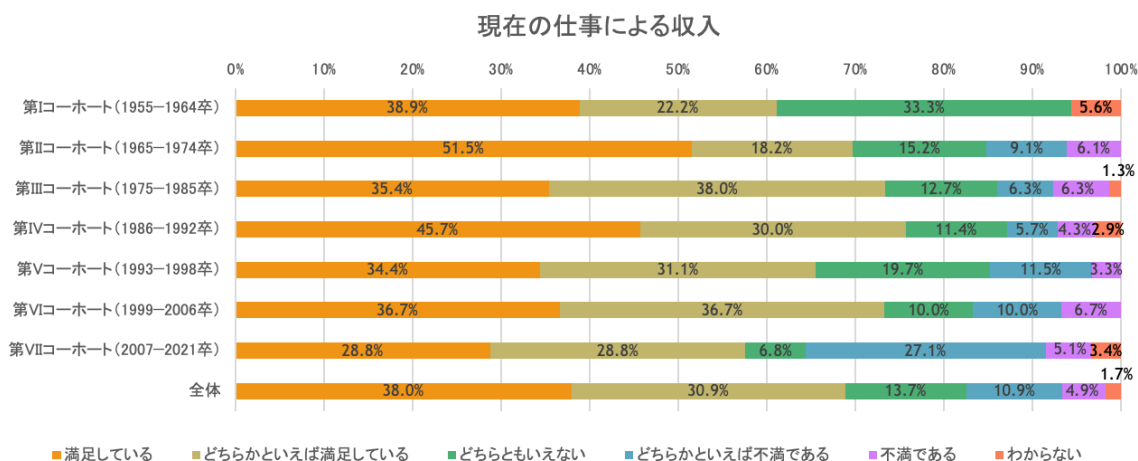


紹介者の仕事は学校の先生が最も多く 35%である。

Q13 あなたは以下の事柄についてどの程度満足していますか。(専業主婦業も仕事に含む)

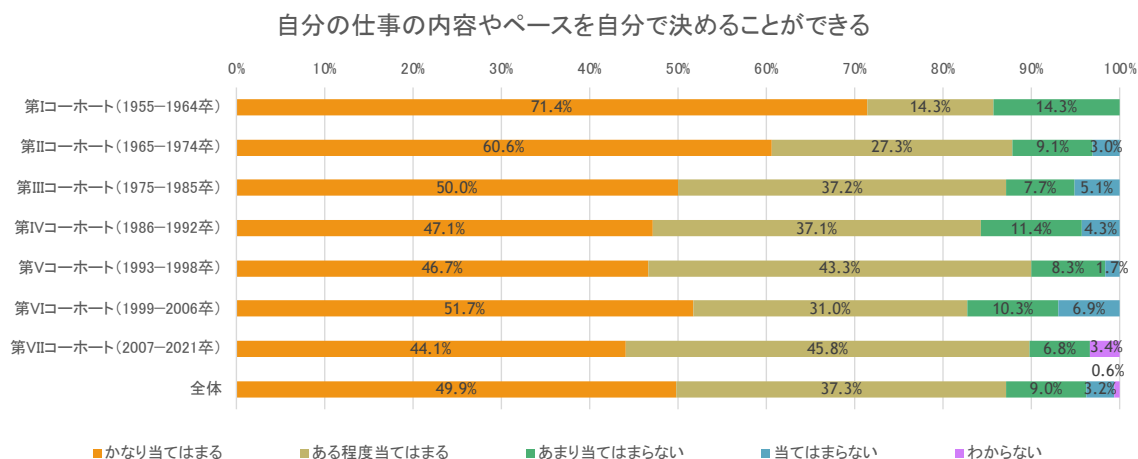


現在の仕事に満足している割合は高く、9割近くであった。

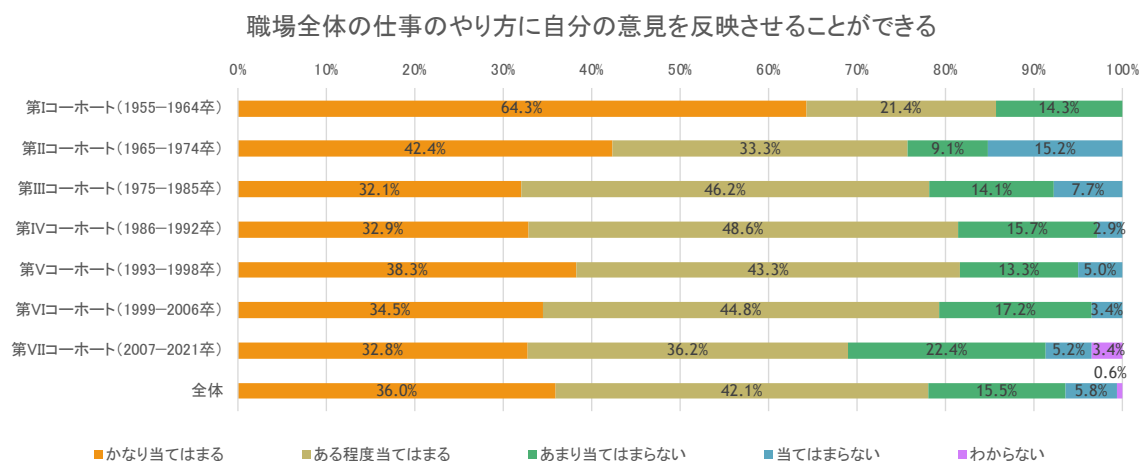


収入に満足している割合はやや下がるものの、7割近くが満足している。若い世代はやや低めである。

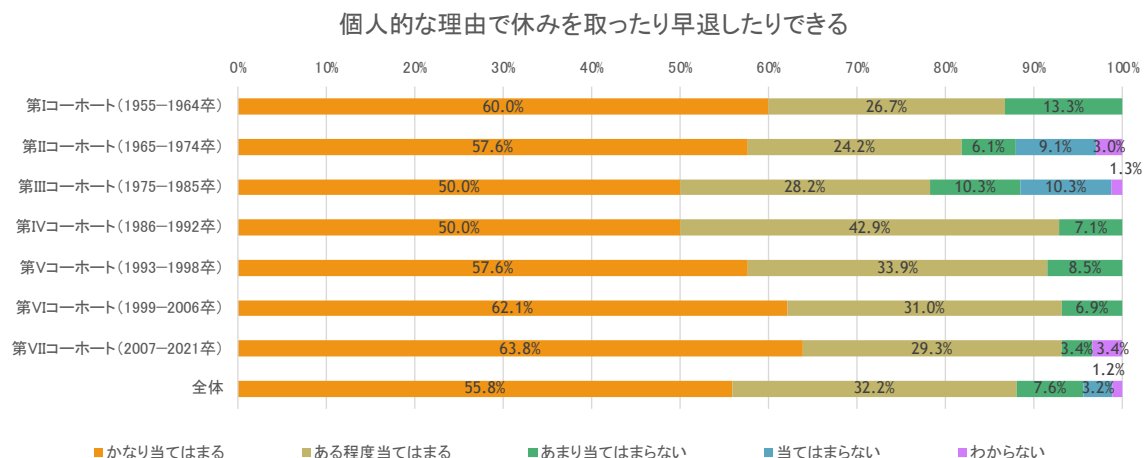
Q14 今の職場で、次の事柄があなたの場合どの程度当てはまるか教えてください。



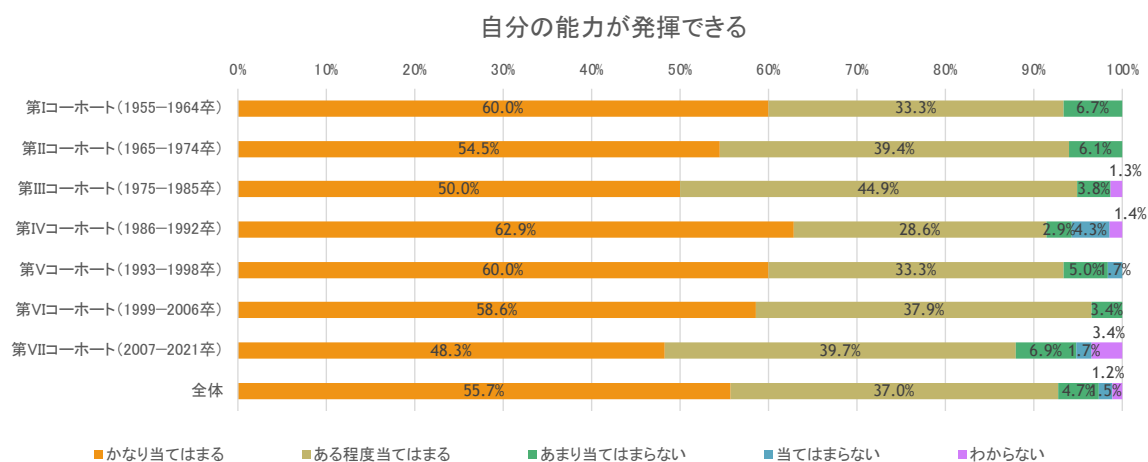
9割近くが仕事の裁量権を持っていると考えている。



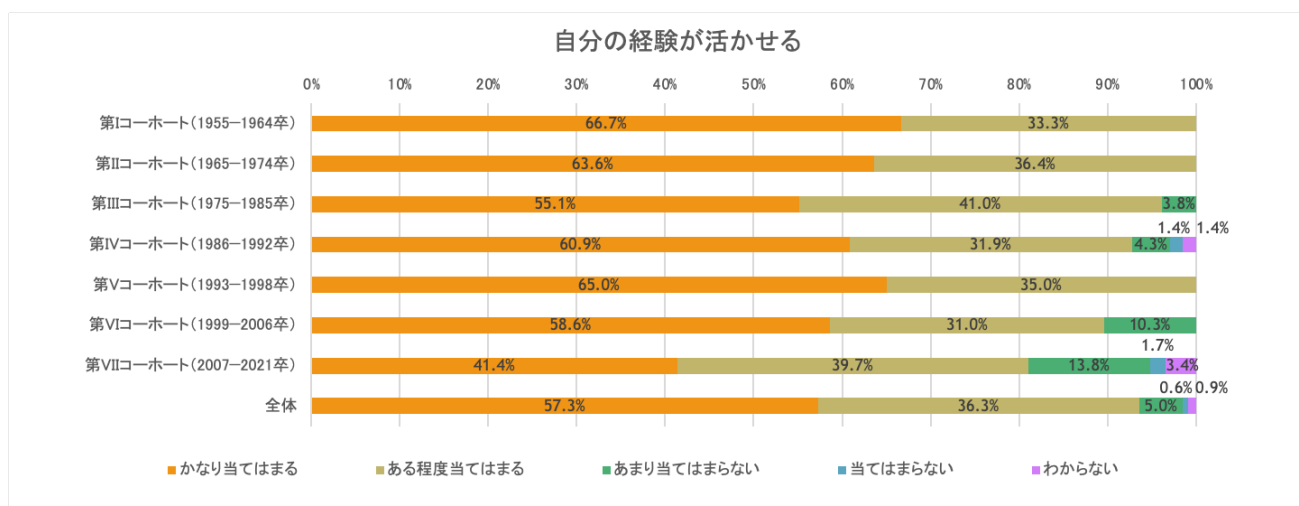
職場全体に自分の意見が反映できる割合も、8割近くがある程度当てはまると回答した。



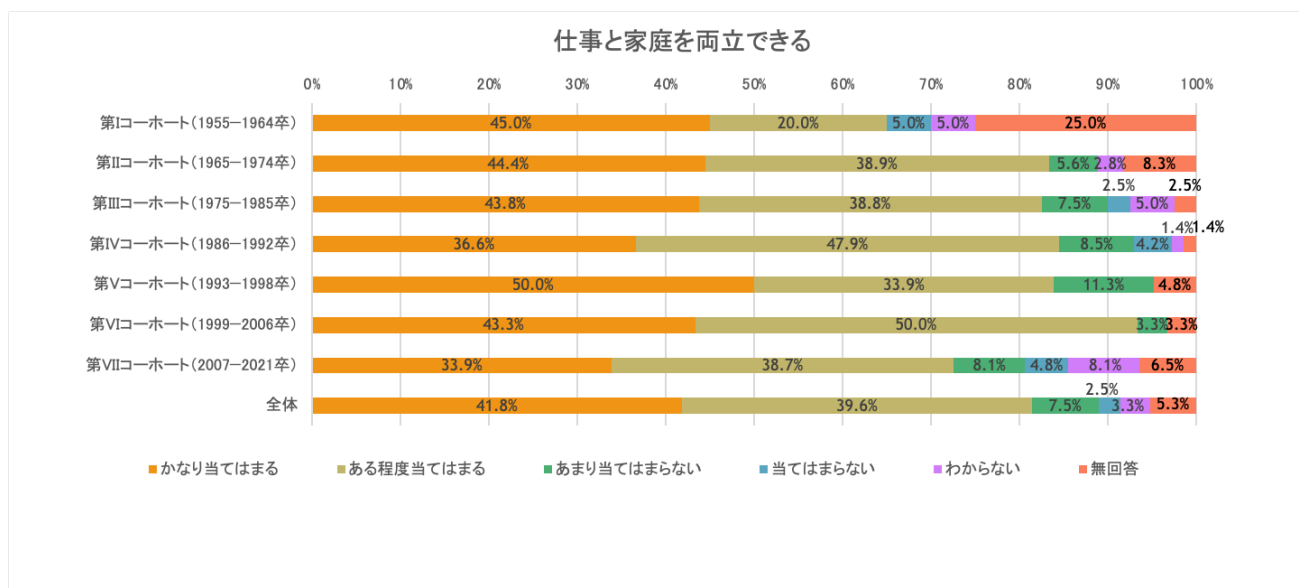
個人的な理由で休みをとりやすい職場である割合も9割近くである。



自分の能力が発揮できる割合は非常に高く9割以上となった。

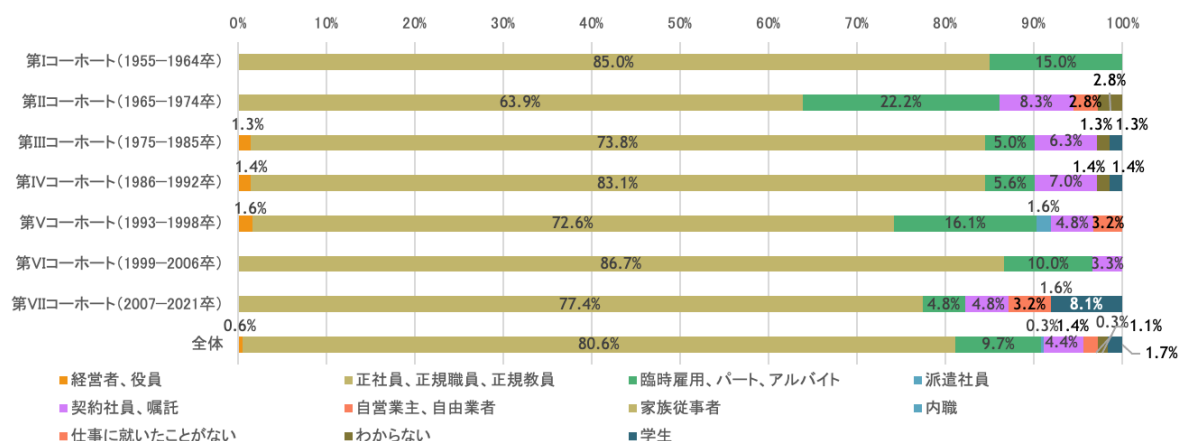


経験が活かせる割合も高く、9割以上である。



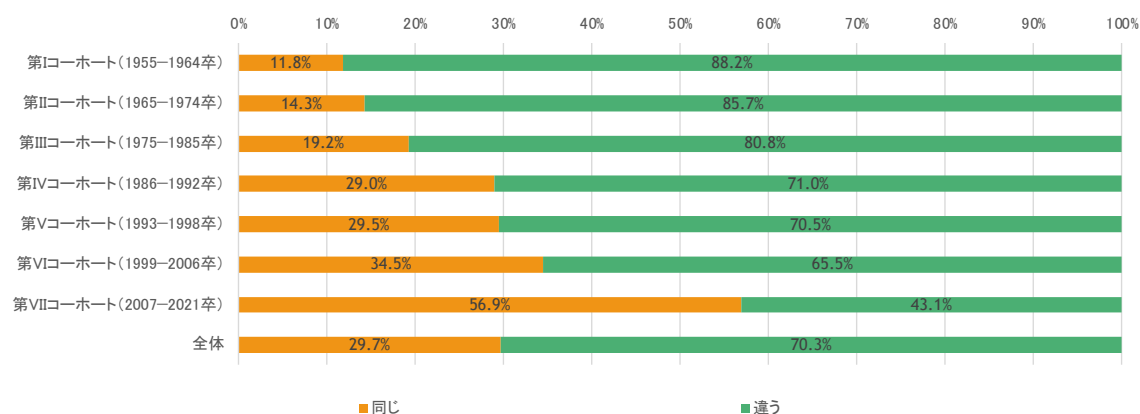
仕事と家庭の両立については8割以上が可能な部類に入った。全体的に、仕事で個性を活かして活躍できる環境が整っている人の割合が多い。

Q15-a 最初の従業先で働き始めたとき、従業上の地位はどれでしたか。



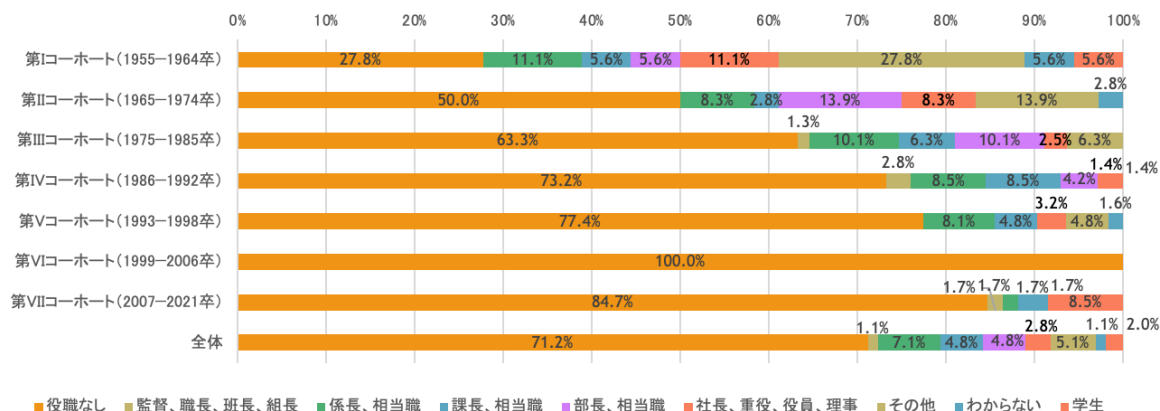
最初の就業先では正社員が8割を占め、非正規雇用が14.3%であった。

Q15-b 最初の勤め先は現在の勤め先と同じですか。



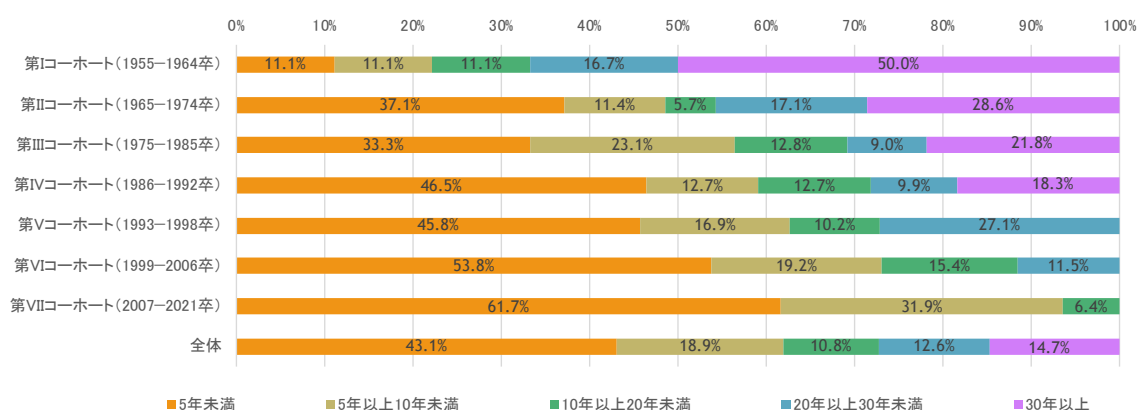
転職経験がある人は7割に登った。

Q15-c 最初の勤め先では、何らかの役職に就いていましたか。



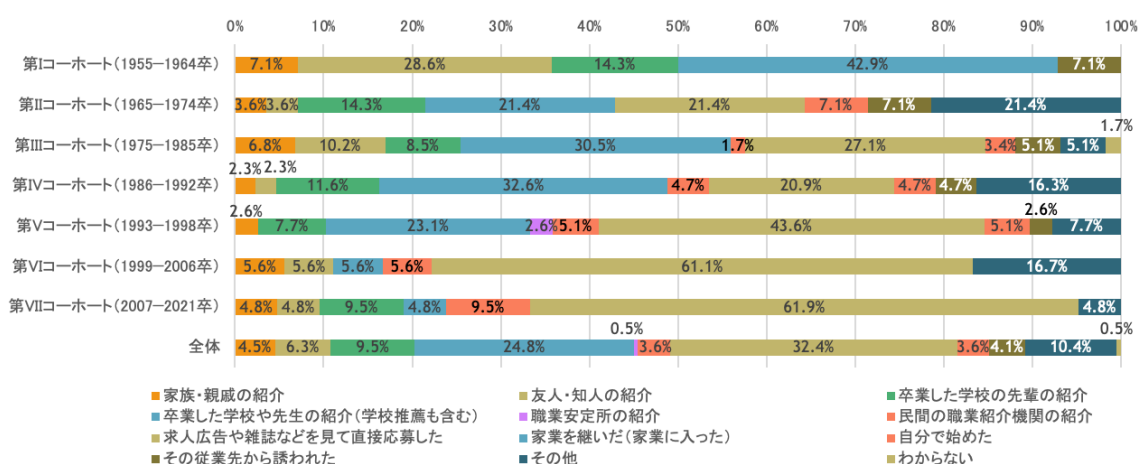
最初の勤め先では役職についていなかった割合が7割を超えた。転職先で昇進している人が多い。

Q15-d その職業には何歳から何歳まで就いていましたか。(職に就いていた年数のみ集計)



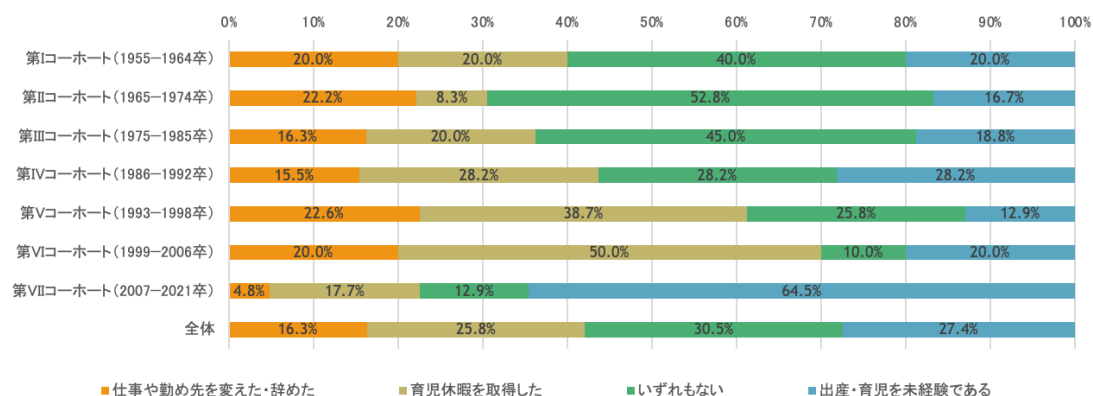
5年未満で転職した、または勤続経験5年未満の割合は43.1%であった。一方で10年以上初職にいた人も4割近くいる。

Q15-e どのようにしてその従業先に就職されましたか。(現在の従業先と異なる方のみ)(複数回答)



転職のきっかけとしては求人広告が最も多いが、次に卒業した学校や先生の紹介が多い。就職した後も卒業した学校とのつながりが転職のきっかけになることが多いようだ。

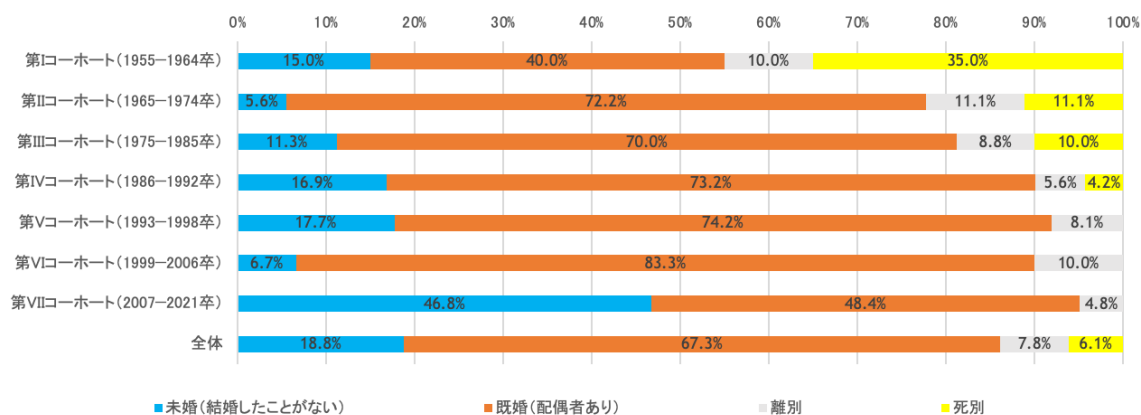
Q16 あなたは、妊娠・出産・育児などの理由で、次のような経験をされたことがありますか。（複数回答）



妊娠、出産、育児を機に育児休暇を取得した人の割合は若い世代ほど増えた。

Part 3 パートナー・結婚・生活について

Q17 あなたは現在結婚されていますか（事実婚を含む）



東大卒女性全体で未婚率は僅か 18.8%であり、「東大に入ると結婚できない」というような噂は当てはまらないことが伺える。総務省の平成 27 年度国勢調査でも、有配偶者の割合は 35～39 歳(70.5%)をおよそ同年代の第VIコホート(83.3%)が上回るなど、東大卒女性の方が有配偶率が高いケースが見られた。2007 年卒以下の比較的年次が浅い第VIIコホートのみ未婚率が半数近いが、これも一般と大差ない。ただし、厚生省の平成 7 年度人口統計資料集では、1995 年当時の女性の生涯未婚率は 5.28%であり、過去は比較的未婚率が高いと見られていた可能性はある。

Q18-a 現在または直近の配偶者と結婚したのはあなたが何歳のときでしたか。

	平均値
第Ⅰコホート（1955－1964 卒）	25.41
第Ⅱコホート（1965－1974 卒）	26.03
第Ⅲコホート（1975－1985 卒）	27.86
第Ⅳコホート（1986－1992 卒）	29.46
第Ⅴコホート（1993－1998 卒）	30.14
第Ⅵコホート（1999－2006 卒）	30.36
第Ⅶコホート（2007－2021 卒）	28.22
全体	28.50

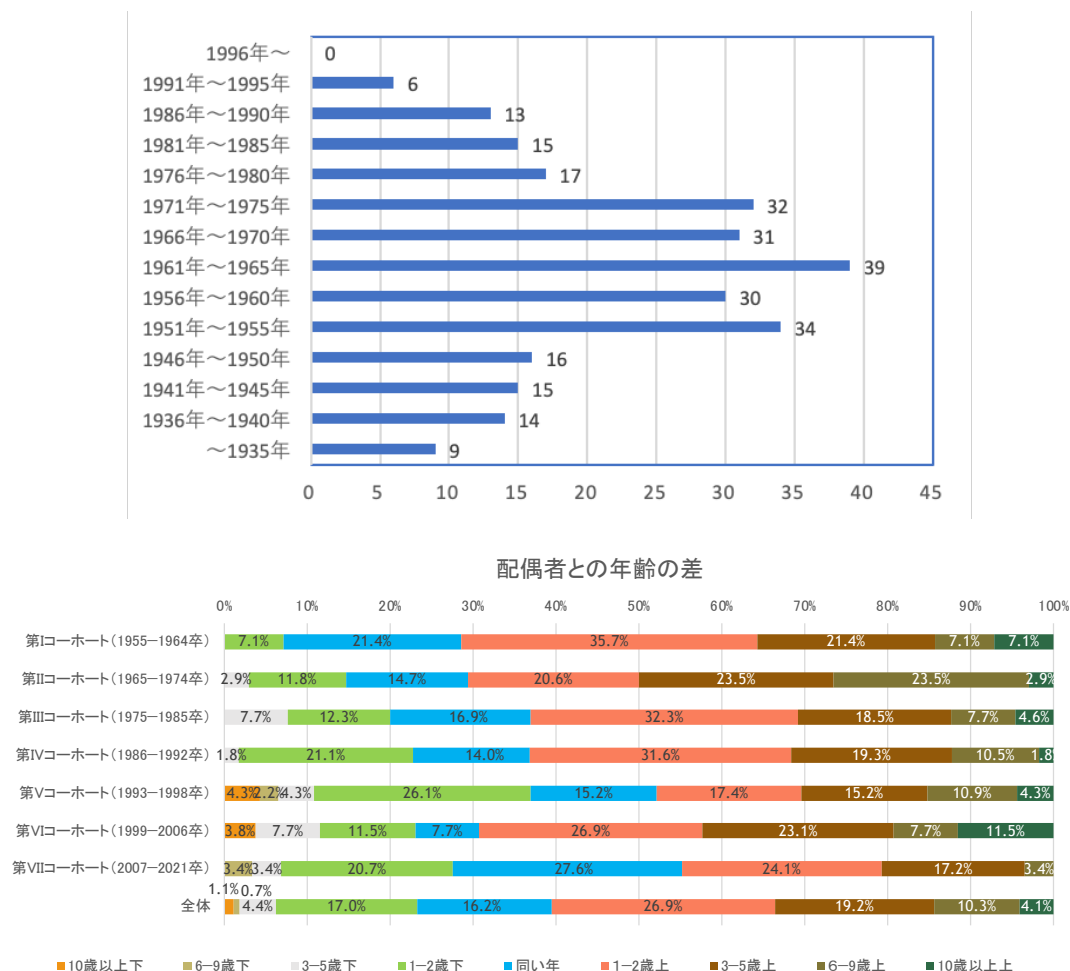
厚労省の令和 2 年度人口動態統計によると、女性の平均初婚年齢は 29.6 歳となり、東大卒女性の平均 28.5 歳を上回った。こちらも同様に、過去は平均初婚年齢が 23 歳(1950 年当時)などの時期があったため、東大卒女性が結婚しにくく見られた可能性はある。しかし、現在全体的な女性の高学歴化や社会進出、晩婚化が進んだ結果、東大の学歴は結婚の阻害要因にはなっていないことがうかがえる。

Q18-b 離別（または死別）されたのはあなたが何歳のときでしたか。

	死別（平均値）	離別（平均値）
第Ⅰコーホート（1955－1964 卒）	71.29	52.50
第Ⅱコーホート（1965－1974 卒）	56.50	38.00
第Ⅲコーホート（1975－1985 卒）	55.25	46.29
第Ⅳコーホート（1986－1992 卒）	42.00	40.50
第Ⅴコーホート（1993－1998 卒）	なし	36.14
第Ⅵコーホート（1999－2006 卒）	なし	38.25
第Ⅶコーホート（2007－2021 卒）	56.86	30.00

死別については 40-50 代が多く、離別は 30 代後半から 40 代までが多かった。

Q19 あなたの（現在の）配偶者のお生まれは何年ですか。



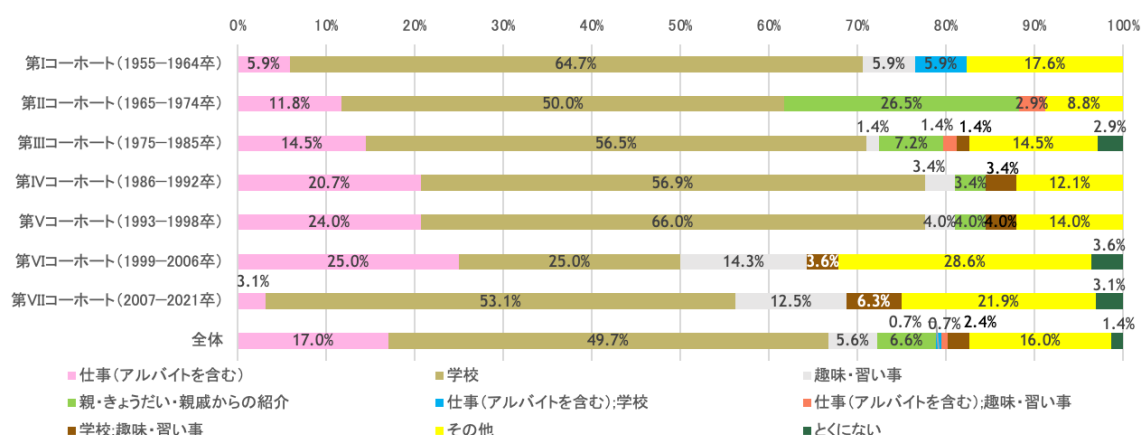
全体としては配偶者と同じ年が最も多く、上下 2 歳差までで過半数を占めた。年次の浅い世代ほど年下の配偶者を持つ割合が高く見られる傾向にある。

Q20 配偶者の方と初めて知り合ったのは、あなたが何歳の頃でしたか。2度以上結婚したことがある場合は、最後の結婚でお答えください。(離別・死別も含む)

	平均値
第Ⅰコホート (1955－1964 卒)	21.65
第Ⅱコホート (1965－1974 卒)	22.91
第Ⅲコホート (1975－1985 卒)	23.14
第Ⅳコホート (1986－1992 卒)	23.91
第Ⅴコホート (1993－1998 卒)	25.29
第Ⅵコホート (1999－2006 卒)	25.54
第Ⅶコホート (2007－2021 卒)	22.83
全体	23.75

全体平均は 23.75 歳で最初の配偶者と出会っている。比較的若い年齢で出会った人が多かったようだ。

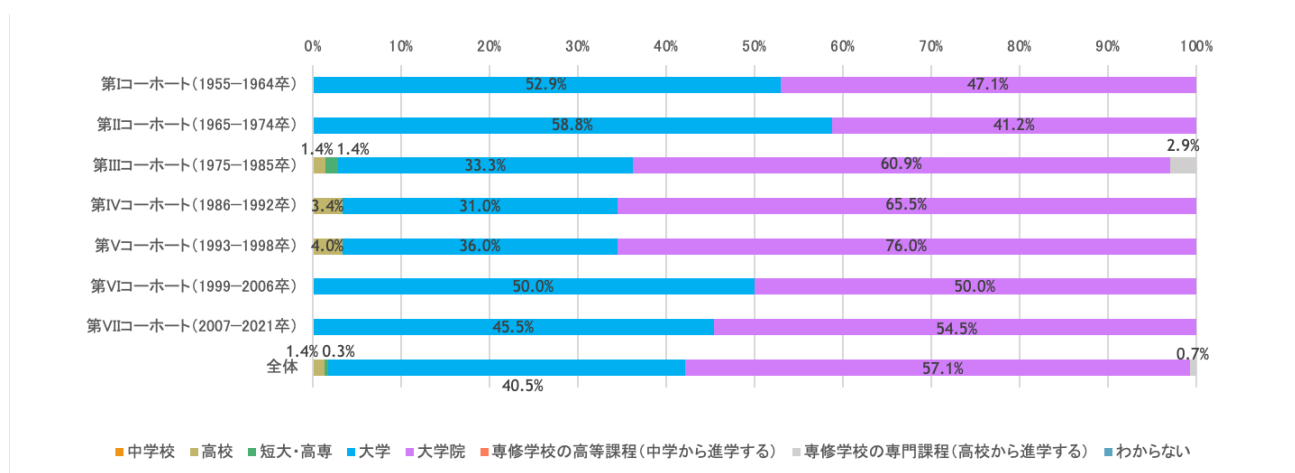
Q21 配偶者の方と知り合うきっかけとなったのは何でしょうか。



その他の主な内訳は「友人の紹介」(13)、「婚活サイトやマッチングアプリ・お見合いパーティ」(8)、「知人の紹介(仕事関係、近所、親の友人、恩師、母校の先輩など)」(8)、「交流会や同窓会関係」(4)、「インターネット」(3)、「お見合い」(3) など。

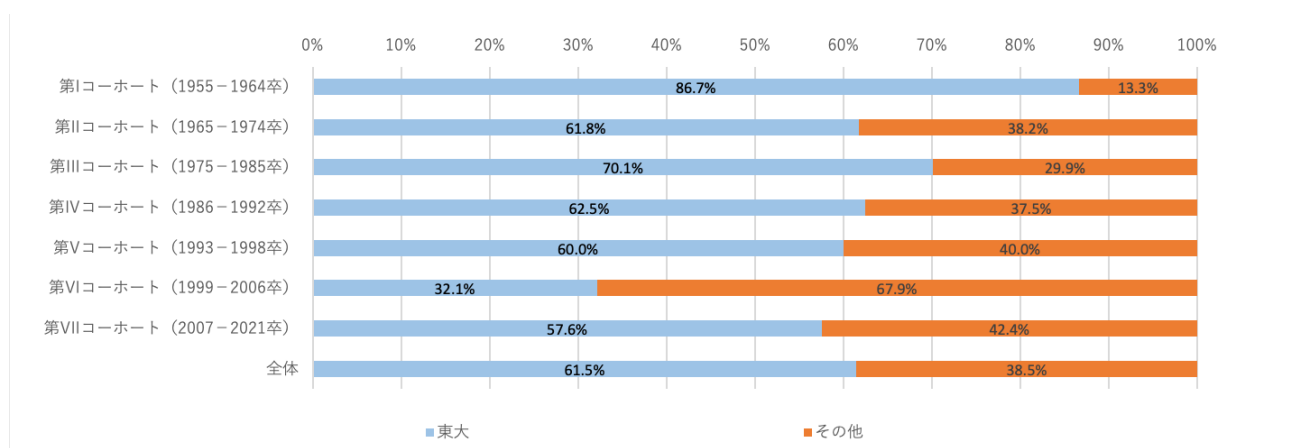
全体では半数近くの 49.7%が学校で知り合っており、在学中に配偶者と出会う割合が最も高かった。一方、年次が浅い世代ほど仕事やその他など、幅広い出会いの場所を挙げていることも注目に値する。

Q22-a 配偶者の最終学歴



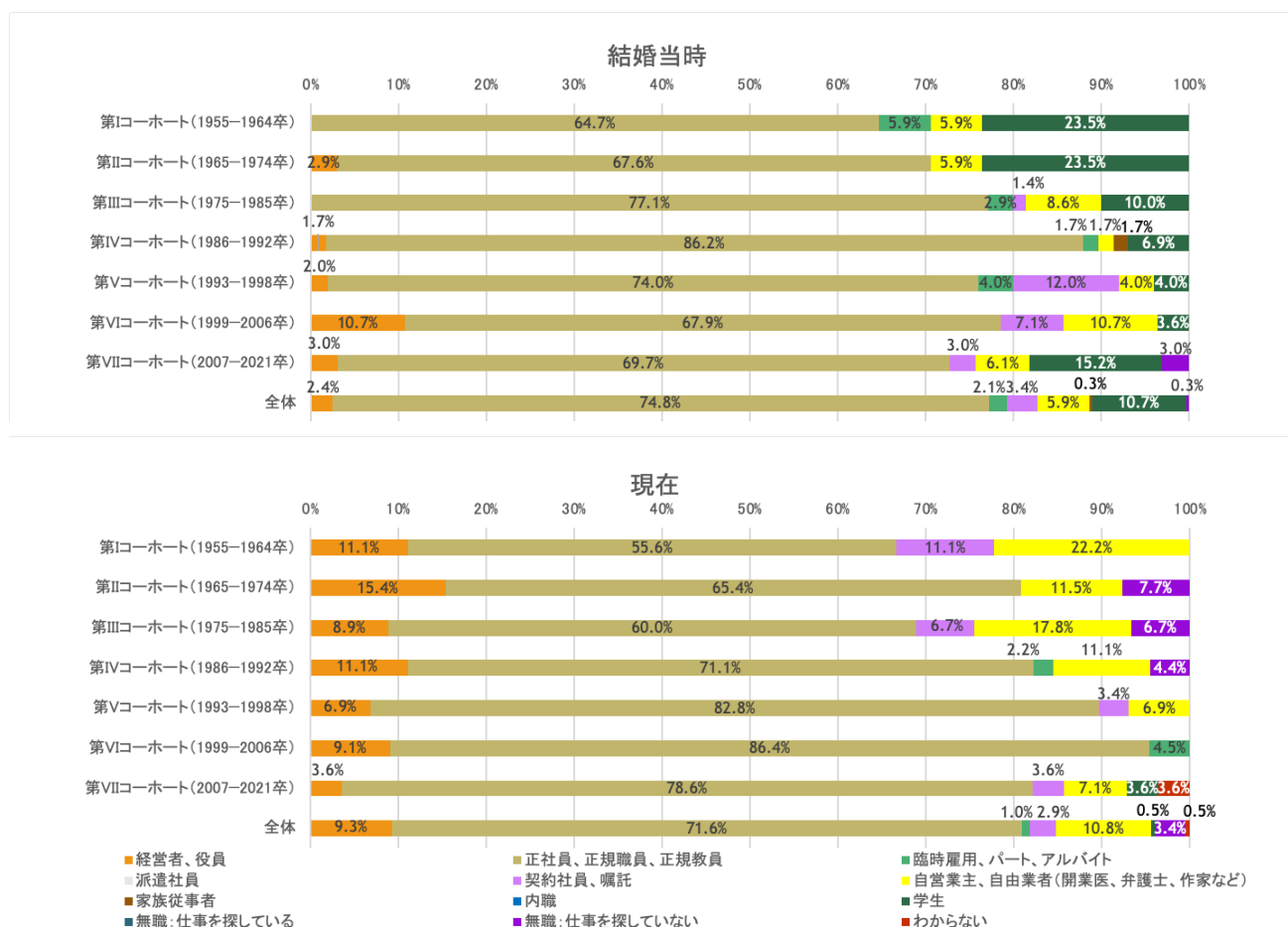
配偶者の最終学歴は自分と同等以上の「大学」「大学院」である割合が 97.6%と圧倒的に多く、最も多いのは「大学院」(57.1%)だった。文科省の学校基本調査(2021)では大学進学率は男性 58.1%、女性 51.7%で、学部卒業者の大学院進学率は全体で 11.3%と、多いとは言えないが、自分と同等以上の高学歴の配偶者を持つ傾向にあることは言えるだろう。

Q22-b 前の設問で「大学」「大学院」と答えた方に伺います。その大学・大学院は？



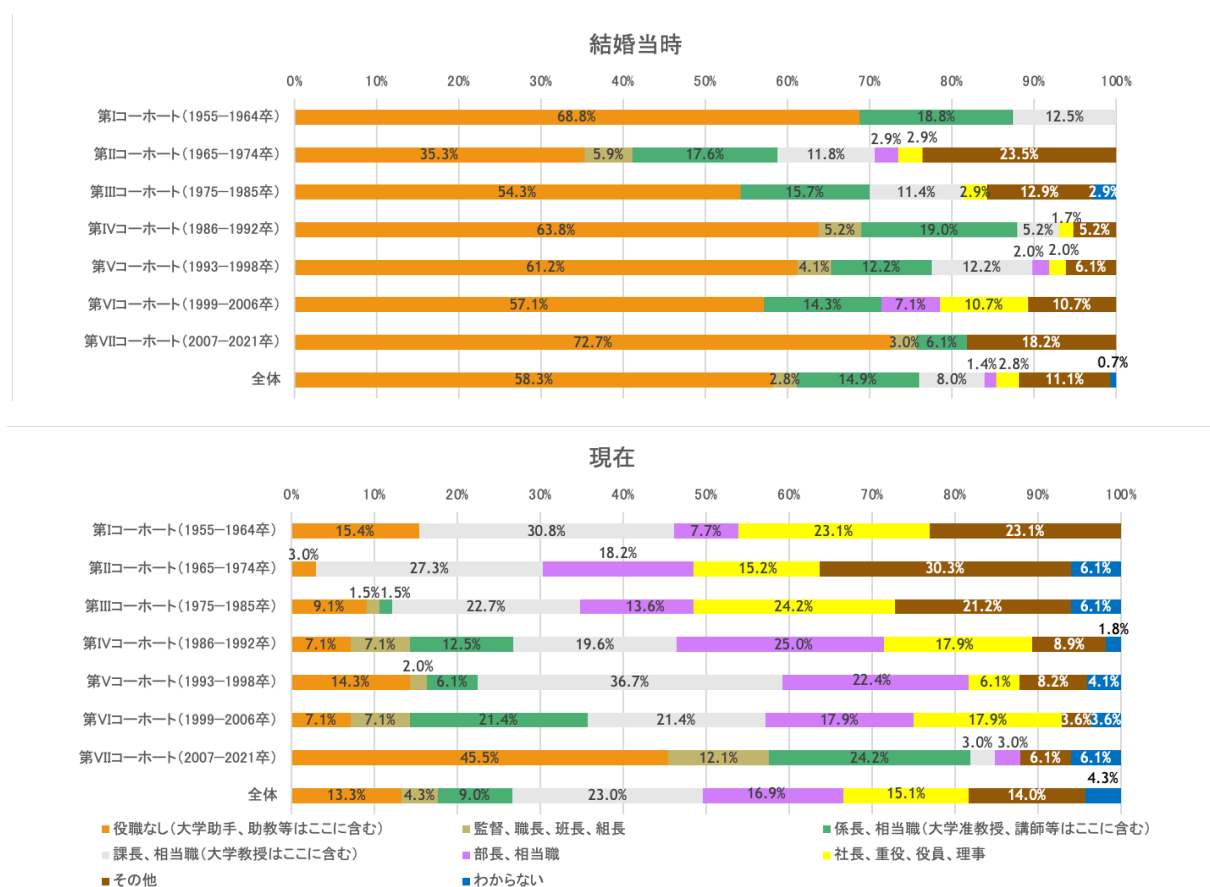
全体の 61.5%が東大(院)卒の配偶者を持っており、過半数が東大同士の結婚であることがわかった。第 I コーホートはその割合が 86.7%と特に高く、第VIコーホートは 32.1%と特に低く出ている違いは見られるものの、その他の世代では 6 割前後となっていた。

Q23-a あなたの配偶者のお仕事について、従業上の地位は結婚当時と現在それぞれどれに当たりますか。(以降「現在」については、退職されている場合は、退職直前について、また死別・離別されている場合も直前についてお答えください。)



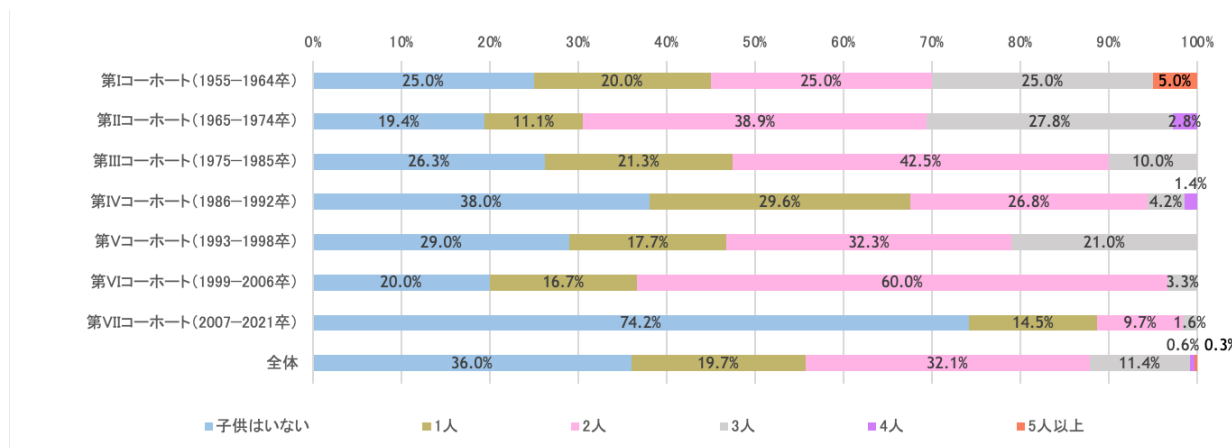
全体の傾向として、現在の配偶者が「経営者、役員」「自営業主、自由業者」となっている割合が1割近くになる傾向にあり、ビジネスにおいて意思決定を自身で行う責任ある立場にある人を配偶者として持つ東大卒女性が多いことがわかった。さらに結婚当時よりも結婚した後（現在）「経営者、役員」である割合が大きく、決して立場があるからといった理由で配偶者となった訳ではなさそうだ。

Q23-b あなたの配偶者の役職について、結婚当時と現在はそれぞれどれに当てはまりますか。



出会った当時と現在の配偶者の役職についての質問も同様に、出会った当時は58.3%が役職がなくとも、現在は役職なしがわずか13.3%、課長～社長など管理職や経営陣となっている割合は64.0%になっている。俗な表現になるが、東大卒女性は出世していく配偶者選びができていると見ることもできる。

Q24-a あなたのお子さんについて伺います。お子さんは何人いらっしゃいますか。



全体では子どものいる人が64.0%となり、どの世代もおよそ4人に1人ほどは子供を持っていない。また、最も若い第VIIコホート（およそ20代～30代前半と想定される）は4人に3人ほど、74.2%が子どもを持っていない。

Q24-b それぞれのお子さんについて、あなたがおいくつのときにご出産されましたか。

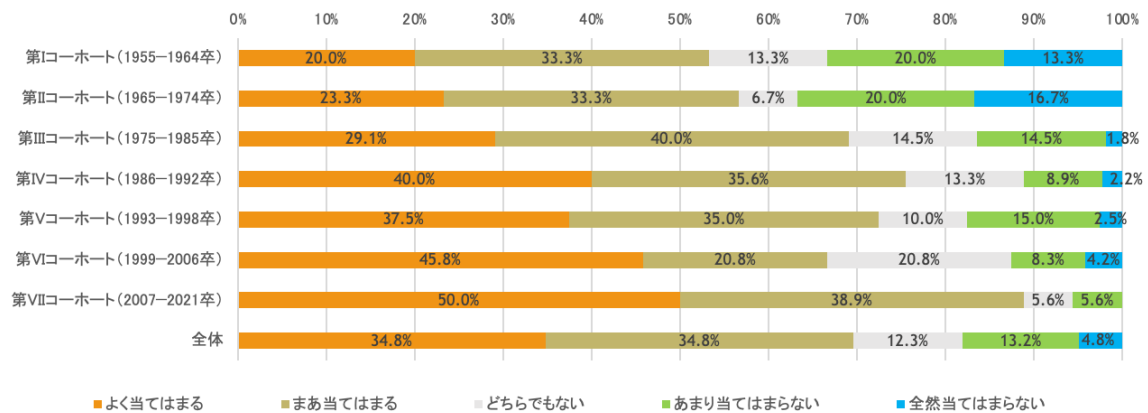
	長子の出産 年齢（平均）	末子の出産 年齢（平均）	平均子供数 （子供有りの平均）
第Ⅰコーホート（1955－1964 卒）	28.33 歳	33.13 歳	2.33 人
第Ⅱコーホート（1965－1974 卒）	27.69 歳	30.93 歳	2.28 人
第Ⅲコーホート（1975－1985 卒）	30.53 歳	33.48 歳	1.85 人
第Ⅳコーホート（1986－1992 卒）	31.70 歳	34.00 歳	1.64 人
第Ⅴコーホート（1993－1998 卒）	32.28 歳	35.74 歳	2.09 人
第Ⅵコーホート（1999－2006 卒）	32.17 歳	35.75 歳	1.83 人
第Ⅶコーホート（2007－2021 卒）	30.73 歳	32.40 歳	1.60 人
全体	30.77 歳	33.83 歳	1.93 人

全体での平均子供数は 2 人に届かず、第Ⅲコーホート以降は 2 人未満の平均になっている。有配偶者の子ども数としてはやや少ない傾向にあるようだ。一方第一子の出産年齢、末子の出産年齢は徐々に高まる傾向が見える。第Ⅶコーホートはまだ 74.2%が子供を持っていないため、比較的早めに産んだ少数の結果となっているため、世代全体が 30 代後半になった時の平均出産年齢は今後上の世代同様に上がっていくのではないかと考えられる。全体的に出産年齢の後ろ倒しが起きている可能性が高い。

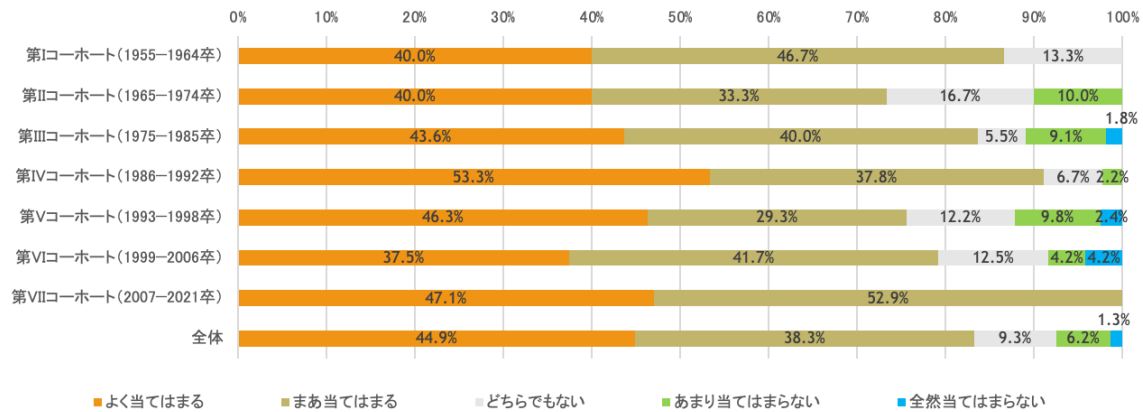
『夫婦の関係性』

Q25 次に挙げるそれぞれの項目は、あなた方で夫婦にどの程度当てはまりますか。

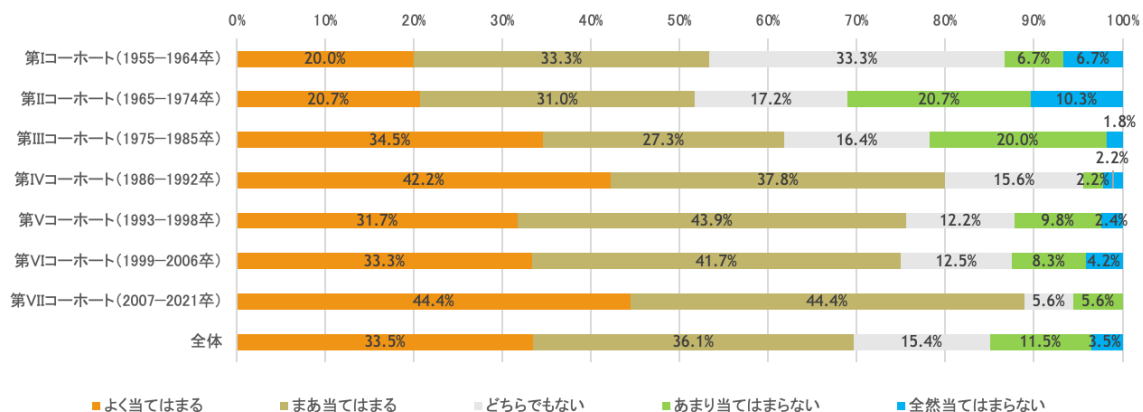
配偶者は、私の心配事や悩みを聞いてくれる

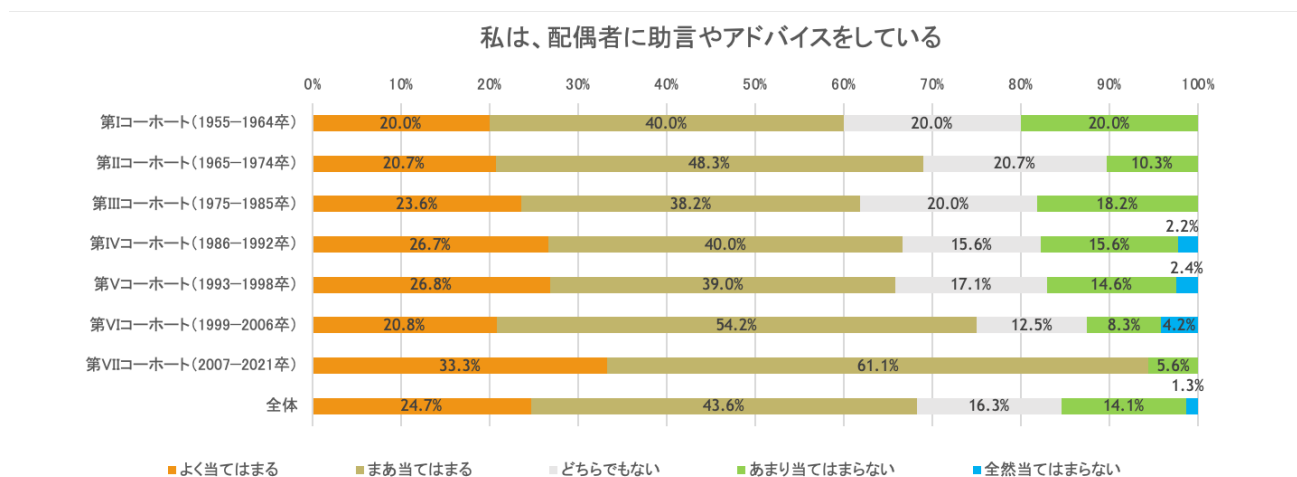
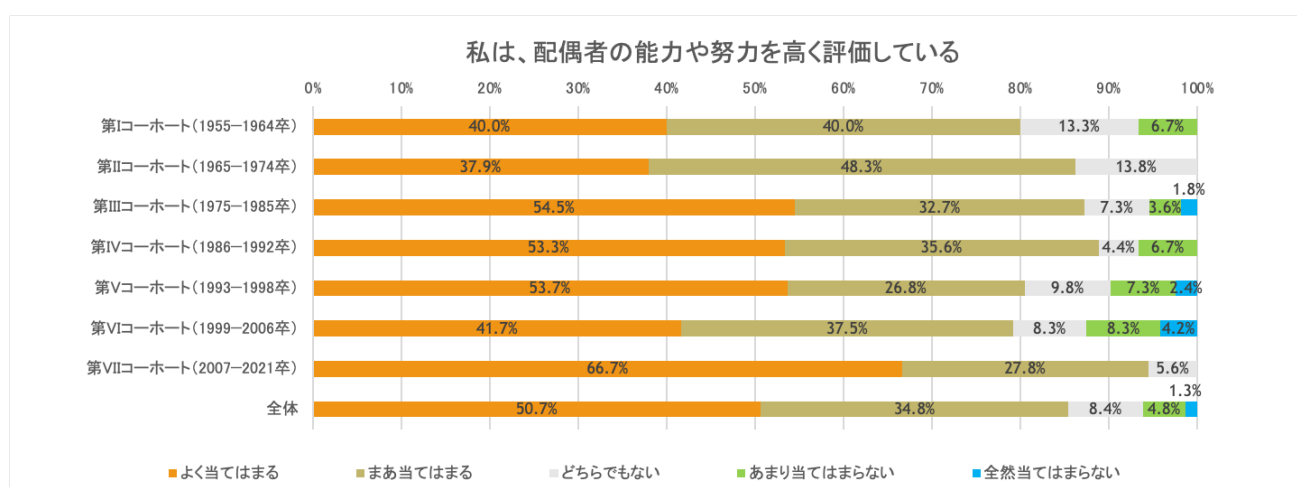
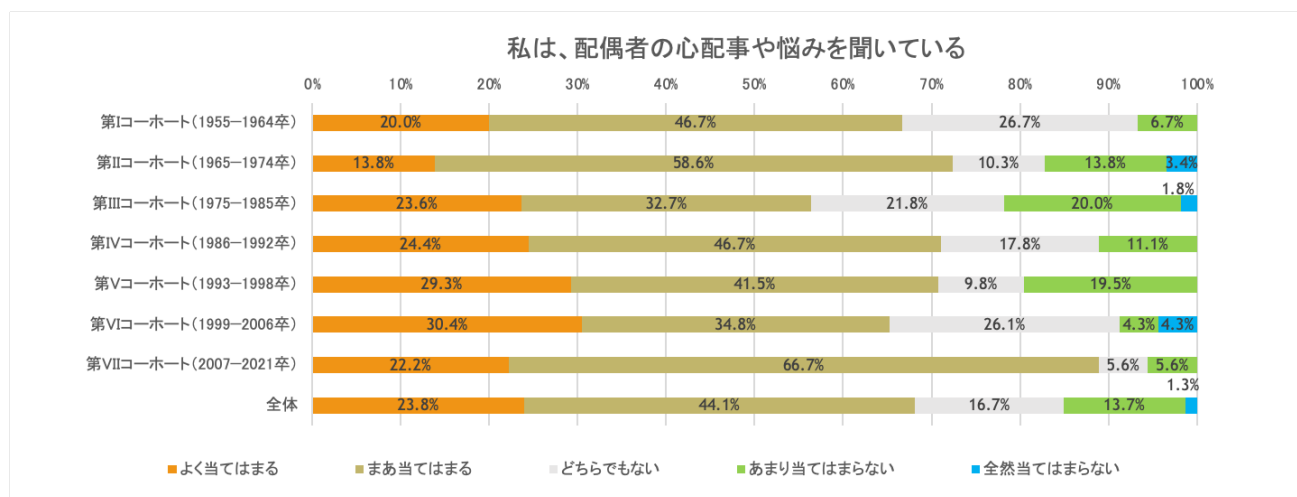


配偶者は、私の能力や努力を高く評価してくれる



配偶者は、私に助言やアドバイスをくれる



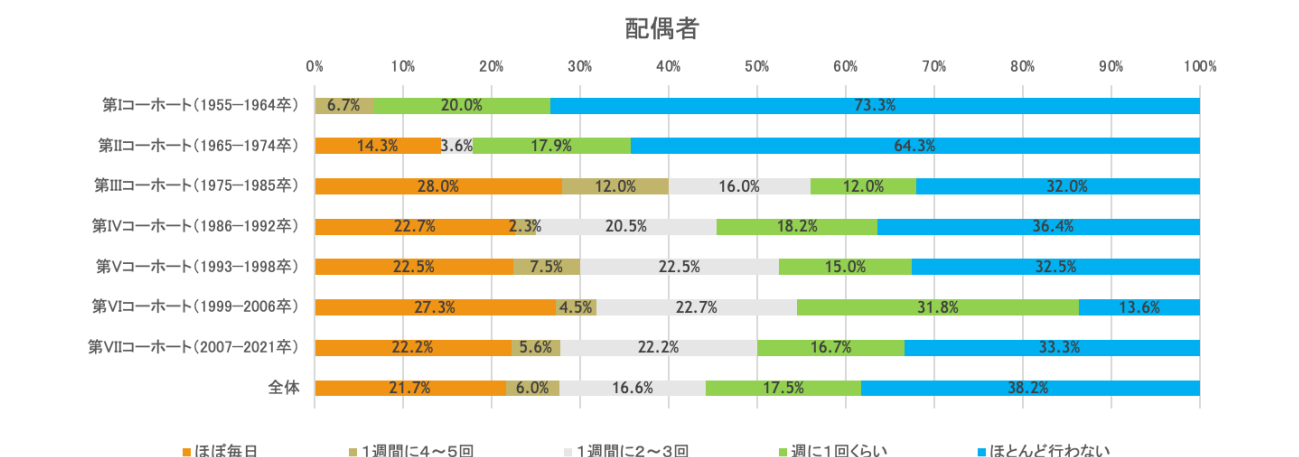
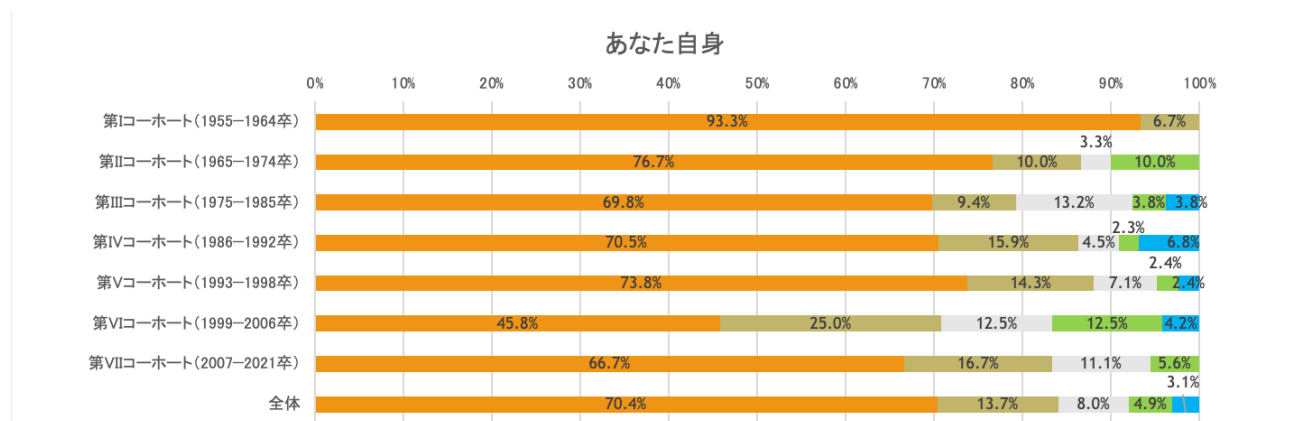


全体的な傾向として、世代が若くなるにつれてより悩みの相談や互いへのアドバイスをを行うカップルが多いようだ。また、アドバイスや助言、心配事や悩みを聞くなど相談役を務めるのは役配偶者の方が多く、能力や努力を高く評価しているという回答は双方ともに 8 割近くと高かった。互いを尊重し評価し合うカップルが多いことがうかがえる。

『家事分担』

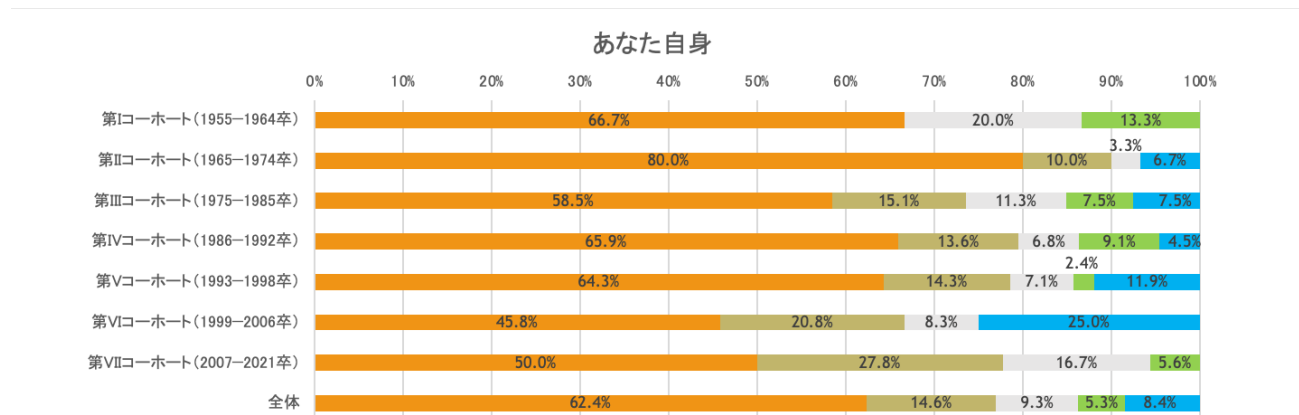
Q26-a あなた自身と配偶者は、次の家事を現在どのくらいの頻度で行なっていますか。それぞれお答えください。

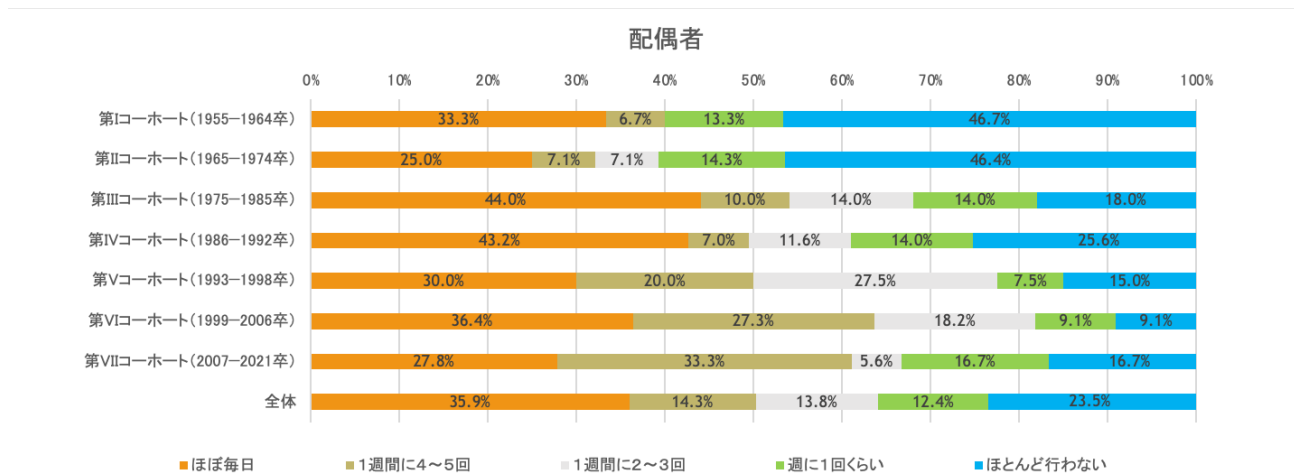
[食事の用意]



食事の用意については第IIコホートまでは「ほとんど行わない」配偶者が6,7割を占め、ほとんど自身が担当する人が多いが、若い世代ほど配偶者も担う割合が増え、週の半分以上を担うという割合は全体で27.7%となった。

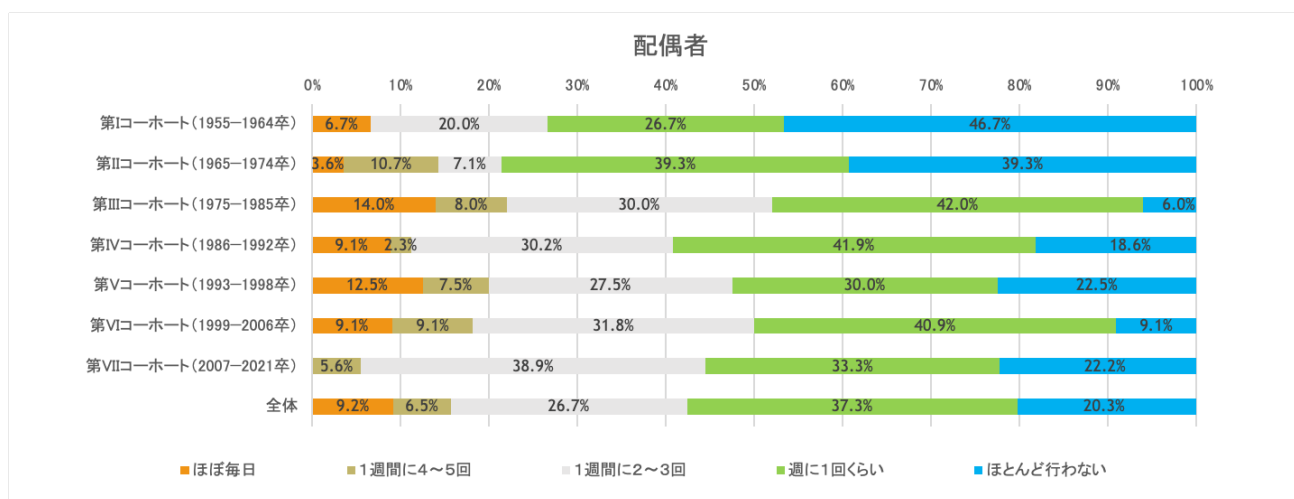
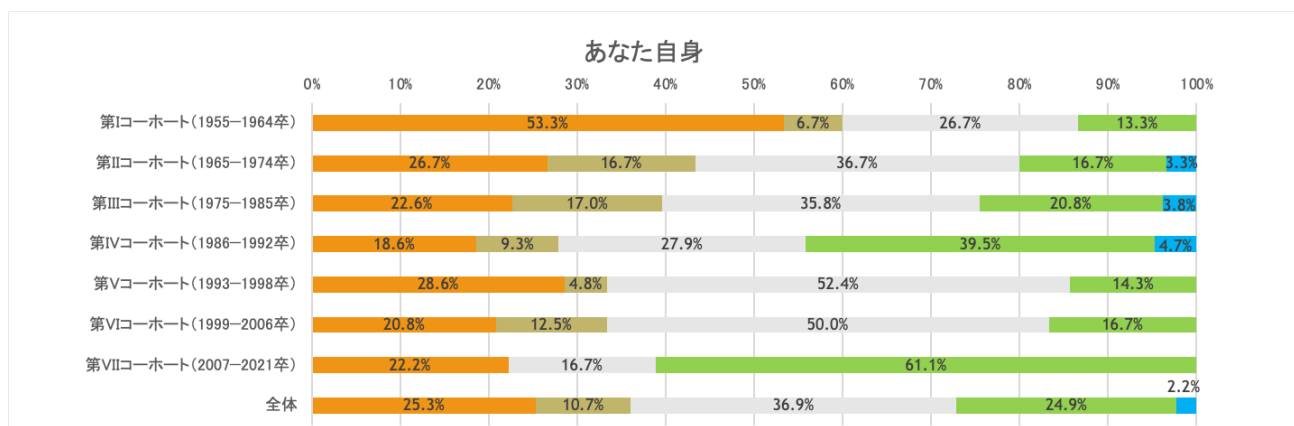
[食事の後片付け]





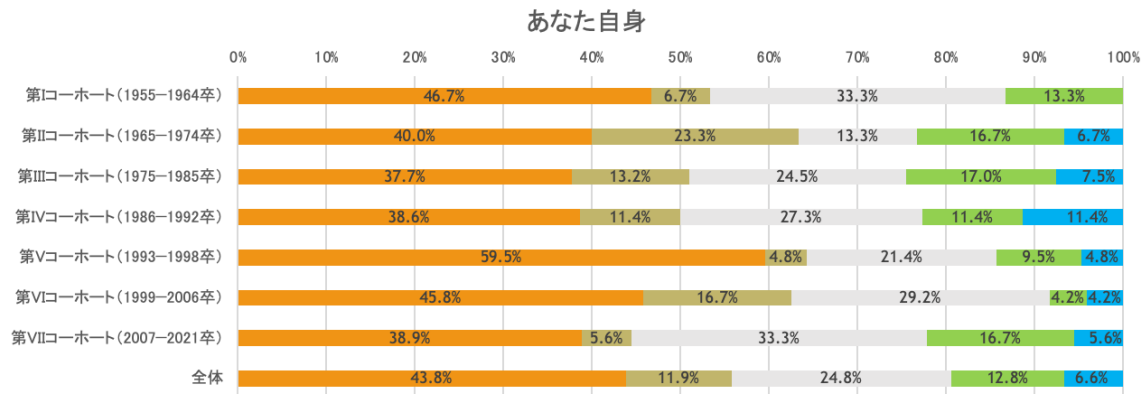
食事の後片付けも配偶者の傾向としては第Ⅱコホート以降で差があり、「ほとんど行わない」配偶者は25%以下になっている。

[食料品や日用品の買い物]

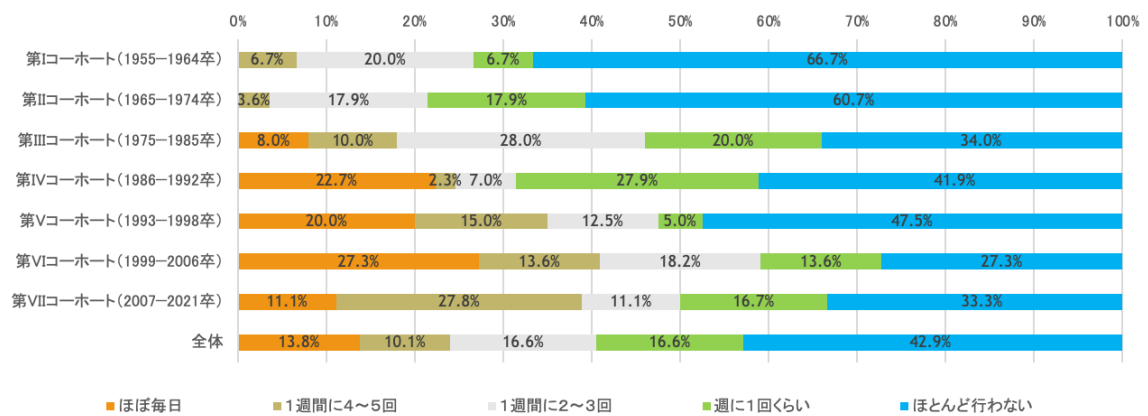


食料や日用品の買い出しについても第Ⅱコホート以降の配偶者の傾向に差があり「週に1回以下」の割合は半数程度に減る傾向にある。

[洗濯]

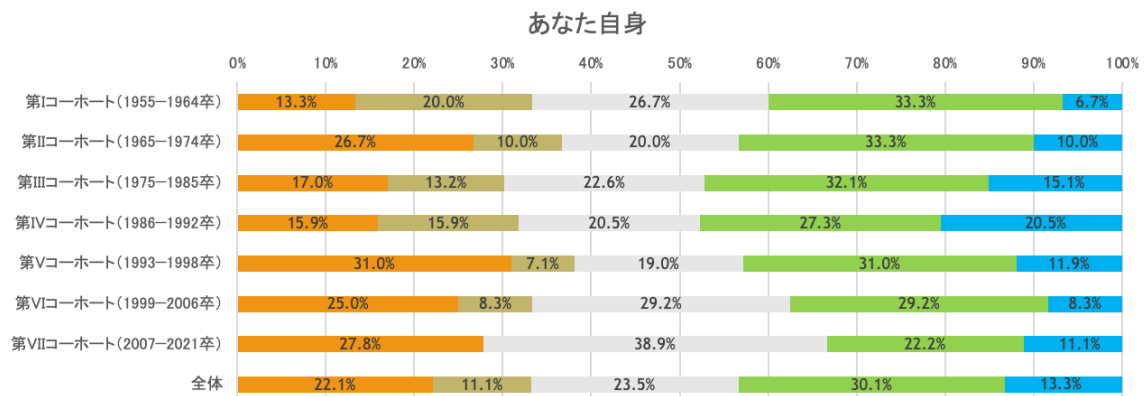


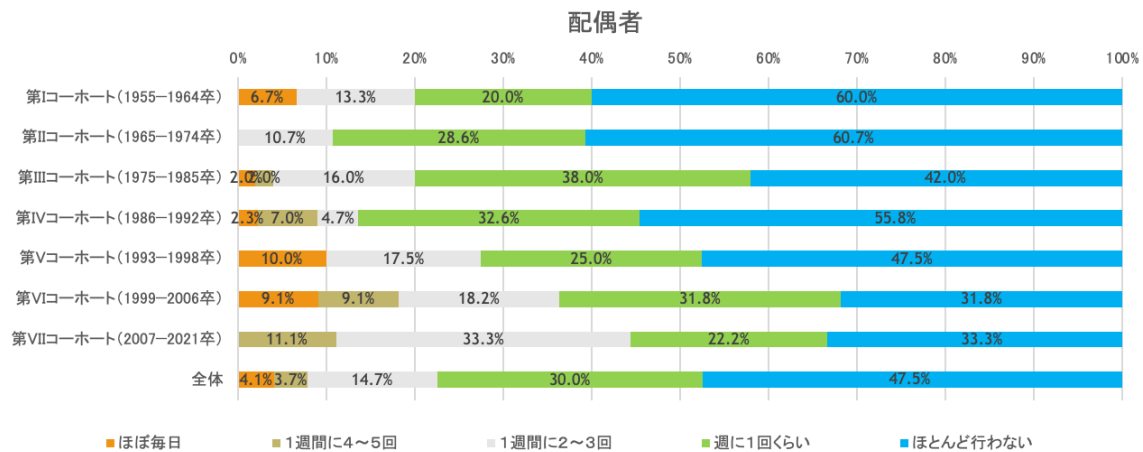
配偶者



洗濯についても回答者自身の傾向は世代であまり変わらないが、配偶者は同様に第Ⅱコホート以降はほとんど行わない割合は減る傾向にあり、担当日数も増える傾向がある。

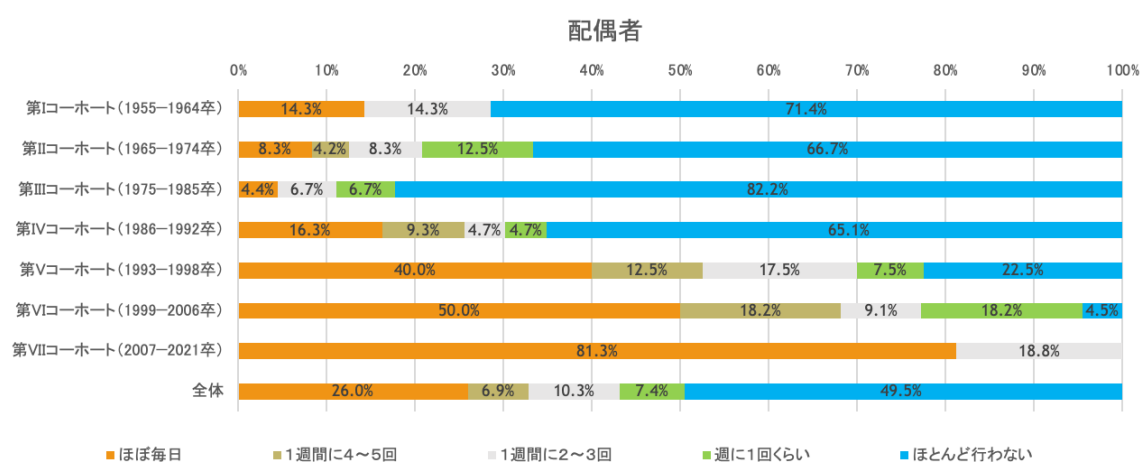
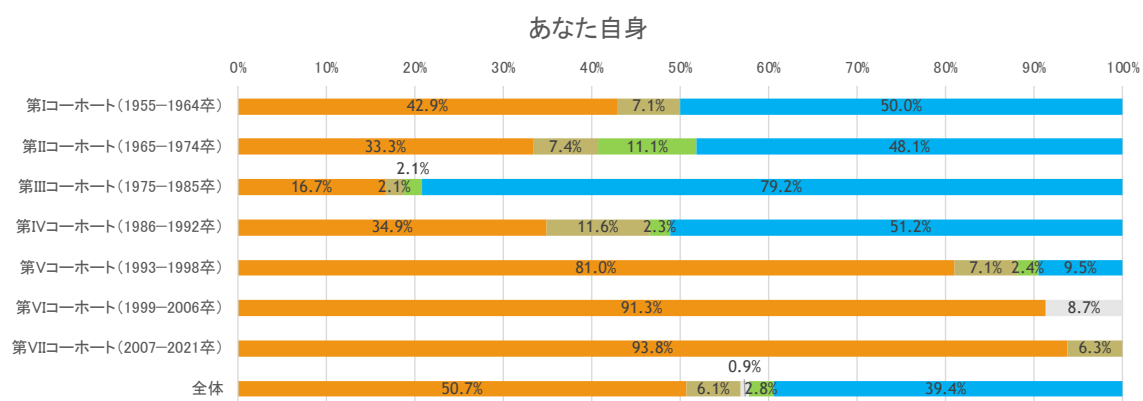
[掃除（部屋、風呂、トイレなど）]





掃除については全体的に頻度は多くないが、回答者自身がより多く担当し、配偶者が担当する日数は若い世代ほど多くなるという傾向はその他と同様だった。

[育児]

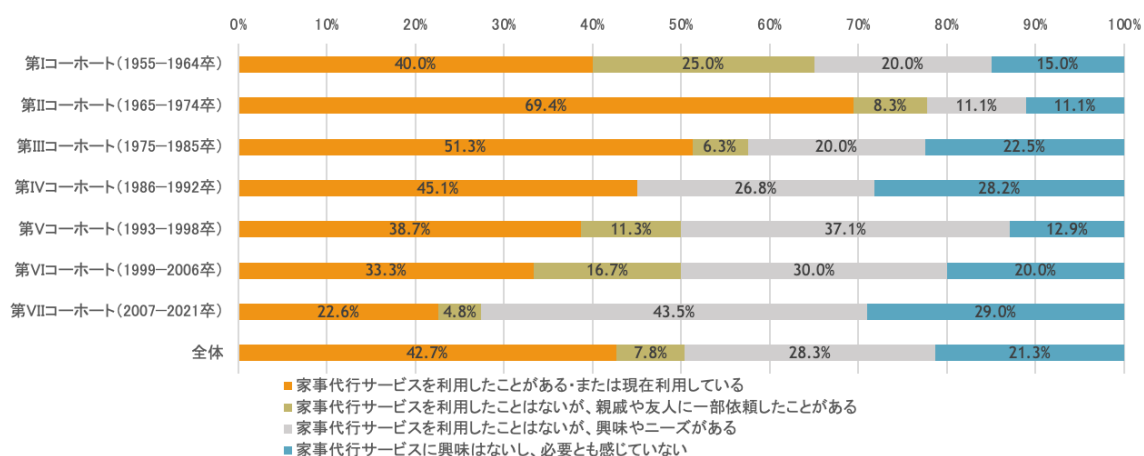


育児に関しては、すでに育児を終えている世代はほとんど行わない人が多い。育児中と思われる世代では、回答者自身は毎日という回答が 9 割近くあるものの、配偶者も参加している割合が高く、特に最も若い第VIIコホートでは 81.3%の配偶者が毎日何らかの形で育児に参加していた。ただし、この設問で

は参加の程度は問うていないため、実際の負担の具合はわからない。両親共に育児参加を行う割合は近年の働き方改革や意識改革によって高まっているようだ。

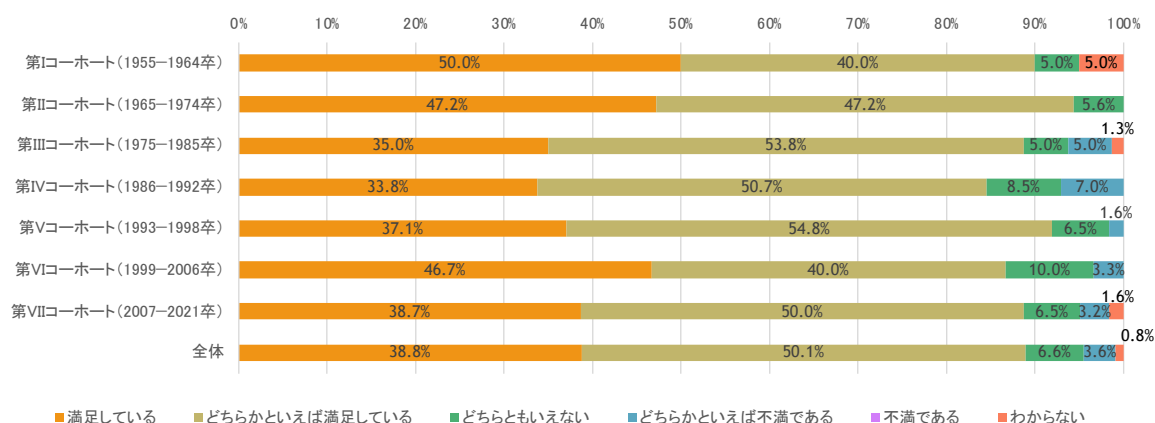
全体の傾向としてはやはり男女の家事分担の意識は世代を追うごとに、特に第Ⅱコーホート以降の世代で変化している。配偶者が家事に参加する割合は高まっており、男性の家庭内進出の傾向が見られた。一方でまだまだ対等とは言えない状況であるため、男女の性別役割分業意識はいまだに根強いのではないと思われる。

Q27 家事代行サービスについて、当てはまるものをお答えください。



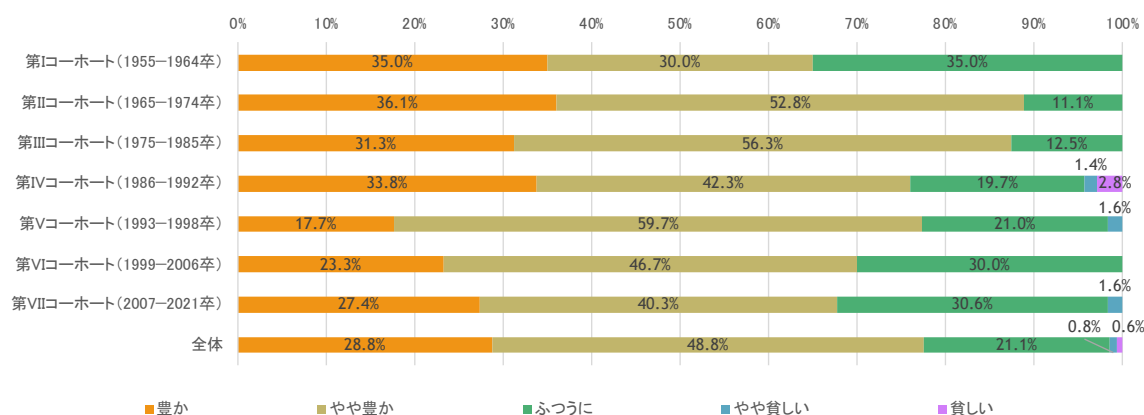
第Ⅵコーホートまでは半数近く、世代によっては 7 割近くが家事代行サービスの利用経験があり、全体の 4 割以上が利用していた。また、他人に依頼したことがある、興味やニーズがあるという回答を含めるとどの世代でも 8 割近くにニーズがあった。

Q28 あなたは生活全般に満足していますか、それとも不満ですか。



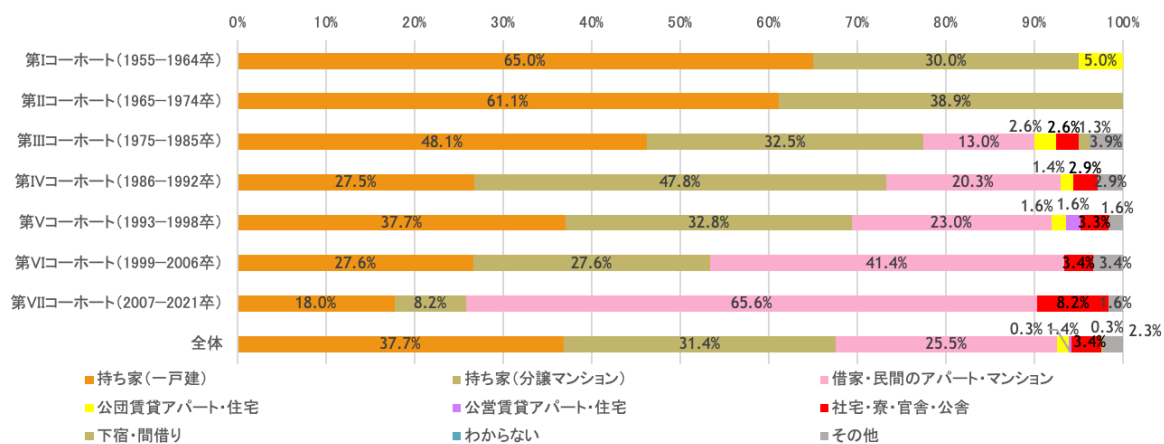
どの世代でも生活全般に満足している割合が非常に高く、88.9%が満足している。

Q29 現在のあなたの暮らし向きは、以下の5つに分けるとすればどれに当たるでしょうか。



暮らし向きの自己評価について、最も年代が上の第Iコーホートを除くと世代を追うごとに「ふつう」の割合が増えるが、概ね8割程度が豊かな部類に入ると自己評価しており、全体的に満足 of いく生活を送っている傾向にある。

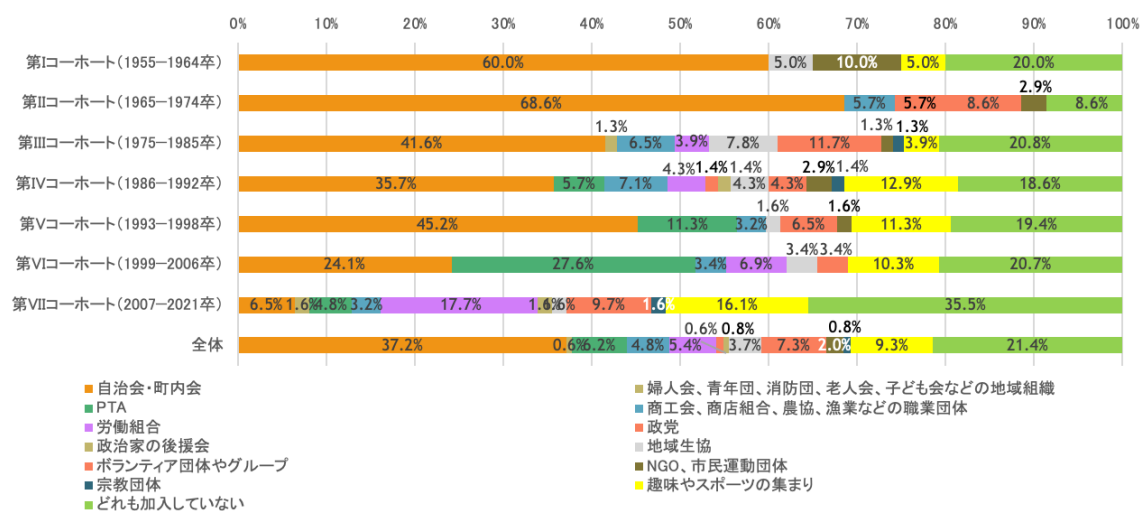
Q30 あなたの現在のお住まいは次のどれに当たりますか。



持ち家比率は明確に若い世代ほど少なくなる傾向にある。

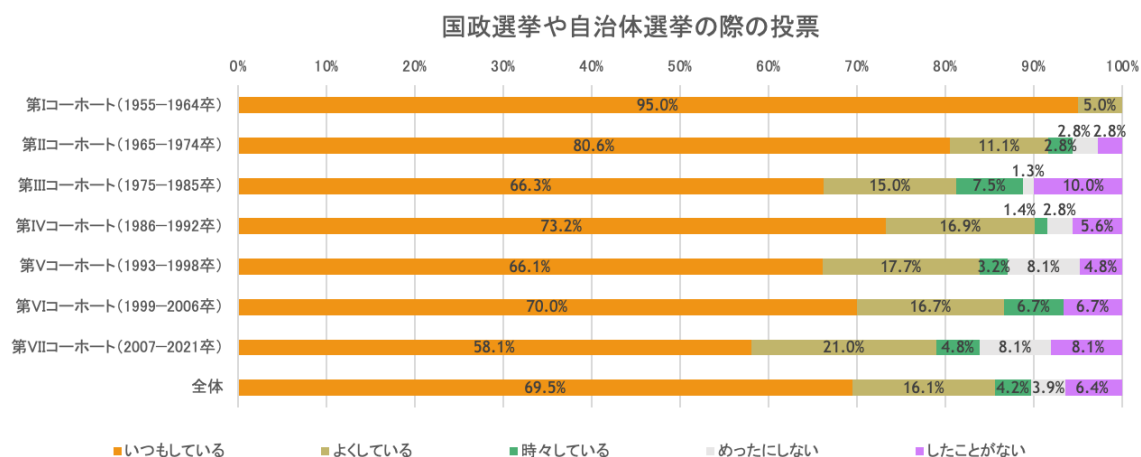
Part 4 社会活動全般

Q31 あなたは現在、以下の団体や組織に加入していますか。(複数回答)



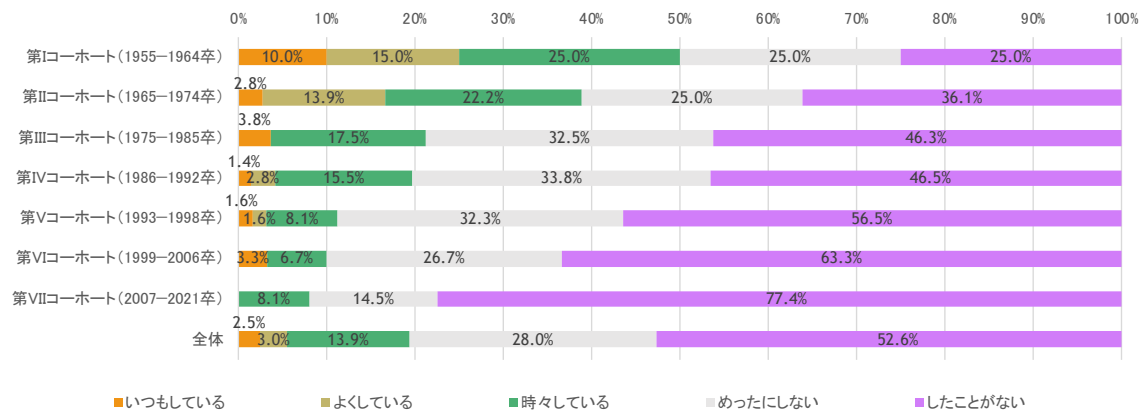
複数回答のため若干見づらいが、自治体、町内会に加入している割合は世代を追うごとに低くなっている。また逆に趣味やスポーツの集まりへの参加は若い世代ほど多く加入している。また、最も若い第VIIコホートでボランティア団体への参加が9.7%と高いのも特徴的だ。

Q32 あなたはふだん、次に挙げるような活動をそれぞれどの程度していますか。

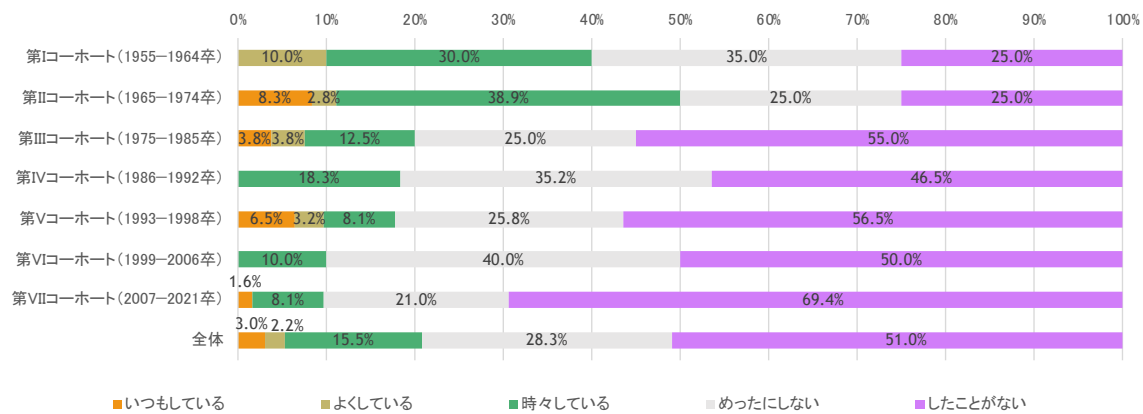


投票行為は世代を追うごとに低くなっているものの、全体の69.5%が投票を毎回行い、よくしていると回答した割合を含めると85.6%となる。日本の投票率の平均が近年55%前後に低下していることを鑑みると、東大卒女性の投票率はいまだに非常に高い。

政治活動や選挙運動の支援（署名や資金カンパを含む）

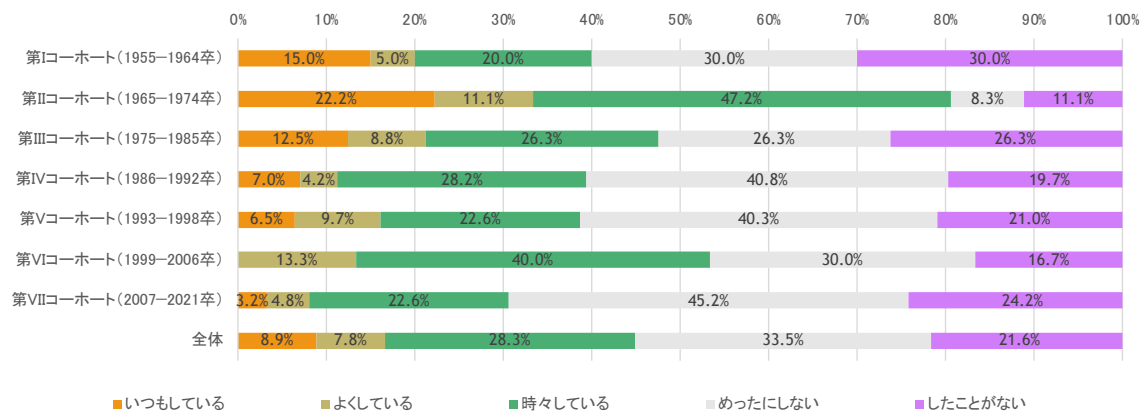


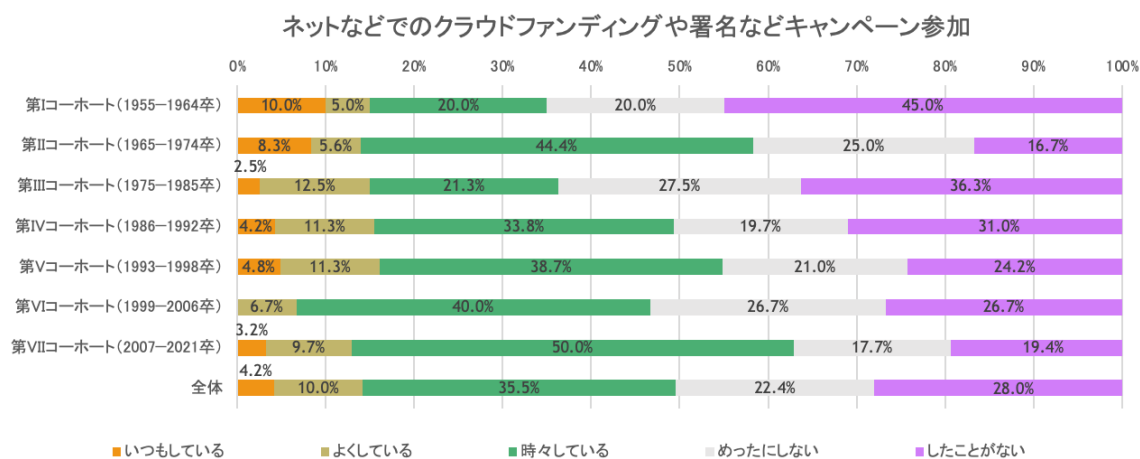
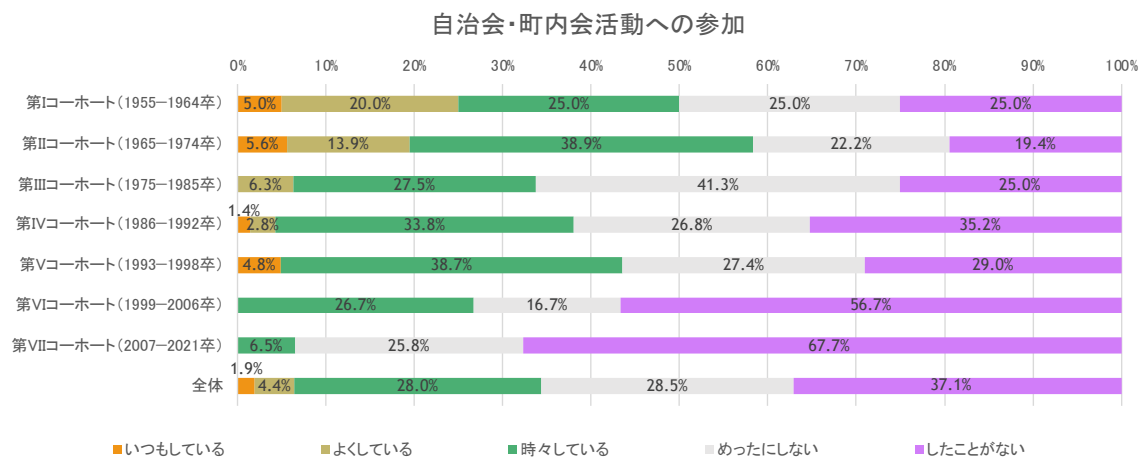
市民運動への参加



政治活動、市民運動への参加は第Ⅱコーホートまでは半数以上が「いつも」から「時々している」と回答しており、特に最初の東大卒女性となった世代の活動は非常に活発である。一方で、それ以外の世代ではしない割合が多数派となっている。

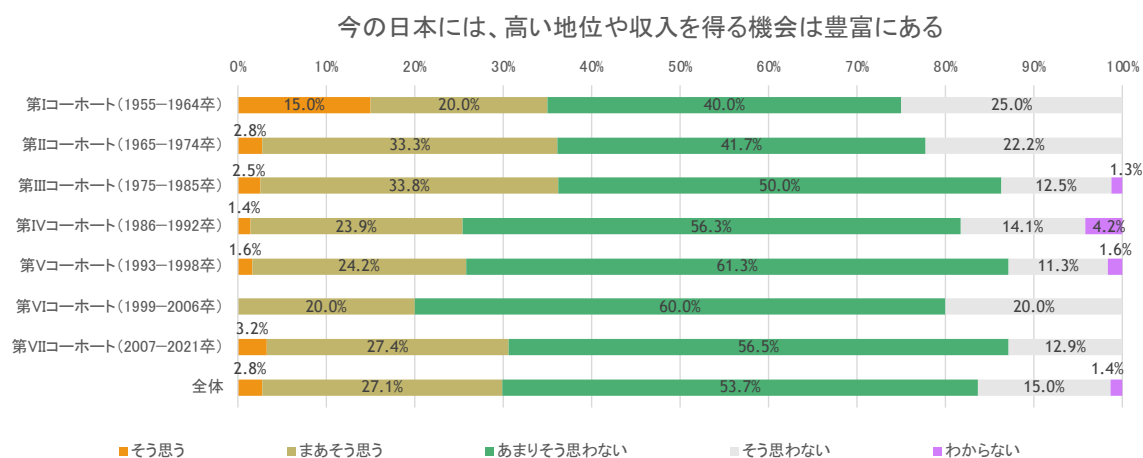
ボランティア活動への参加



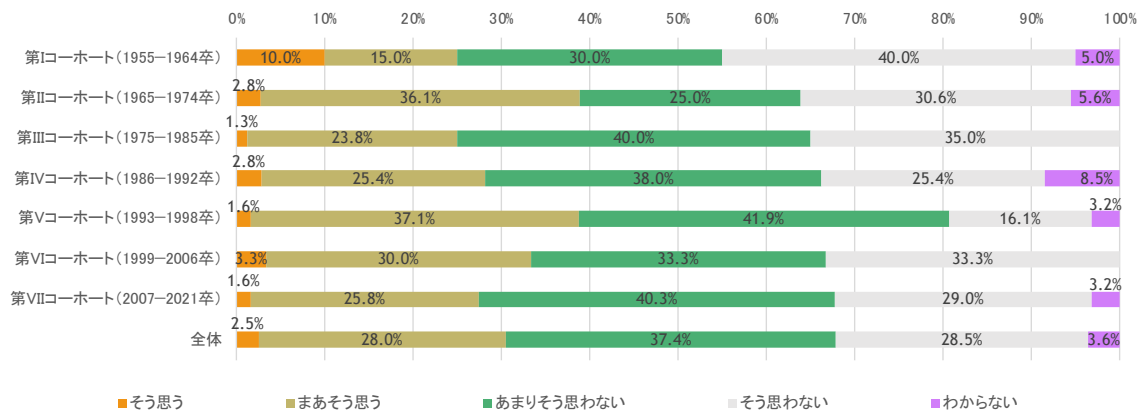


ボランティア、自治体活動、キャンペーン参加は時々するという回答者がどれも半数近く、興味のある人が多かった。全体を通して、東大卒女性の社会、政治への参加の度合いは高い。

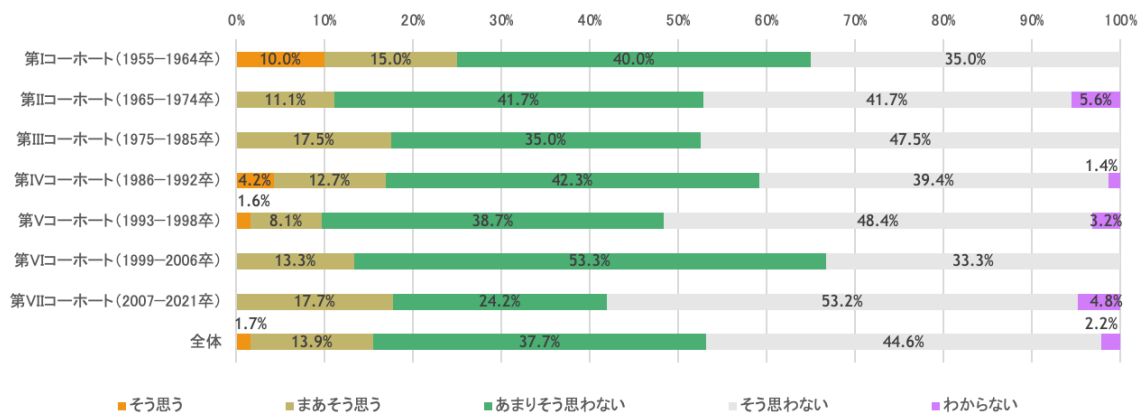
Q33 以下の様々な意見について、それぞれあなた自身はどのようにお考えですか？



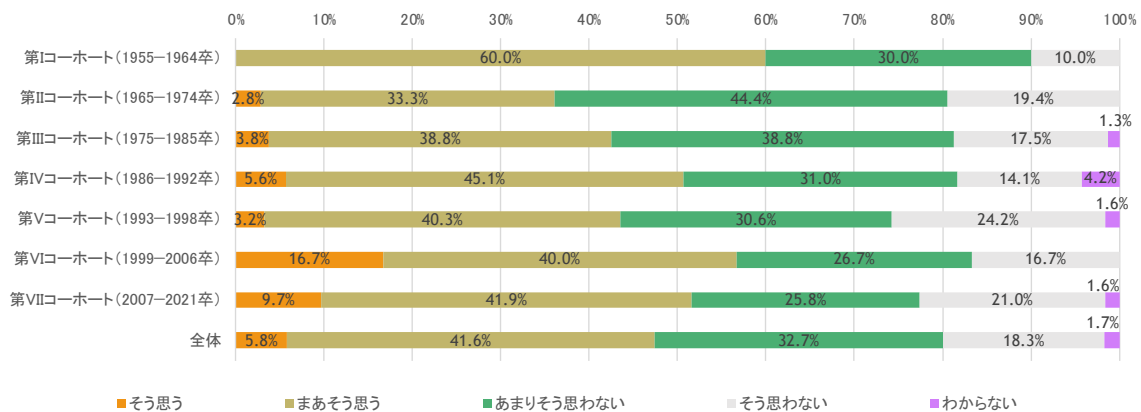
今の日本では、高い地位や収入を得るための競争は、納得のいくしかたでなされている



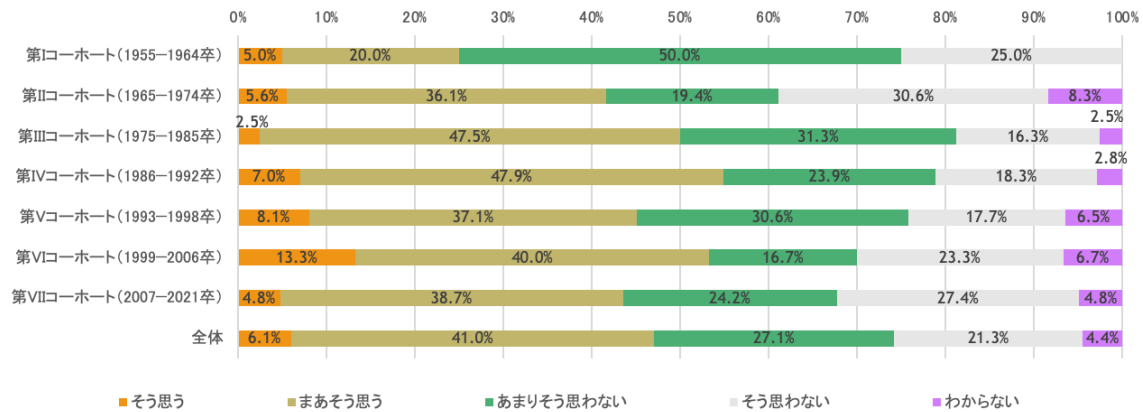
今の日本では、大学教育を受ける機会は、貧富の差に関係なく平等に与えられている



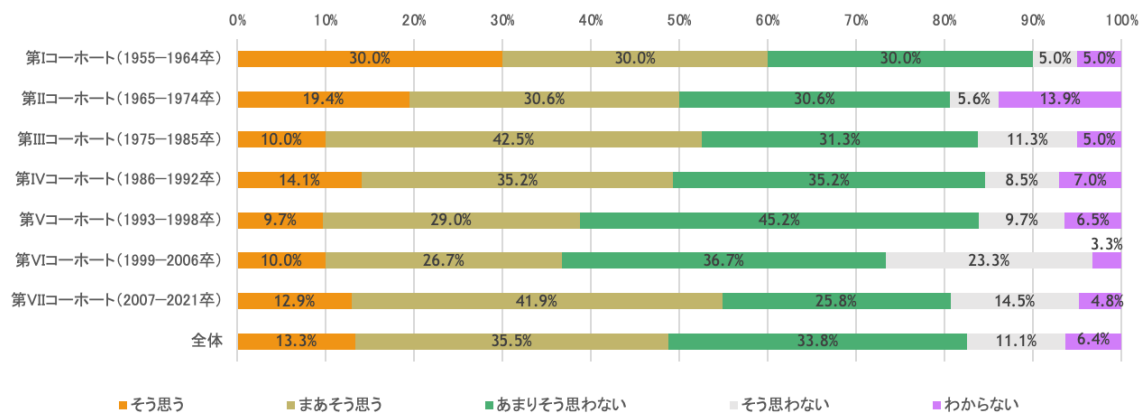
今の日本では、学校以外にも教育や訓練の機会は豊富にある



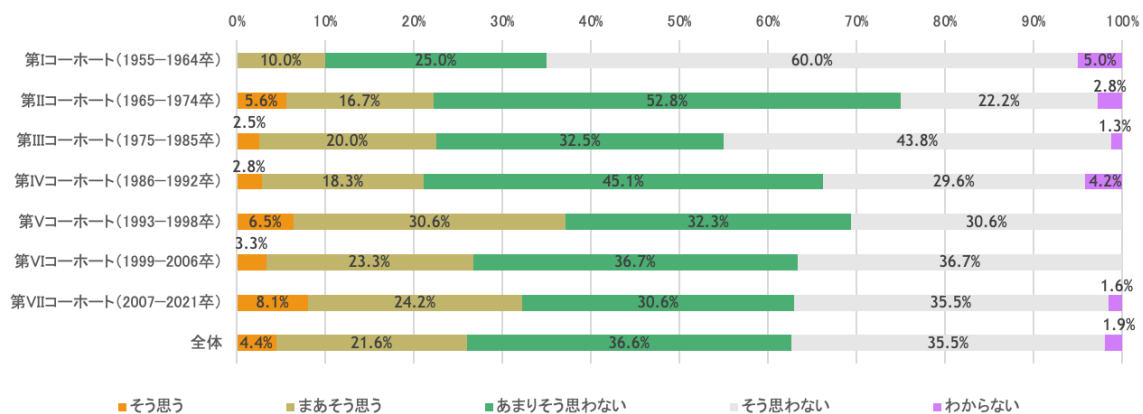
チャンスが平等に与えられるなら、競争で貧富の差が付いていてもしかたがない



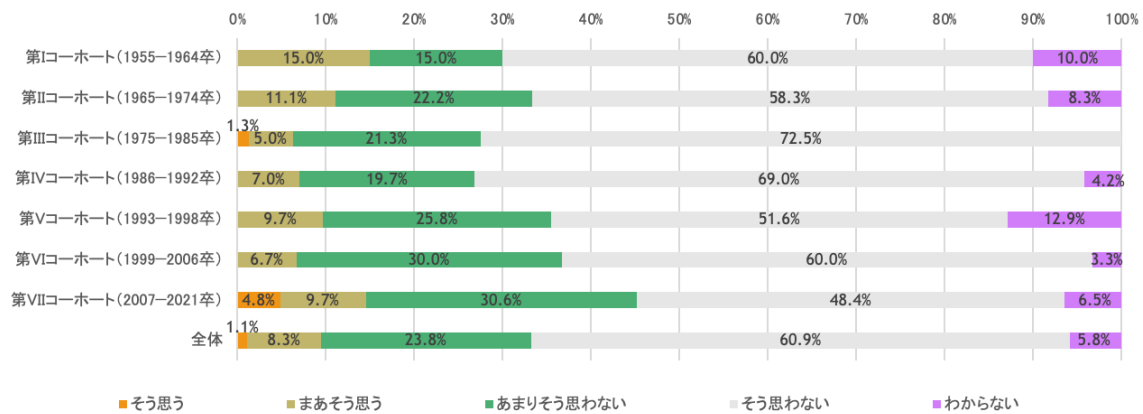
競争の自由を守るよりも、格差をなくしていくほうが大切だ



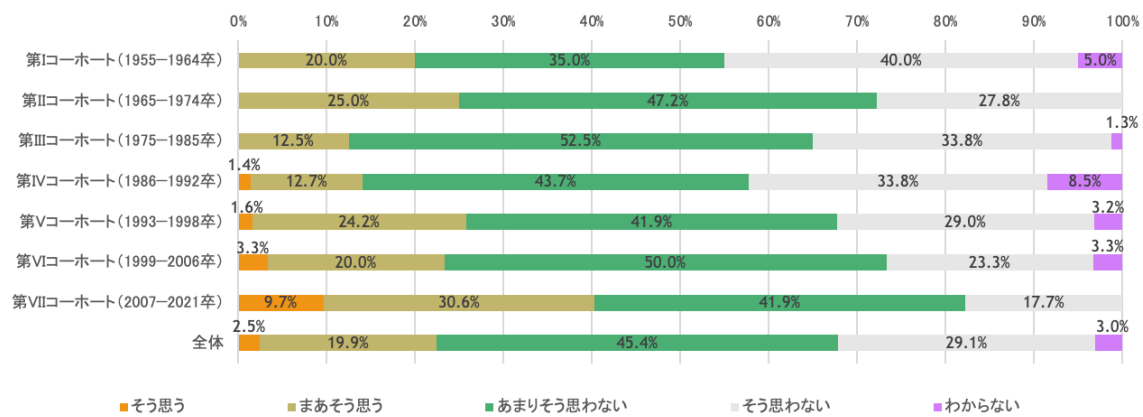
我々が少々頑張ったところで、社会はよくなるものではない



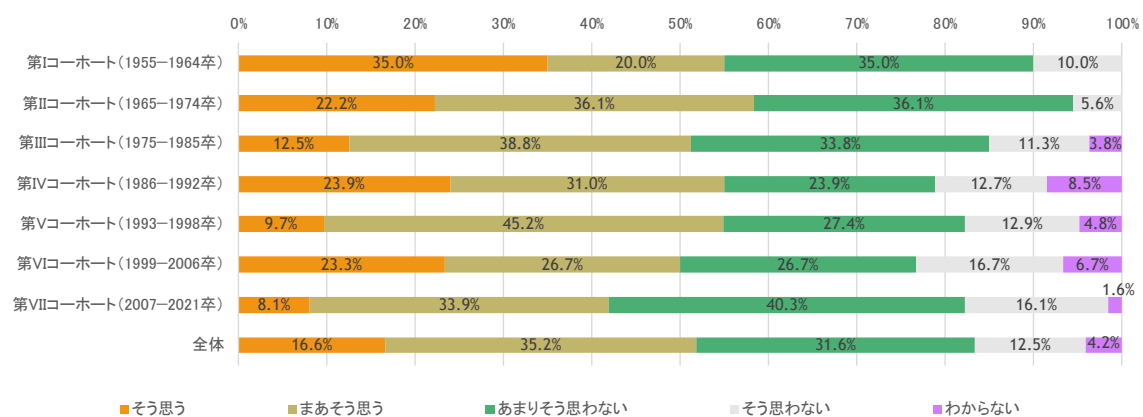
みんなで議論するよりも、有能な政治家に任せたほうが政治はうまくいくものだ



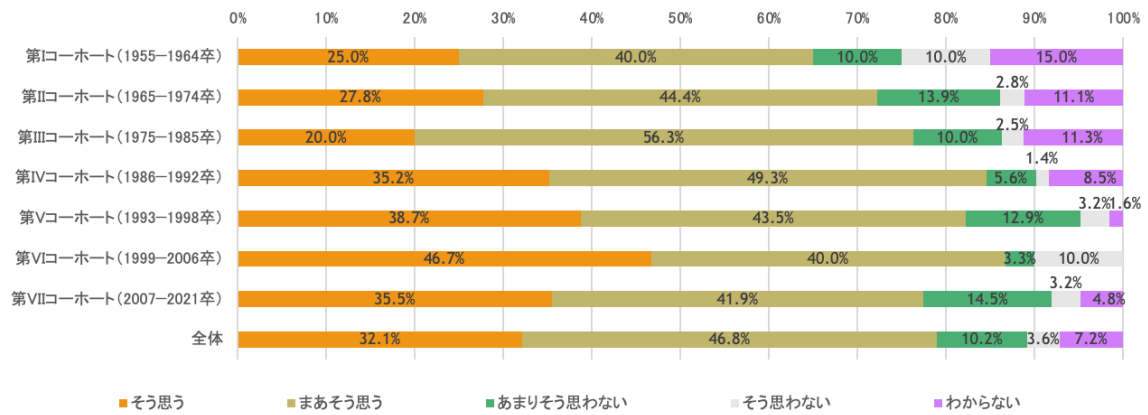
どんな学校を出たかで、人生がほとんど決まってしまう



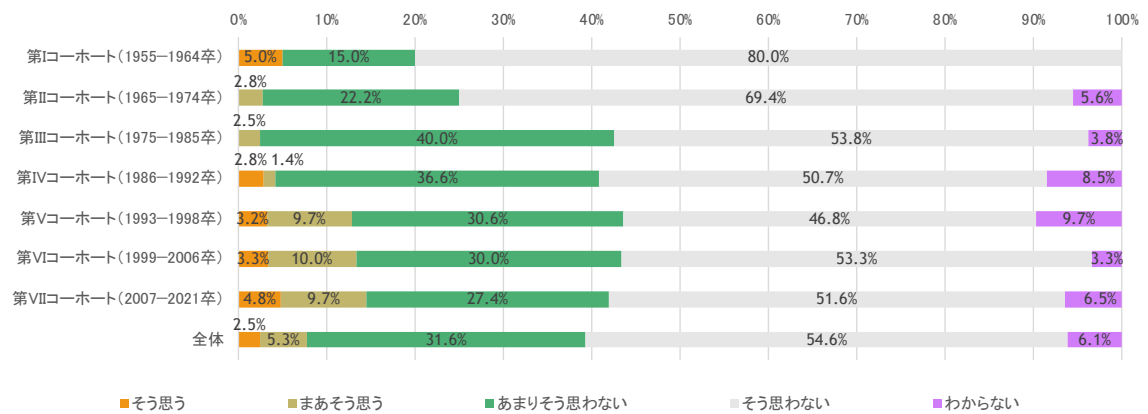
今の日本では、収入の格差が大きすぎる



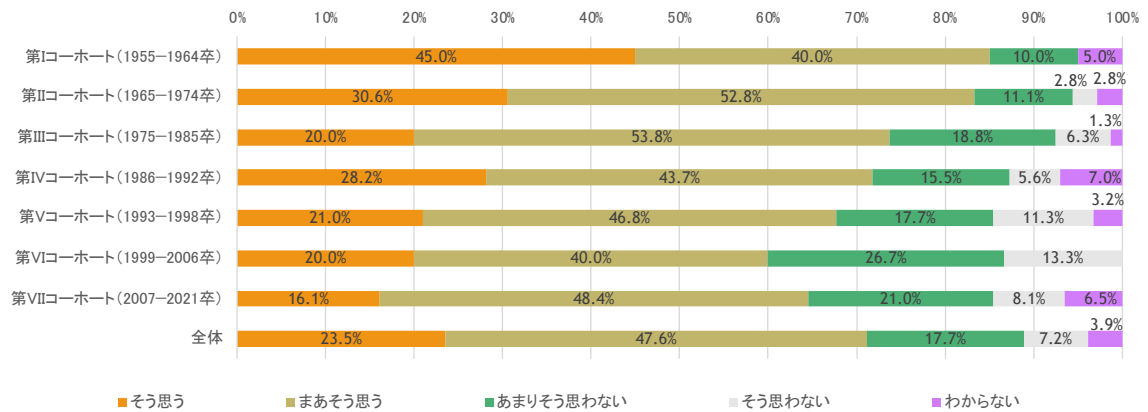
10年後の日本では、収入の格差が今より広がっている



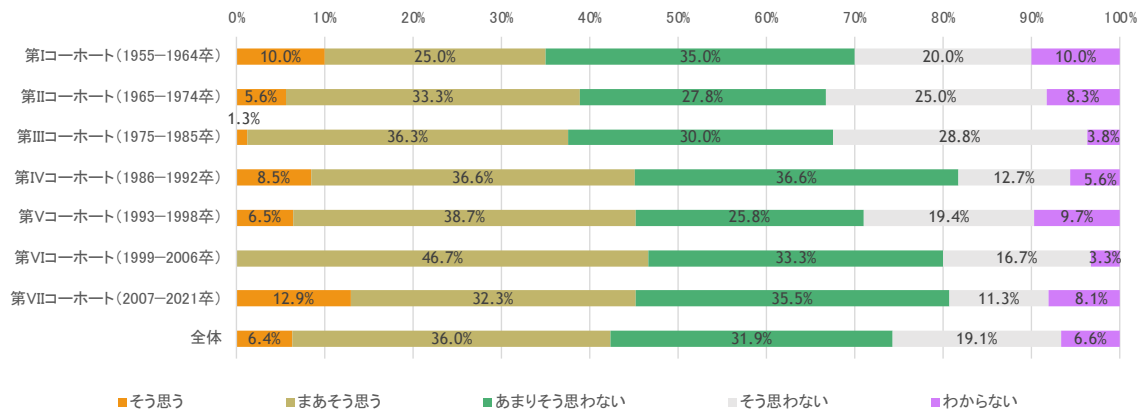
今後、日本で格差が広がっても構わない



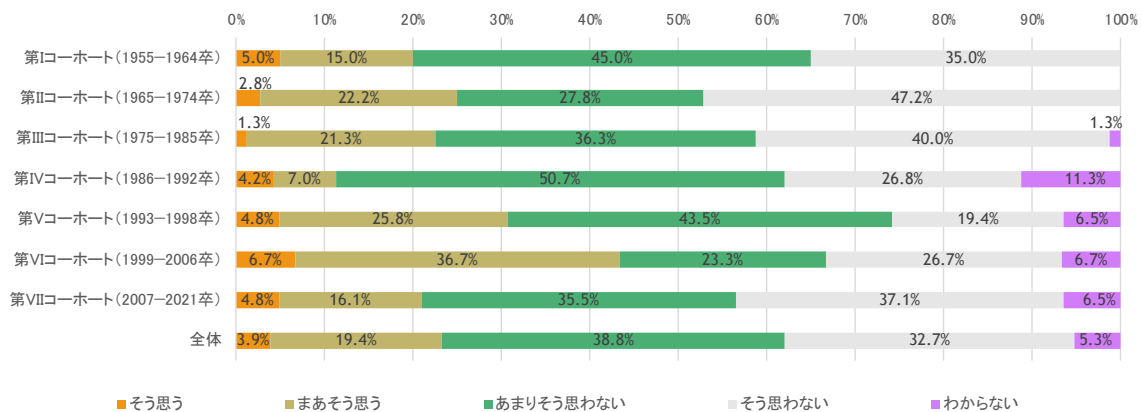
政府は豊かな人からの税金を増やしてでも、恵まれない人への福祉を充実させるべきだ



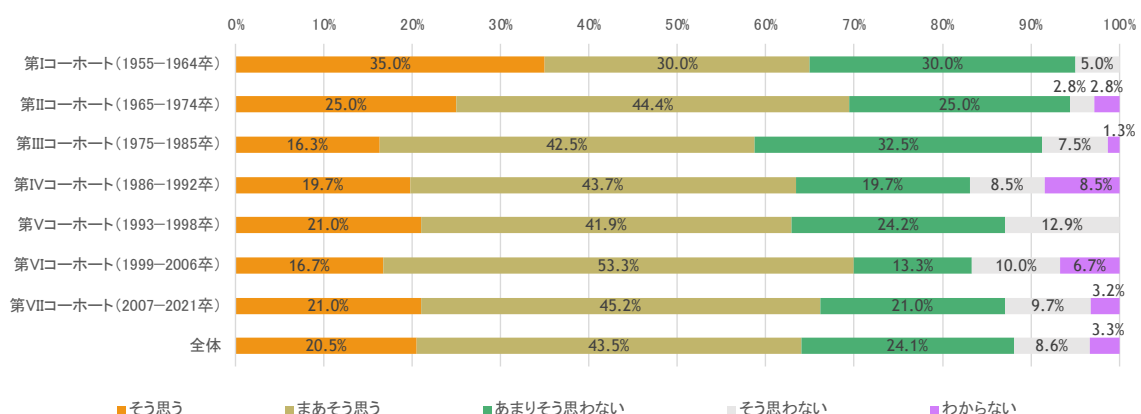
経済に対する政府の規制は出来るだけ少ない方がよい



政府や自治体が行ってきた公的サービスは、出来るだけ民間企業に任せるのがよい



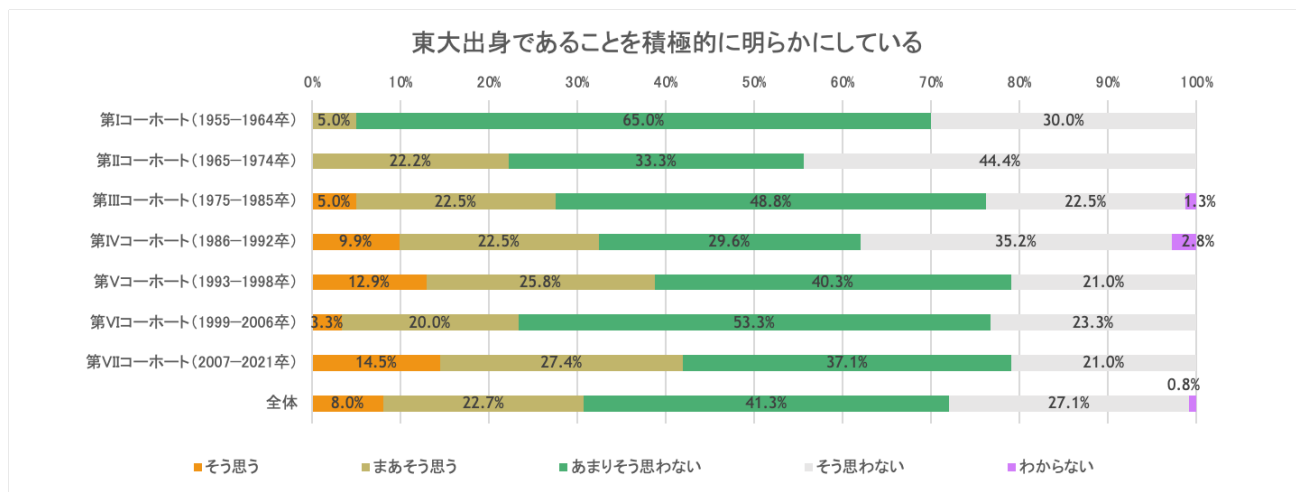
理由はともかく、生活に困っている人がいたら、国が面倒を見るべきだ



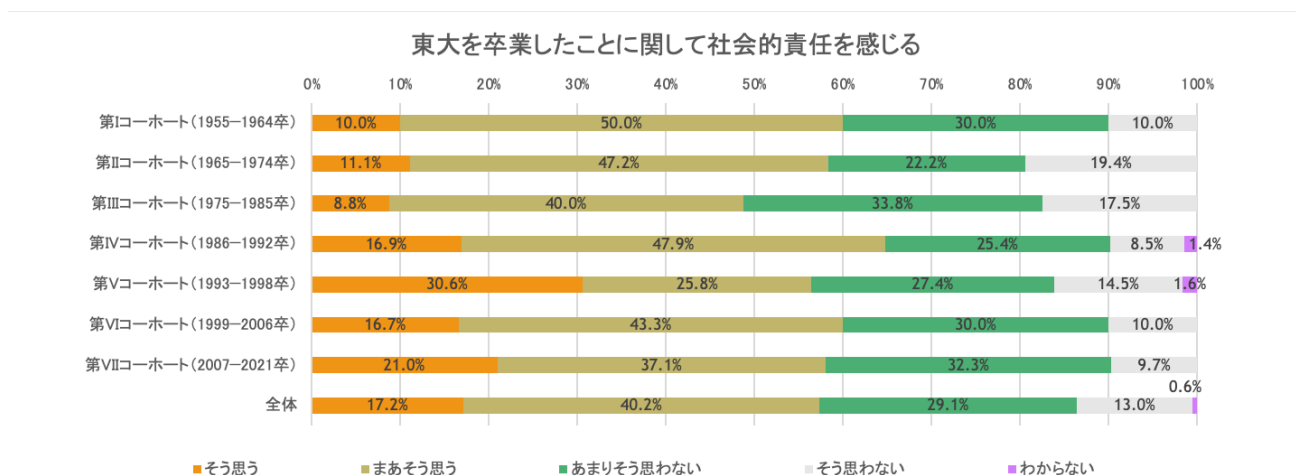
全体を通して、今の日本で「機会」自体は豊富に提供されていると思う割合はどの世代も共通して高い。また世代を問わず見られた傾向として、政治家任せではなく皆で議論すべきだという考えや、格差がこのままでは広がるという見方、格差を是正すべきだという考え、また生活に困る人に対して国が対処す

べきだとする割合が非常に高い。一方、学歴の影響度や民営化については世代で見解が比較的ばらついていた。

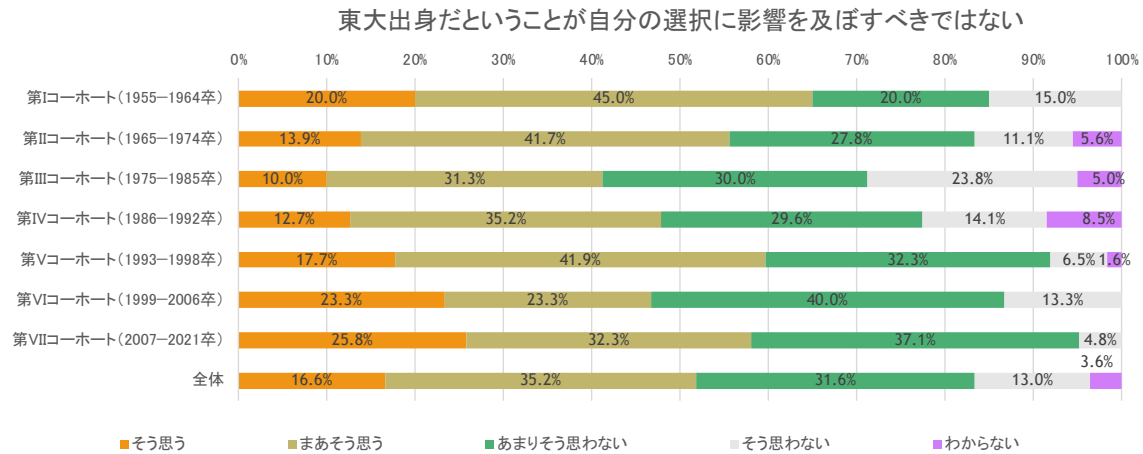
Q34 東大出身であることについて、あなたはどのように思いますか。



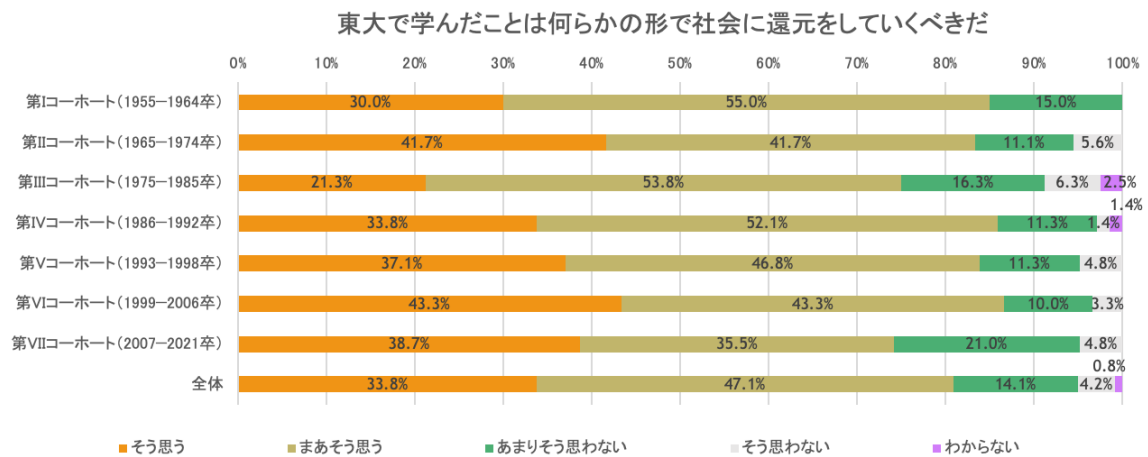
世代を追うごとに積極的に明らかにしている割合が増えているが、おそらく周囲からのネガティブな評価を避けるため、上の世代ではほとんどが積極的には明らかにしていない。



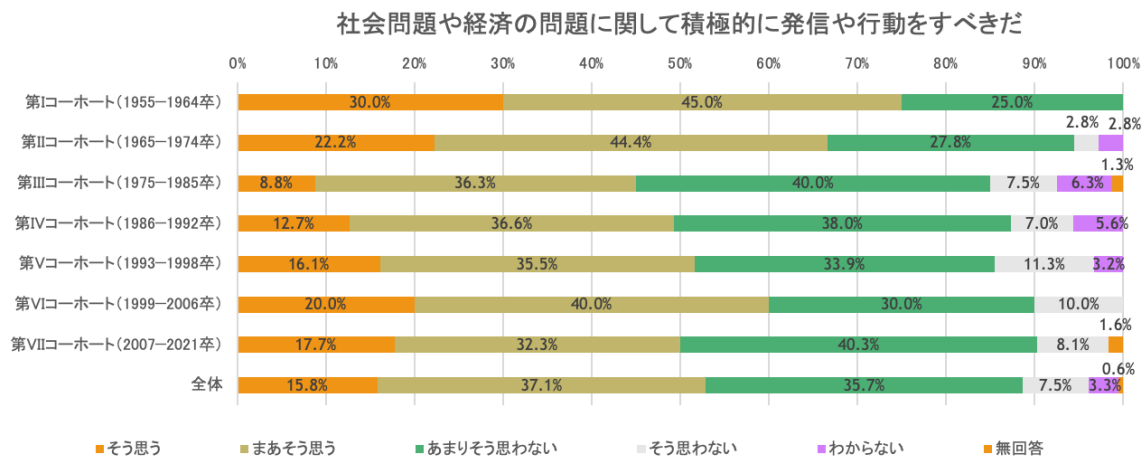
世代を問わず、東大卒に対しての社会的責任を感じる人は6割前後と多い。



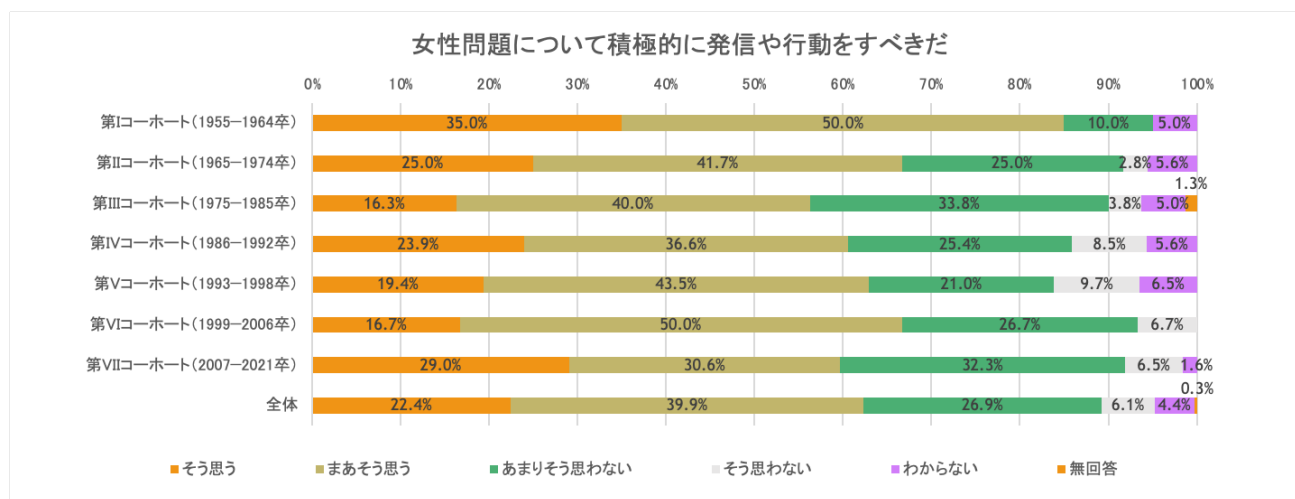
全体として東大出身であることが選択に影響を及ぼすべきか、自由に選択すべきかどうかの価値観はどの世代でも真っ二つに分かれた。前の設問と合わせると、東大卒として「選ぶべき道がある」と考える人と、「自由に選べることを示すべきだ」という社会的責任に対しての考え方もそれぞれで異なるのかもしれない。



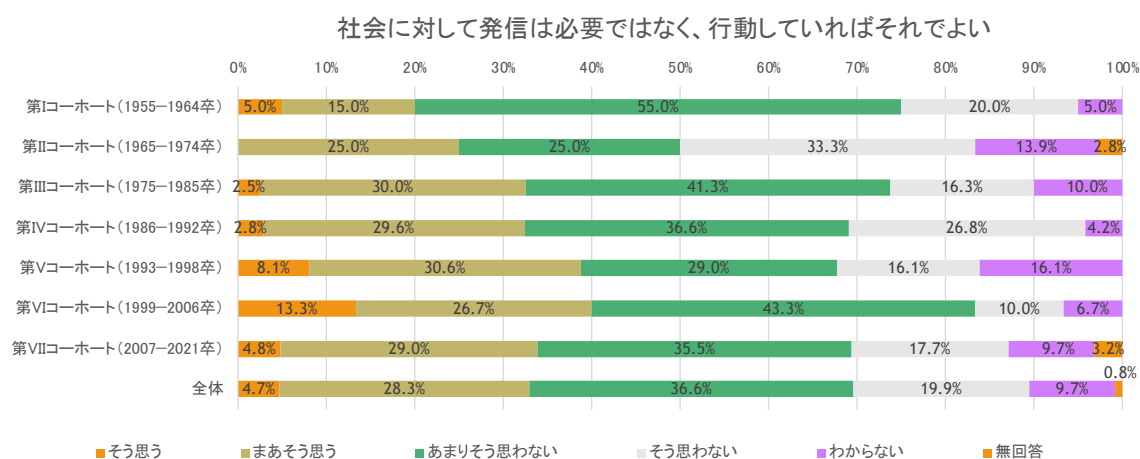
世代を問わず 8 割前後が東大での学びを社会に還元すべきだと考えていた。



社会の問題に関して発信すべきだと考える割合は上の世代ほど高い。全体としては半々に割れた。

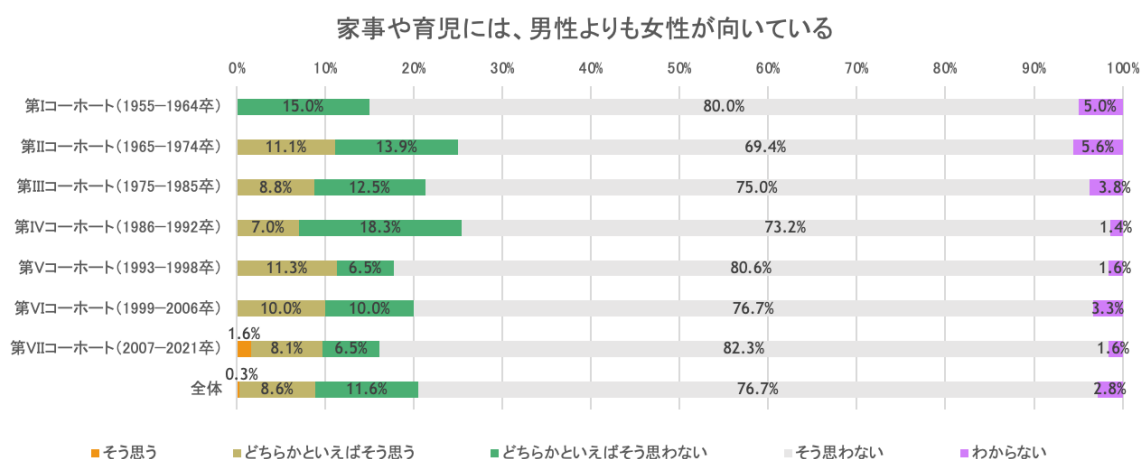
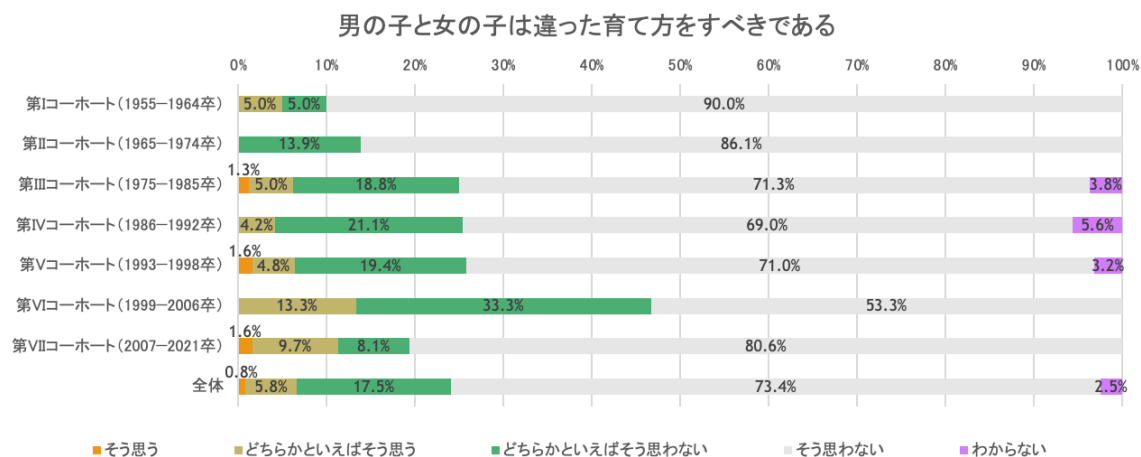
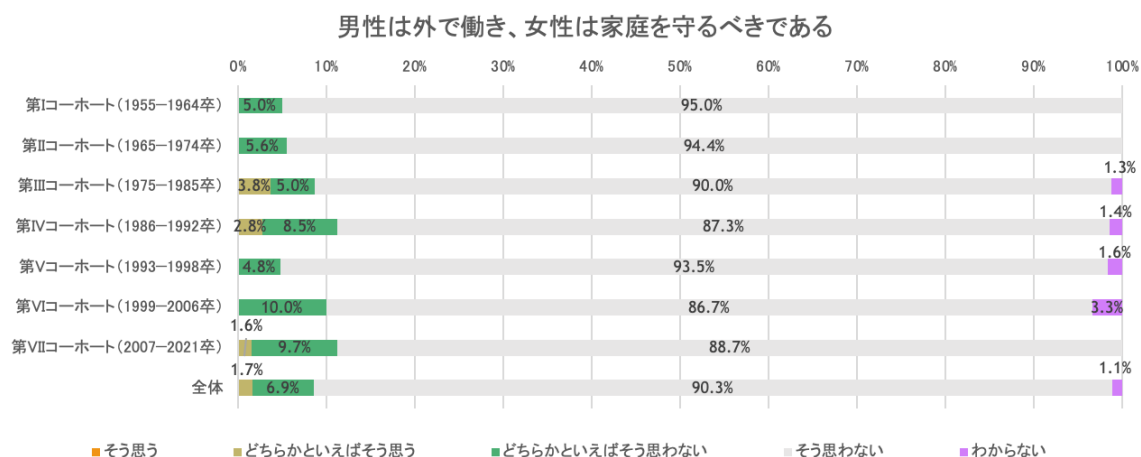


こちらも特に第 I コホートは 8 割以上が女性問題に関して発信すべきだと考えている。全体としても 6 割以上は女性問題に関して発信すべきと考えており、関心が高い。



行動していれば発信は不要である考える割合は世代を通して低く、3 割である。

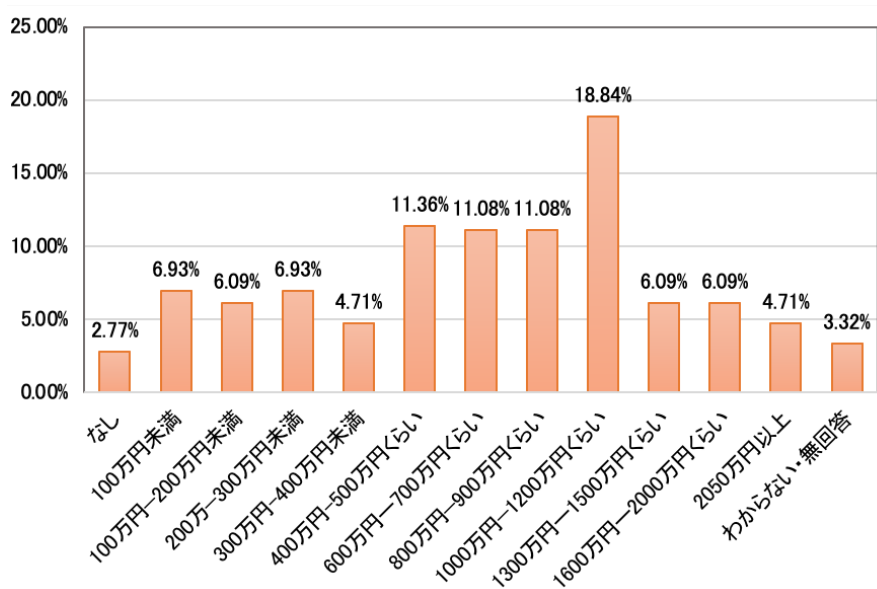
Q35 男女の役割に関する次のような意見について、それぞれあなたはどのように思いますか。



男女の性役割分担については、全世代を通して否定的な意見が 9 割以上であった。子供の性別ごとの育て方については世代が下がるにつれてやや曖昧に否定する回答が多くなった。

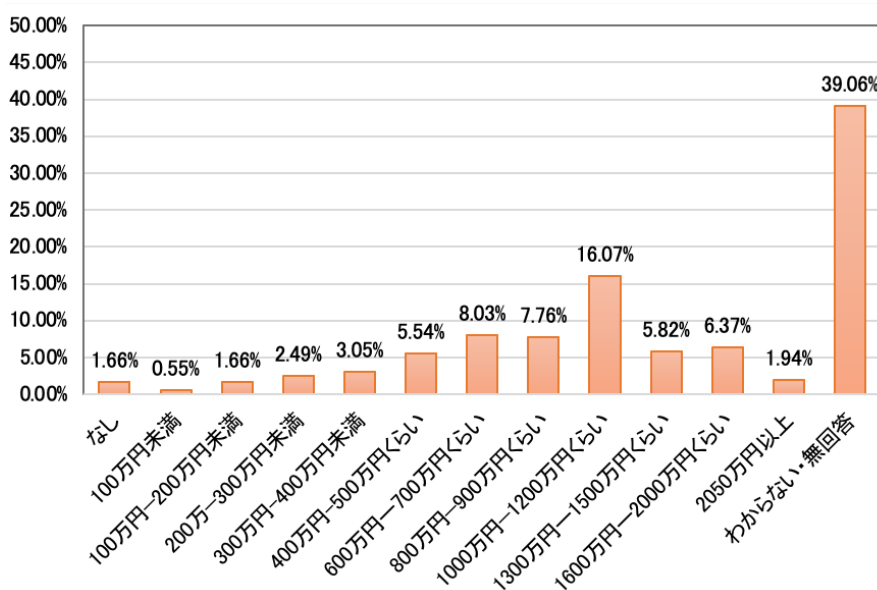
Part 5 収入について

Q36-a 過去1年間の収入についてお伺いします。あなた個人の収入は、税込みでいくらでしたか。



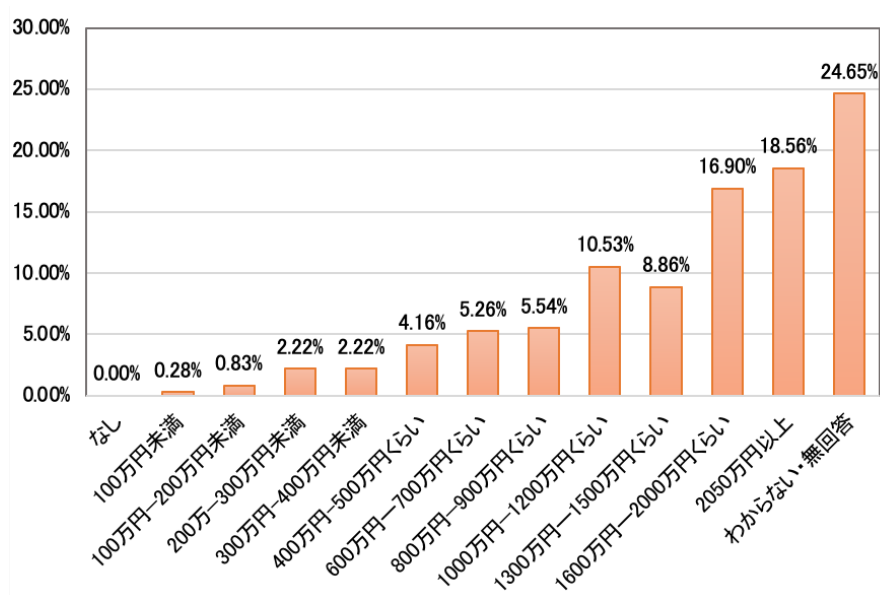
自身の収入については、大きく日本の平均を上回る結果となり、東大卒女性の大きな特徴の1つと言える。中でも年収1,000万円以上の層に注目すると、約36%であった。日本における男女を合わせた平均年収1,000万超の人の割合は3~5%程度であることを考えると、驚くべき数字である。

Q36-b 過去1年間の収入についてお伺いします。配偶者の収入は、税込みでいくらでしたか。



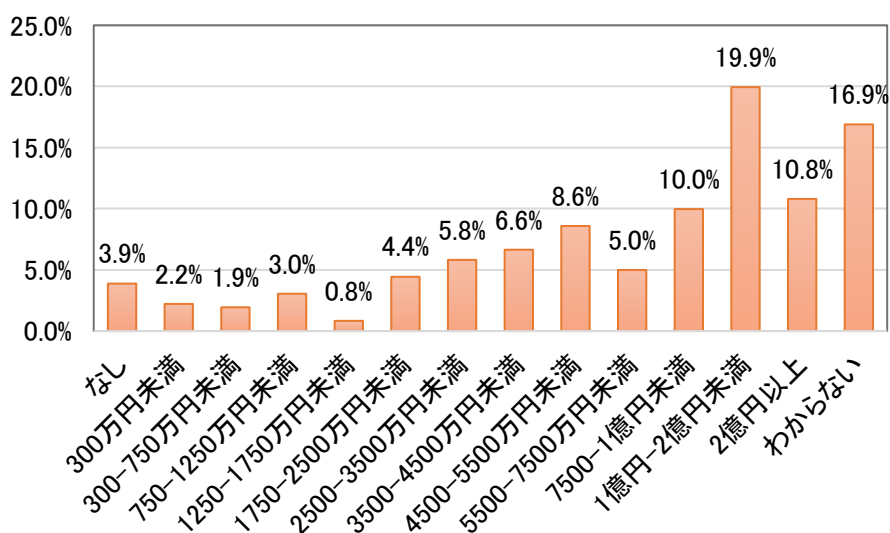
配偶者の年収を尋ねたところ、自身の年収よりもさらに高くなる傾向が現れた。回答者のおよそ1/3が1,000万円以上の年収を得ており、東大卒女性の配偶者は高所得者が多いことがうかがえた。

Q36-c 過去1年間の収入についてお伺いします。世帯全体の収入は、税込みでいくらでしたか。



世帯年収を尋ねたところ、半分以上が1,000万円以上の年収となっている。また、2,000万円以上の割合も18.56%と、夫婦どちらも稼ぐ力のある「パワーカップル」が多いことが分かった。

Q37 あなたのご家族（生計を共にしている家族）が所有している資産（預貯金、株式、不動産など全て含みます）の総額は時価でどのくらいになりますか。おおよそで結構ですので、もっとも近いと思われるものを選択してください。

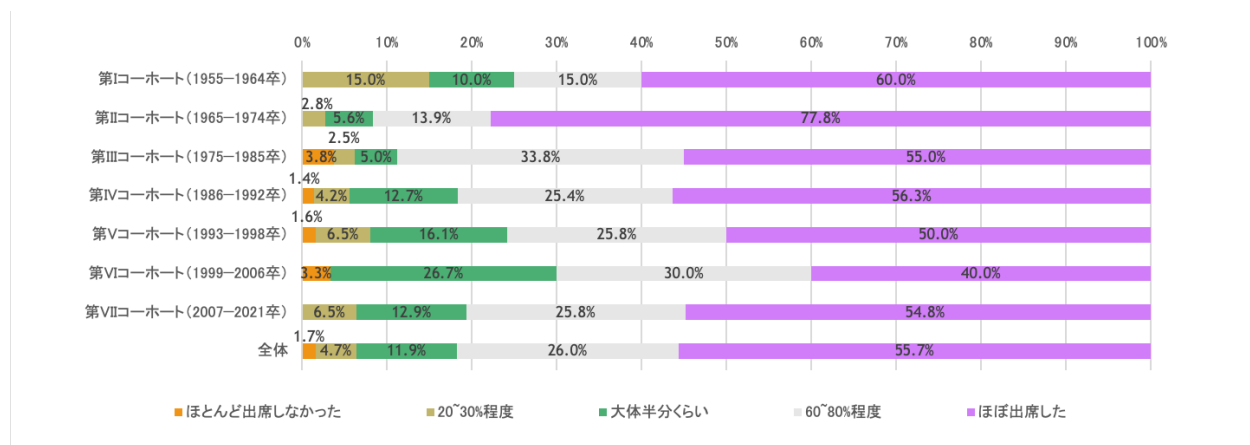


資産の総額をたずねたところ、1億円以上の資産を持つ人が30.7%であった。これらのことから、東大卒女性の家庭は自身の収入、配偶者の収入、世帯の収入、また資産において比較的豊かである人が多いと言える。

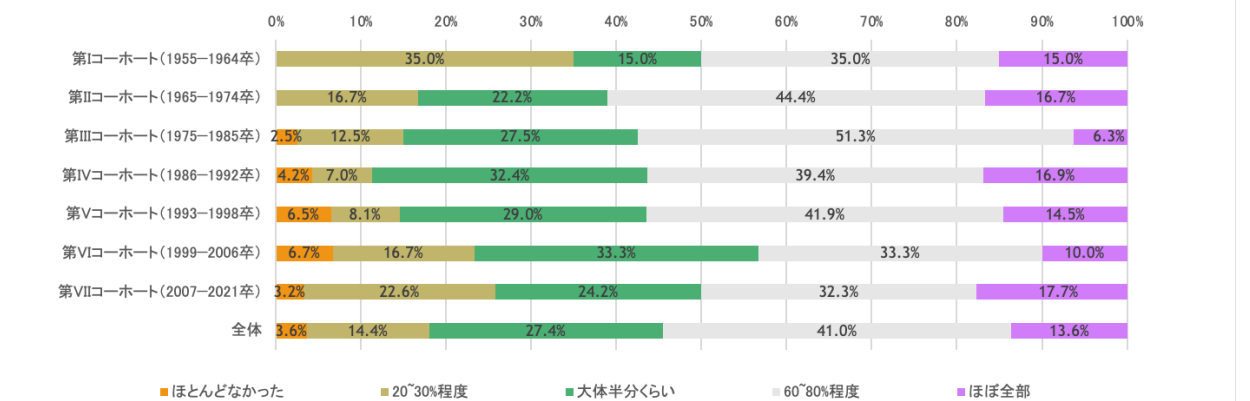
Part 6 大学時代について

『学業』

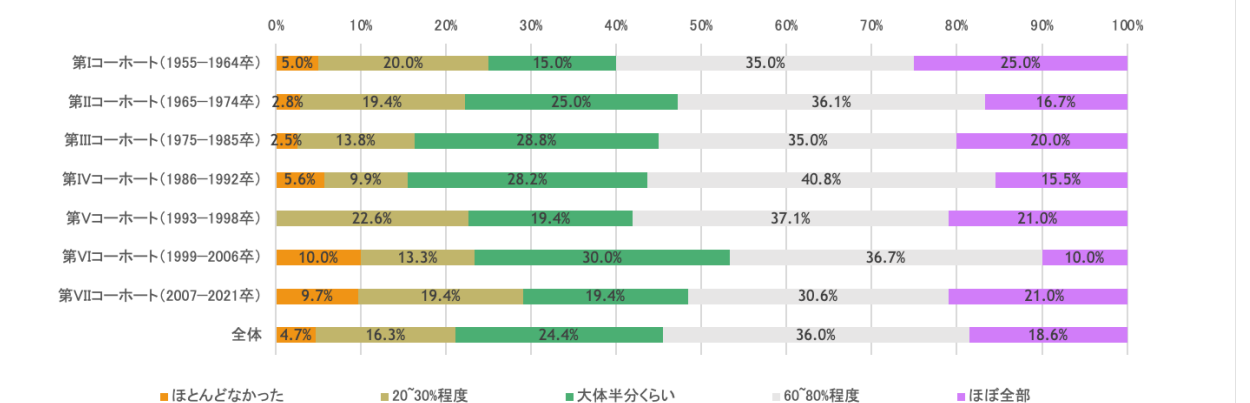
Q38-a 大学在学時、あなたが登録した講義・ゼミにおける「80%以上出席した」講義・ゼミの割合はどれくらいでしたか。おおよそで結構です。



Q38-b 大学在学時、教養科目で優はどれくらいありましたか。おおよそで結構です。



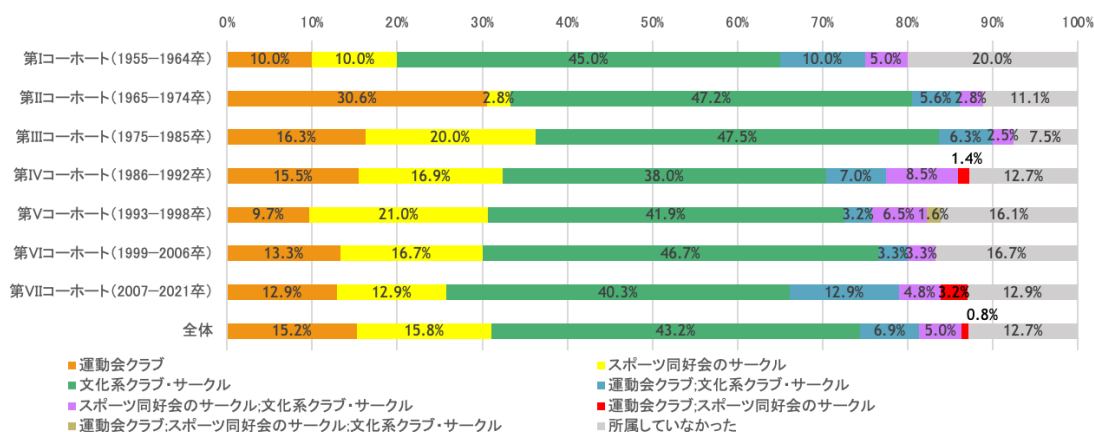
Q38-c 大学在学時、専門科目で優はどれくらいありましたか。おおよそで結構です。



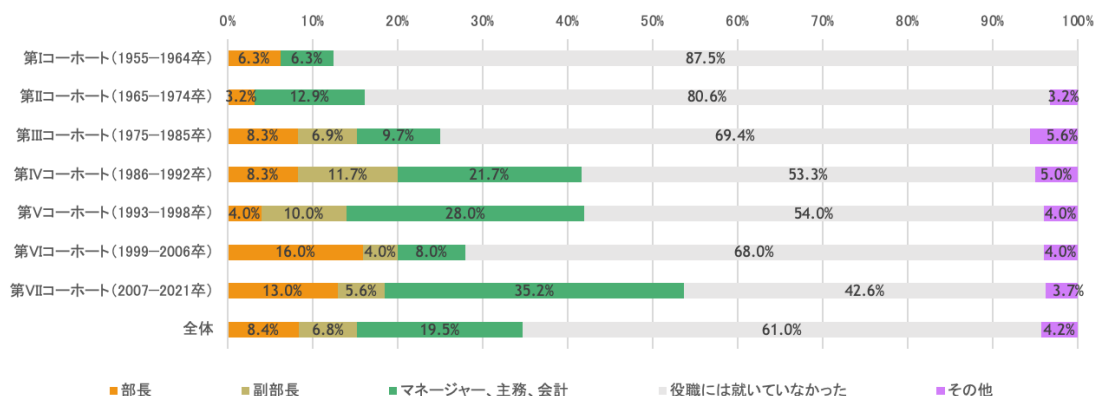
全体ではほぼ出席したといういわゆる「真面目な優等生」が半数を占めていた。また成績については、全体の半分以上が成績の60-80%が「優」（不可、可、良、優（優上）の順で高い評価となる）だったという回答で、こちらも真面目に勉強する学生が多かったようだ。

『クラブ・サークル』

Q39-a 大学時代にどのようなクラブ・サークルに所属していましたか。



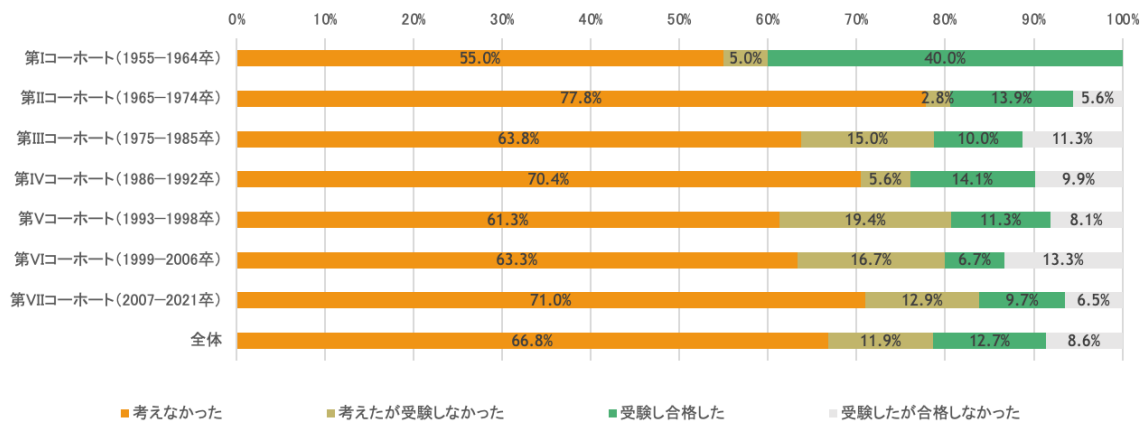
Q39-b クラブ・サークルに所属していた方に伺います。そこであなたが就いていた役職は何でしたか。



クラブ・サークルなど学外の活用については 87%が何らかの活動団体に所属していた。また世代が下がるほど何らかの役職についていた人は多く、東大女性の割合が過去数十年間 1 割から 2 割を低迷している中で、役職に就く女子学生の割合は多くなっているようだ。全体の 3 割以上に何らかの役職経験があったが、部長は 8.4%と少なかった。

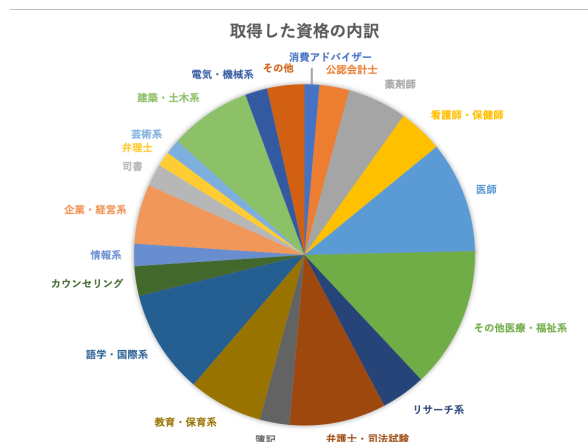
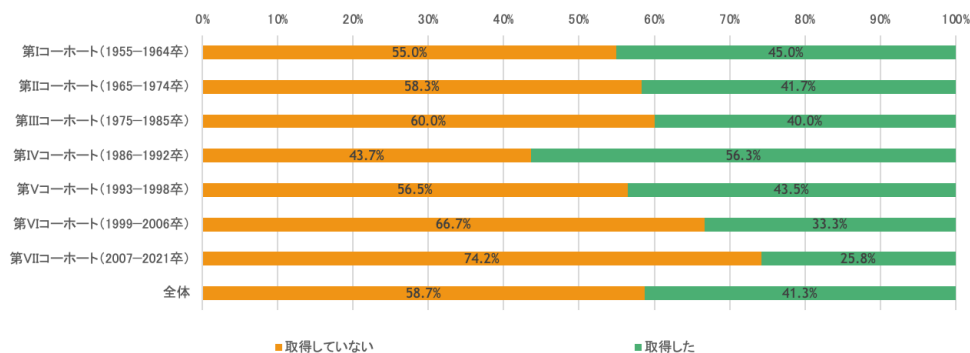
『資格』

Q40 大学時代、あなたは国家資格試験（弁護士、公認会計士など）の受験を考えたか。考えた方は、実際に試験を受けましたか。



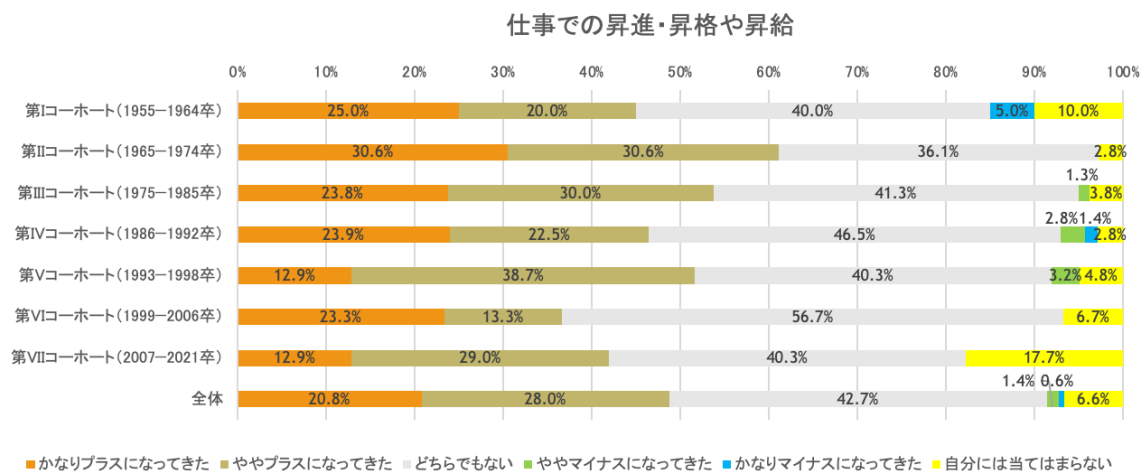
資格取得を考えなかったという割合が 66.8%で多数派だったが、第 1 コーホートは顕著に 40%が受験し合格したという人が多かった。資格を取得することが当時大卒女子への雇用差別が激しかった頃には就職のための武器の 1 つになったのではないかと考えられる。

Q41 大学卒業後、何らかの資格を取得しましたか。取得した方は代表的なものを 1 つお答えください。

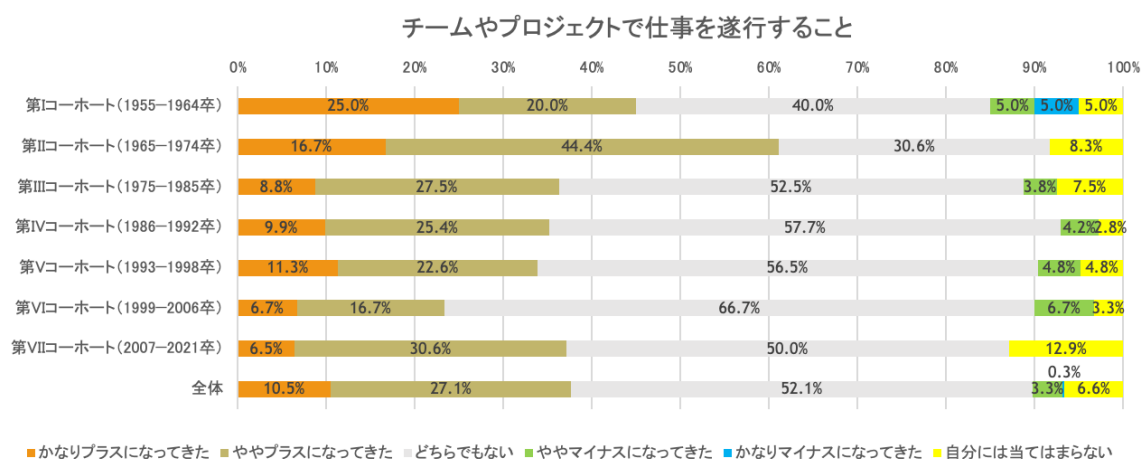


卒業してから資格を取得した人も 4 割程度で、そのうち医療系が特に多かった。

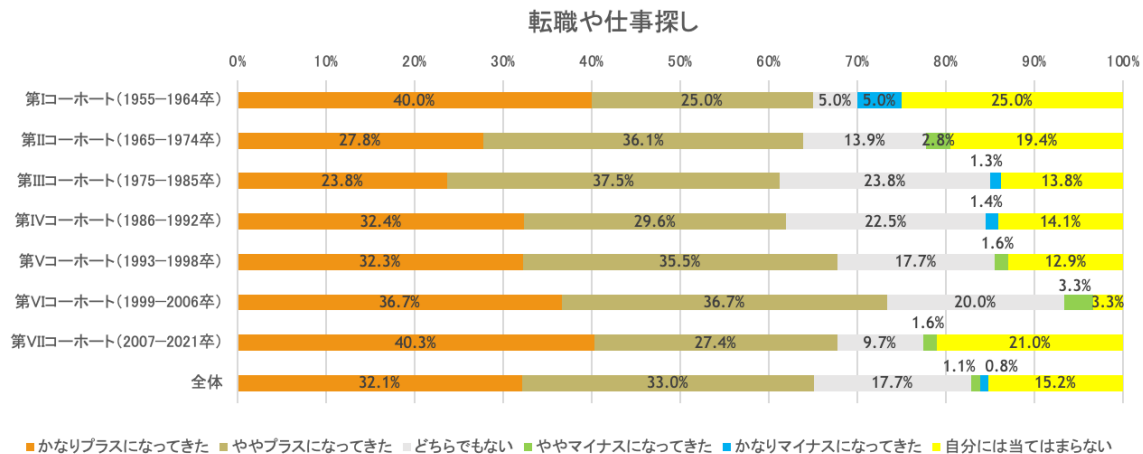
Q42 東大卒業という「事実」は、次の選択肢に関してプラスになってきたと思いますか、マイナスになってきたと思いますか。当てはまるものを選択して下さい。



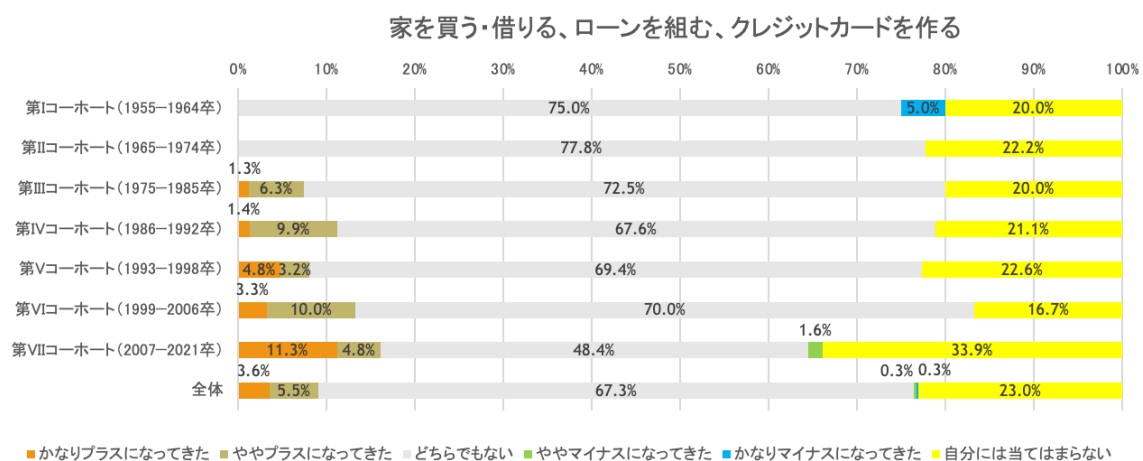
仕事の昇進、昇格、昇給においては東大卒がプラスに働く人が全体の半分弱いたものの、そうでもない人も半分いた。



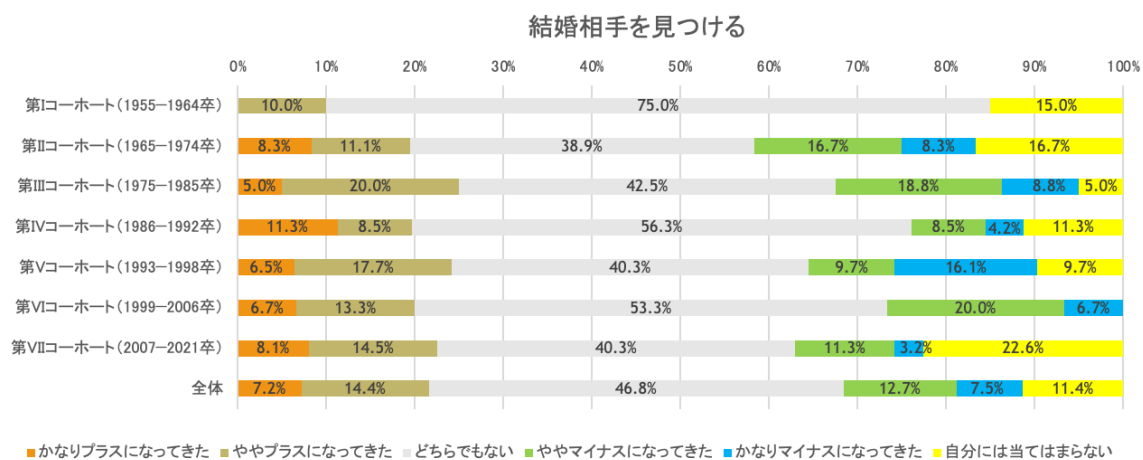
チームやプロジェクトでの仕事においては東大卒がプラスに働く人が 37.6%いたが、半数以上はどちらでもなかった。



仕事や転職においては東大卒がプラスに働く人が6割以上と顕著に多かった。

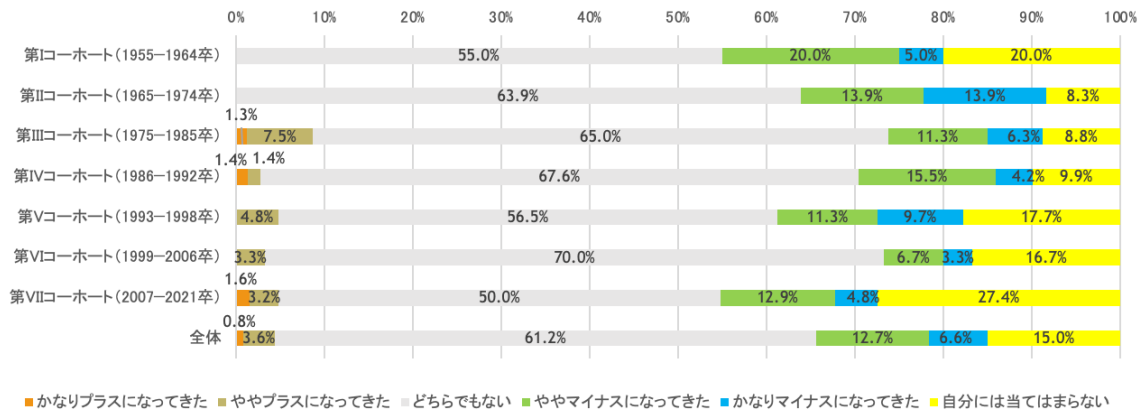


住居の契約やクレジットカードの作成においては東大卒がプラスに働く人が少なく 1割未満だったが、若い世代ほどプラスだったと答える人が多かった。



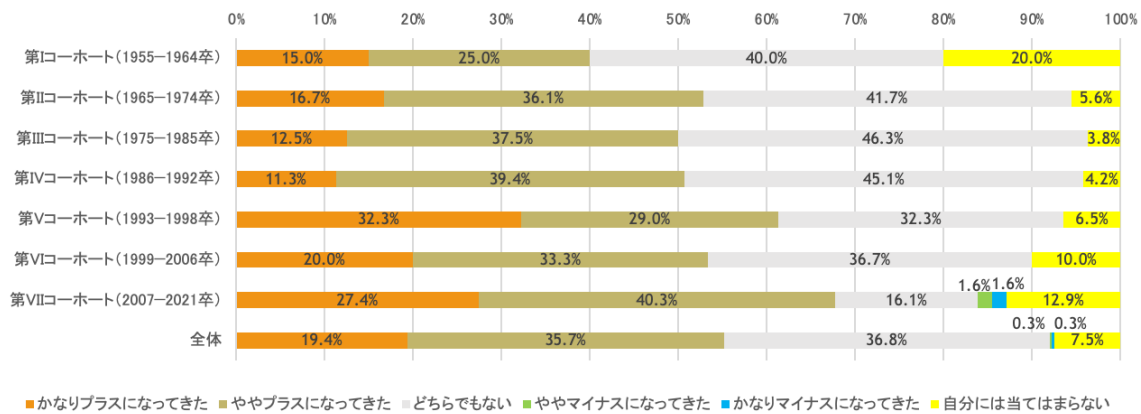
結婚相手を見つけることにおいては東大卒がプラスに働く人が全体で2割以上だった。関係ないと感じた人が半分弱で、マイナスになったという人も2割以上いた。

近所づきあいをする



近所付き合いにおいては東大卒がプラスに働く人が非常に少なく 4.4%であった。マイナスであると答えた人は全体では決して多数派ではないが、19.3%であった。少なくとも東大卒が近所付き合いにプラスに働く場面はほぼないのだろうとかがえる。

新しいことを始めたり、何か相談するときのツテを見つける



新しい挑戦などの相談相手においては東大卒がプラスに働く人が半数以上であった。マイナスであると答えた人はほとんど 0 に近い。東大卒であることで得られた人脈や縁は資産となっていることがうかがえる。

『自由記述』

自由記述では、143 件の回答があり、それぞれの「東大卒女性」への印象が語られた。記述内容は大きく 5 つのテーマに分類された。

最も多く見られた 1 つ目は「レッテルへの疑問視」。本アンケートでも示された 20 代から 80 代の幅広い世代に渡る卒業生には確かに一定の傾向はあるものの、決して一括りにできない。これは他の大学でも同様ではないだろうか。卒業生からは「特別視には疑問を感じる」「女性や東大でくくるのは属性と個性を混同するから差別が生まれる」などの声が上がった。

2 つ目は「社会貢献への意思」で、これは学業の道を極めることを応援してくれた両親や高校恩師、国立大学として国に環境を整えられたということから、恵まれた環境で育ててもらったことへの感謝や、その恩を社会に返してきたいという卒業生もいた。「後進のために頑張りたい」「声を上げていきたい」「田舎から進学して世界が広がったため恩師や両親には感謝しているし社会貢献したい」などの意見があった。

3 つ目は「学内で実際に受けた差別」についての告白。20 代卒業生よりは、より上の世代から過去東大であった差別的な扱いについての声があった。「教授からの性差別的発言」や「同僚からの心無い言葉」など、社会で女性が受けてきたものと同様に大学内でもこうした差別があったということが分かった。こうした差別が大学内でも改善されていることは 20 代、30 代からの「特段意識せずに大学生活を過ごした」という記述が増えていることからうかがえる。一方で「東大女性お断りのサークル」などは近年まで存在しており、それに憤る卒業生もいた。引き続き、大学にはこうした身体的性のみを理由とした非対称な扱いが存在していないか注視し、改善に向けて尽力いただきたい。

4 つ目は「東大の女性比率」について。この 10 年間で 2 割程度から変化がないことに対しての落胆の声が大きかった。自身が大学で貴重な経験や、卒業後も支えられた学友たちの存在があるため、後輩女性にもぜひこうした機会を得てもらいたいという思いがあるようだ。また海外で活躍する卒業生からは、「アメリカでの女医の多さへの安心感」「海外大学での男女比率がほぼ半々」「メディアにおける高学歴女性の表象の差」などの指摘があり、変わらない日本の男性中心社会への課題意識の高さが見られた。

5 つ目は「後輩への激励」であった。これまで挙げた 4 つのテーマを踏まえた上で、「他人の言葉に惑わされず、他人に自分の考えを押し付けず、自分らしく生きてほしい」「東大卒なんて関係ない、自分を信じて」など、大学で得た貴重な機会、経験を自分の糧にしていってほしいという卒業生の願いがあった。